

聖徒の道

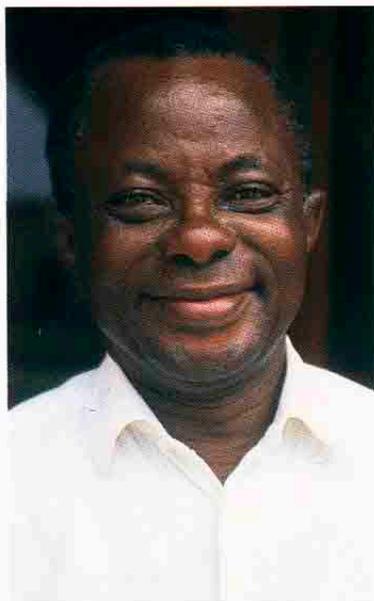
10
1996



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1996年10月号



表紙——ガーナに教会が設立される14年前から、ジョセフ・ウィリアム・ピリー・ジョンソン兄弟は『モルモン書』を使って福音を宣べ伝え、専任宣教師のために道を備えた。彼がともし手助けをした福音の炎は、現在、2つのステークと5つの地方部に集う1万人以上の会員たちの生活で輝きを放っている。

裏表紙——聖餐会を盛り上げ、喜びをもって歌うアクラステーク、テマワードの聖歌隊（「信仰あふれるガーナの人々」p.34参照。写真撮影／ドン・L・シール）。

こどものページ——救い主が十字架上でなくなり、エルサレムで復活された後、アメリカ大陸にいたニーファイの民はイエス・キリストを証する声を聞きました。「彼らは……天を見上げた。すると見よ、天から一人の男の方が降って来られるのが見えた。この御方は白い衣を着ておられ〔た。〕」（3ニーファイ11：8）ニーファイの民にイエス・キリストが姿を現されるまでの出来事を知るには、14ページの「モルモン書物語」を見ましょう。（絵／「西半球に姿を現されたキリスト」アーノルド・フリーバーク）

一般

大管長会メッセージ——愛の扉	
第一副管長トーマス・S・モンソン	2
エブリンのための書物 テレサ・ウルフ	16
悪から身を守る盾 クライド・J・ウィリアムズ	18
わたしの改宗の奇跡	
ジェルメヌ・エミリー・オーシャトレル・ゲイ	26
夜明け前 リト・バーネス・レガスピ	28
信仰あふれるガーナの人々 ドン・L・シール	34

青少年

ポケットナイフ	8
「ホリーの手紙」 ヤナ・ブライナー	11
家族のすべてに ローリー・リブゼー	12
伝道に備える	
ケーシー・ナル、アーロン・ランドル・ビューラー	30
「わたしたちは信じる」 ダグラス・J・フェルメーレン	46

定期特別記事

読者からの便り	1
家庭訪問メッセージ——耐え忍んで走る	25
モルモンメッセージ——悔い改め、霊を清める石けん	33

こども

小さなお友だちへ ハン・イン・サン長老	2
分かち合いの時間——いつでも正直で、せいじつに	
カレン・アシュトン	4
ちいさなみんなのために——	
「かみがまずわたしたちをあいして下さった」	
リディア・W・ワーデル	6
頭のたいそう	7
教会用語 ローラ・S・ショートリッジ	8
独りぼっちで歩いた日 アン・クローダー・ヘリック作	10
おもちゃばこ	13
モルモン書物語——キリストのしのしるし	14

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ホルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト
 十二使徒定例会：ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーグス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリング
 編集長：ジャック・H・ゴースリンド
 顧問：スペンサー・J・コンティ、L・ライオネル・ケンドリック
 教科課程管理部責任者
 実務部長：ロナルド・L・ナイトン
 企画・編集ディレクター：ブライアン・K・ケリー
 グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーク
 国際機関誌スタッフ
 編集主幹：マービン・K・ガードナー
 編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン
 編集副主幹：デビッド・ミッチェル
 編集補佐／こどものページ：ジェニファー・グリーン・ウッド
 工程管理：メアリーアン・マーティンデル
 出版補佐：ベス・デーリー
 デザインスタッフ
 機関誌グラフィックディレクター：M・M・カワサキ
 アートディレクター：スコット・バン・カンペン
 デザイナー：シェリー・クック
 制作主幹：ジェーン・アン・ピーターズ
 制作：レジナルド・J・クリステンセン、デニス・カービー、マシュー・H・マックスウェル
 予約購読スタッフ
 ディレクター：ケイ・W・ブリッグズ
 配送部長：クリス・クリステンセン
 マーケティング部長：ジョイス・ハンセン
 聖徒の道1996年10月号第40巻第10号
 発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 〒106東京都港区南麻布5-10-30
 電話 03-3440-2351
 印刷所 株式会社 リック
 定価 年間予約／海外予約2,400円（送料共）
 半年予約1,200円（送料共）
 普通号／大会号200円

Copyright©1996 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1994年8月 翻訳承認—1994年8月 原題—International Magazines October, 1996. Japanese, 96910 300
 ●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替（口座名／末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号／001006-41512）にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課☎03-3440-2351（代表）●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131／末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター☎044-811-0417

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. and Canadian subscription price is \$9.00 per year. SIXTY days' notice required for change of address. INCLUDE ADDRESS LABEL FROM A RECENT ISSUE; CHANGES CANNOT BE MADE UNLESS BOTH OLD ADDRESS AND NEW ONE ARE INCLUDED. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O. Box 26368, Salt Lake City, UT 84126-0368, USA. SUBSCRIPTION HELP LINE: 1-800-453-3860, U.S. EXT. 2947; CANADA EXT. 2031. CREDIT CARD ORDERS (VISA, MASTERCARD, AMERICAN EXPRESS) MAY BE TAKEN BY PHONE. PERIODICALS POSTAGE PAID AT SALT LAKE CITY, UTAH.

POSTMASTER: Send address changes to Salt Lake Distribution Center, Church Magazines, P.O. Box 26368, Salt Lake City, Utah 84126-0368, U.S.A.

すばらしい道具

教会に入って38年になりますが、毎月『デア・シュテルン』（ドイツ語版。「星」の意）が届くのを楽しみにしています。このすばらしい道具を活用して、ホームティーチングの準備をしています。大管長会メッセージを詳しく調べ、担当家族との話題に採り入れるのです。訪問の際、子供たちには『キンダー・シュテルン』（『こどものページ』）を使って福音を教え、子供の年齢に応じた活動を行っています。

『デア・シュテルン』は伝道にも役立ちます。わたしは靴修理店を営っていますが、店に来る小さな子供たちに『キンダー・シュテルン』をあげています。これは、子供たちの家族に教会を紹介するのに役立っています。

毎月『デア・シュテルン』を読むなら、証を強め、友人をキリストのもとに来るよう招くことができます。

スイス、ベルンステーク、
 アーラウ支部
 クルト・ブルンナー

主により選ばれる

1995年7月号の「主の御業」という、ゴードン・B・ヒンクレー大管長の総大会説教を読んだとき、大管長がわたしたち一人一人を愛してくださっているのを感じました。ヒンクレー大管長は地上で神の王国を導くために主によって選ばれた方です。

『リアホナ』（スペイン語版）は、友であり、相談相手であり、教師であり、宣教師です。この機関誌を毎月読むなら、教会の指導者や世界中の兄弟姉妹を知ることができます。これは主から受ける祝福です。

ペルー、リマ・マグデレナステーク、
 ボウリバルワード
 リディア・バルベルデ

聖文研究の助け

バプテスマを受けて教会員になってから、聖文を研究したいという望みがますます強くなってきました。救い主の生涯と教えについてもっとよく知りたいと思うのですが、聖文の言葉の多くはわたしには難しく理解できません。幸いに、1996年2月号の記事で「実験」と「実りある聖典研究のアイデア」という二つの記事を読みました。この記事にあった方法を試して、とても役立ちました。

これらのアイデアにとっても感謝しています。おかげで忍耐と信仰をもって聖文を読むことや、聖文研究の時間の作り方を学びました。

フィリピン、ソルソゴンステーク、
 ソルソゴン第2支部
 ラケル・L・マラガイ

教え

教会員になる前に読んでいた雑誌で、『リアホナ』（スペイン語版）のようにためになる書籍はありませんでした。毎月第1日曜に機関誌をもらうと、その日のうちに読み終えてしまいます。機関誌の発行回数が増えたと感じます。

1時間半かけてバスで通学していますが、かばんにはいつも『リアホナ』が入っています。この機関誌を使って、人に福音を紹介するときもあります。

毎年『リアホナ』を予約購読して主の教えを受けるのは、祝福だと思います。

メキシコ、クーイマスステーク、
 ミラマーワード
 リディア・アラセリ・ソト・タルラーサス



愛の扉

第一副管長
トーマス・S・モンソン

最近AP電を通じて、全世界で日常的に起こっている犯罪のリストがマスコミ各社に伝えられ、さらにそこから世界中の家庭に報じられました。

その記事の見出しは非常に短いもので、殺人、強姦^{ごうかん}、強盗、わいせつ罪、詐欺、横領、汚職などが際立ったものとして挙げられていました。わたしがメモを取った中には、「妻子を殺した後に、拳銃で自殺」「子供が変質者の逮捕に協力」「信用詐欺発覚。被害者多数、全財産を失う」などのタイトルがありました。気をめいらせるようなこのリストはさらに延々と続いていました。さながらソドムやゴモラの感があります。

エズラ・タフト・ベンソン大管長は、「わたしたちは邪悪な時代に生きている」とよく話しました。使徒パウロはこう警告しています。「人々は自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしめる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者……神よりも快樂を愛する者……となるであろう。」(2テモテ3:2-5)

現代の人々も、ソドムやゴモラの民と同じ運命をたどるのでしょうか(創世19:24-25, 29参照)。現代の人々にとって、ノアの時代の出来事は、教訓となっていないのでしょうか。「ギレアデに乳香」はなくなってしまったので



心の正直な人々に対する
主の招きの言葉が、今な
お優しくわたしたちの耳
に響いてきます。「見よ、
わたしは戸の外に立っ
て、たたいている。だれ
でもわたしの声を聞いて
戸をあけるなら、わたし
はその中にはい……るで
あろう。」

しょうか（エレミヤ8：22）。この世的な泥沼から義の世界へ抜け出す道はないのでしょうか。心の正直な人々に対する主の招きの言葉が、今なお優しくわたしたちの耳に響いてきます。「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはい……るであろう。」（黙示3：20）その戸口に名前を付けるとしたら、はたしてどのような名前がよいでしょうか。わたしはそれを「愛の扉」と呼びたいと思います。

愛は人の心を変え、また苦しむ人々を癒す乳香となります。しかし愛は雑草のように育つものではなく、雨のように黙っていても降ってくるというものでもありません。愛を育てるには、それなりの代価が必要なのです。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3：16）御子すなわち主イエス・キリストは、わたしたちが永遠の命を得られるようにするために、御自身の命をささげられました。御父とわたしたちに対する主の愛は、それほどまでに大きなものだったのです。

イエスはあの愛にあふれた感動的な別れの言葉の中で、愛する弟子たちに次のような勧告を与えられました。こう説かれたのです。「わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。」（ヨハネ14：21）そして次の戒めは特に多くの人々に影響を与えました。「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」（ヨハネ13：34）

小さな子供でも、愛について学ぶことはできます。子供には聖文に書かれている深遠な教えを理解するのは難しいことでしょう。しかし、次に紹介する詩の内容はすぐに理解できます。

『「母さん大好き」と、
小さなジョンが言いました。
でも自分の仕事はすぐ忘れ、
帽子を取ると庭に出て
ブランコ遊びに夢中です。
水くみ、まき運びはどこへやら。

『母さん大好き』と、
赤いほっぺのネルが言いました。
『口では言えないくらい大好きよ。』
でも一日中家の中でいたずらしたり、怒ったり。
ネルが外へ行くと

母さんはようやくほっと一息。

小さなファンが『母さん大好き』と
言いました。

『今日は何でもお手伝いするわ。
学校が早く終わってうれしいの。』

揺りかごの赤ちゃんをあやして
静かに寝かせ、
それからそっとほうきを取りに行き、
床を掃いて部屋掃除。
忙しくても楽しい一日。
子供にできる精いっぱいのお手伝い。

『母さん好きよ』と3人が
声をそろえておやすみ前のごあいさつ。
母さんはどの子がいちばん
自分を愛していると思ったでしょう。（ジョイ・アリスン "Which Loved Best?" 「どの子がいちばん」）

家庭は愛に満ちた安らぎの場所でなければなりません。互いに尊重し、礼儀正しくし、大切にすることは愛の表れであり、義にかなった家庭のしるしです。そのような家庭を築いている父親は、『モルモン書』のヤコブ書に書かれているような主の叱責を受けることはありません。「あなたがたは、同胞であるレーマン人よりもひどい罪悪を犯した。あなたがたは妻子の前に良くない手本を示して、感じやすい妻の胸を張り裂けさせ、子供たちの信頼を失った。彼らの心のむせび泣きが神のみもとに上って、あなたがたを訴えている。」（『モルモン書』ヤコブ2：35）

第三ニーファイの中には、主の次のような教えが書かれています。「これまでであったような論争が、今後は決してあなたがたの中にあってはならない。……

まことに、まことに、あなたがたに言う。争いの心を持つ者はわたしにつく者ではなく、争いの父である悪魔につく者である。悪魔は互いに怒って争うように人々の心をおり立てる。

見よ、互いに怒るように人々の心をおり立てるのは、わたしの教義ではない。このようなことをやめるようにというのが、わたしの教義である。」（3ニーファイ11：28-30）

愛のある所に論争はありません。愛があれば、争いは起こりません。愛のある所には、神もともにおられます。わたしたちには皆、主の戒めを守る責任があります。そうすれば、聖文に書かれている教えが生活の中に実を結

ることができます。ジョセフ・スミスはこう教えています。「幸福を得ることが、わたしたちの存在する目的であり目標でもある。幸福はそれに通じる道を歩む人に与えられるのである。その道とは、徳、高潔、忠実、清さ、そして神のあらゆる戒めを守ることである。」(Teachings of the Prophet Joseph Smith『預言者ジョセフ・スミスの教え』ジョセフ・フィールディング・スミス編、pp.255-256)

ミュージカルの名作、キャメロットの中には、すべての人に戒めとなる言葉が出てきます。後のギネビアにランスロットが横恋慕したときに、アーサー王はこう言いました。「激情に駆られて夢を台なしにしてはならない。」

また、すばらしい世界を夢見ていたアーサー王が語った真理の言葉として、次のような台詞が出てきます。「力あることが強さではない。優しさは弱さではない。」

この世の多くの人は、変革を叫び、助けの手が求められている状況を目の当たりにしても、「これはあの人たちの責任だ」とお定まりの言葉を口にするだけです。

家庭は愛に満ちた安らぎの場所でなければなりません。愛のある所に論争はありません。愛があれば、争いは起こりません。愛のある所には、神もともにおられます。

「あの人たち」という言葉を用いるのが間違っているのです。わたしが好きな考え方はこうです。「地上に平和を作ろう。そのためにはまず自分から始めよう。」わたしは次の話を読んだときに思わず涙を流してしまいました。アメリカ東部の町に住むある少年の話です。この少年はあるとき、道端に一人の浮浪者が寝ているのを見ました。彼は家に帰ると自分の寝室からまくらを持って来て、それを見ず知らずの浮浪者の頭の下にそっと置いてあげたのです。この少年は遠い昔に語られた「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」(マタイ25:40)という主の喜びの言葉を聞いたのではないのでしょうか。

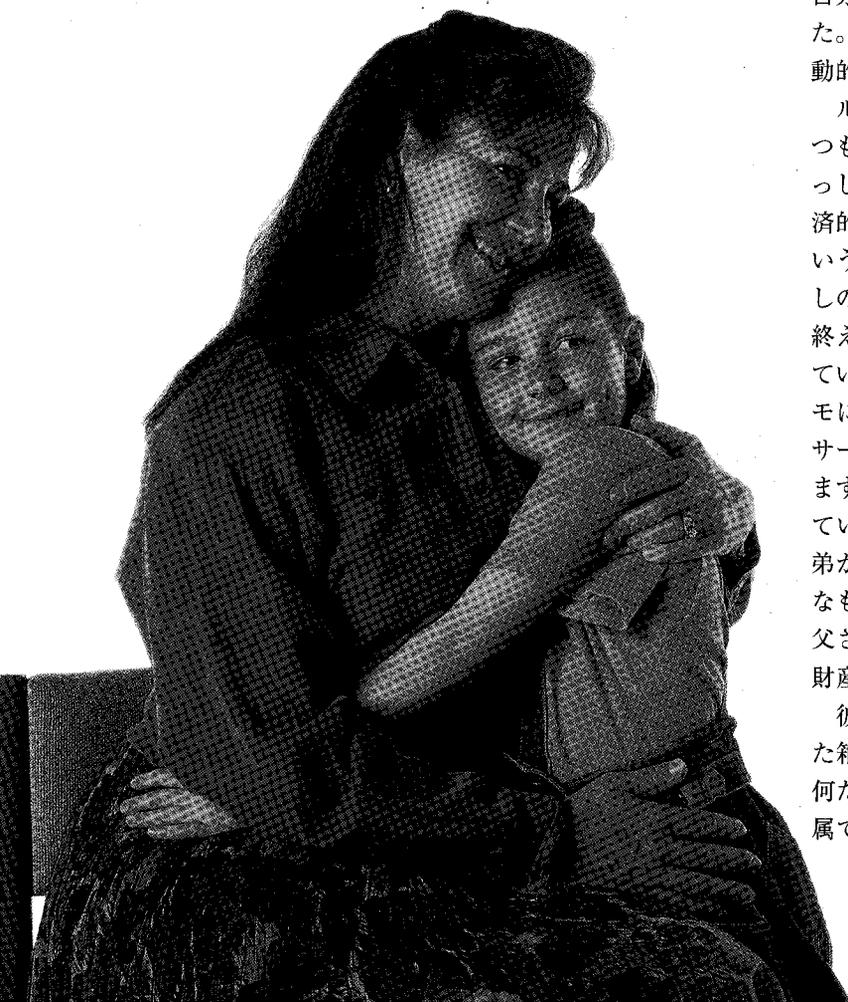
愛と思いやりの精神をもって飢えた人に食物を与え、裸でいる人に衣服を着せ、家のない人を温かく迎える人に賛辞を贈りたいと思います。すずめ1羽の死にも心を留めておられる御方が、そのような行いに心をかけてくださらないはずがありません。

励ましを与えようとする望み、自発的に助けようとする心、施しをする慈悲深さは愛に満ちた心から生まれます。ある母親の話の思い起こすと、愛に満ちた思いやりの心がなぜか胸を満たします。

数年前のことです。一人の友人が他界しました。ほかのだれよりも人々に援助の手を差し伸べ、賛辞を贈り、自分の時間と才能と持てる物を惜しみなく与えた人でした。名前をルイスと言います。彼はかつて次のような感動的な話をしてくれました。

ルイスの母親がこの世を去ったときでした。彼女はいつも穏やかな言葉遣いをする、優しい母親でした。がっしりとした体つきの息子たちや愛らしい娘たちに、経済的には何も残せませんでした。模範、犠牲、従順という点では、豊かな遺産を残しました。葬儀では故人をしのぶ賛辞が述べられ、墓地へ続く悲しみに満ちた旅も終え、子供たちは母親の残したわずかな所持品を整理していました。ルイスはあるメモと鍵を見つけました。メモにはこう指示がありました。「寝室の隅にあるドレッサーのいちばん下の引き出しに小さな箱がしまっています。わたしが心から大切にしている宝物が、中に入っています。鍵はその箱を開けるためのもの。」ルイスの弟が言いました。「母さんが鍵までかけて保管する貴重なものって、何だろうね。」妹が言いました。「随分前に父さんを亡くしてから、母さんには、世俗的な意味での財産なんてほとんどなかったはずよ。」

彼らはドレッサーの引き出しから大切にしまわれていた箱を取り出し、鍵を使って慎重に開けました。中身は何だったでしょう。現金でも、権利証でも、高価な貴金属でもありません。ルイスが箱の中から手に取ったもの



は、色あせた父親の写真でした。裏にはメッセージがしたためられていました。「愛する夫とわたしは、1891年12月12日、ソルトレーク・シティーの主の宮で、この世から永遠にわたって結び固められた。」

次に出てきたのは、子供たち一人一人の写真でした。それぞれ名前と誕生日が書き添えてあります。最後に出てきた1枚の手製のバレンタインカードを、ルイスが明かりにかざして見ると、稚拙な子供の字が読み取れました。自分の書いたものです。ルイスは60年も前に自分の書いた文字を読み上げました。「お母さん、愛しています。」

皆の心が感動に包まれ、声が詰まり、目が涙でぬれました。母親の宝物とは、彼女の永遠の家族だったのです。その堅固な家庭は愛という礎の上に築かれていました。

ある詩人は、「愛は人間の特質として最も高貴なものである」と書いています。ある学校の教師が自分の指導方針として語った次の言葉には、彼女の愛がよく表れています。「わたしのクラスでは、だれも落ちこぼれる人はいません。わたしにはすべての生徒が成功できるように助ける責任があります。」

ソルトレーク・シティーに住む、すでに社会の第一線を退いた、ある神権定員会の指導者がわたしにこう話してくれました。「今年わたしは、失業していた12人の兄弟に仕事の世話をしました。これまでこんなに幸せな気

持ちを感じたことはありません。」彼は背の低い人で、親しみを込めて「リトル・エド」と呼ばれていましたが、涙を浮かべ、声を詰まらせながら語るその日の彼はとても大きく見えました。彼は助けが必要な人々に手を差し伸べて、愛を示したのです。

がっしりとした体格で、鶏肉の卸し業を営んでいるある兄弟がいます。彼は24羽分のローストチキンの代金を払おうとした人に、一言、愛の言葉をかけました。「これはひょっとして夫に先立たれた女性に差し上げる贈り物じゃないですか。だったら、お金は要りませんよ。」彼は口ごもりながらも、さらにこう付け加えました。「もっと必要だったら遠慮しないで言ってください。」

何年も前のことですが、モーガン高校のフットボールチームがユタ州一の座をかけてミラード高校と対戦しました。そのとき車いすに座ったモーガン高校の監督ジャン・スミス兄弟は選手たちにこう言いました。「これは君たちの人生で最も大切な試合だ。負ければ生涯悔いを残す。でも勝てば、いつまでもすばらしい思い出とすることができる。一つ一つのプレーを大切に戦うんだ。」

そのときドアの後ろに、彼が親しみを込めて自分のチーフアシスタントと呼ぶ奥さんが立っていました。彼女の耳にスミス兄弟がこう言うのが聞こえてきました。「わたしは君たちを愛している。試合のことは心配していない。わたしは君たちが大好きだし、ぜひ試合に勝ってほしいと思っている。」そして劣勢を予想されていたモーガン高校は試合に勝ち、ユタ州一の座を獲得したのです。

真実の愛は、キリストの慈愛の表れです。毎年12月になると、わたしたちはその愛の精神を、クリスマススピリットと呼びます。わたしたちはその精神を実際に見たり聞いたり感じたりすることができます。しかし自分独りではできません。

わたしはある年の冬に、子供時代の一つの出来事を思い出しました。わたしがまだ11歳だったある日のこと、初等協会の会長メリッサに、話したいことがあるので初等協会の後で残ってほしい、と言われました。彼女はすでにかなりの年配で、白髪交じりの頭をして

ルイスが箱の中から手に取ったものは、色あせた父親の写真でした。次に出てきたのは、子供たち一人一人の写真でした。最後に出てきた1枚の手製のバレンタインカードを、ルイスが明かりにかざしました。



いました。わたしはがらんとした礼拝堂の中でメリッサと会いました。彼女はわたしの肩に手を置くと、涙を流し始めました。わたしは驚いて、どうして泣くのかと尋ねました。すると彼女はこう答えました。「初等協会の開会行事のときにどうしてもトレイル・ビルダーのクラスの男の子たちを静かにさせることができないの。トミー、あなたの助けがほしいの。」わたしは「分かりました」とメリッサに約束しました。問題はすぐに解決しました。どうしてそんなに早く解決したのか、わたしには理由がよく分かりませんでした。しかしメリッサには当然の結果でした。彼女が働きかけたのは問題の張本人であるわたしだったからです。愛が問題解決の鍵でした。

それから何年もたち、あのすばらしいメリッサはすでに90歳を過ぎ、ソルトレーク・シティーの北西部にある老人ホームに身を寄せていました。もうすぐクリスマスというある日、わたしは、大好きだったメリッサを訪ねて、その老人ホームに行ってみようと思い立ちました。自動車のラジオから流れてくる「天にはさかえ み神にあれや」という歌声を聞きながら、わたしは遠い昔の博士たちの物語を思い出していました。博士たちは黄金、乳香、没薬などの贈り物をささげました。しかしそのときのわたしにあったのは、彼女への愛と感謝の言葉を伝えたいという気持ちだけでした。

メリッサは老人ホームの食堂にいました。彼女は皿をじっと見詰めながら、年老いた手に持ったフォークでそこに盛られた食べ物をつついていました。でも、一口も食べてはいません。わたしは話しかけましたが、彼女は優しい、しかしながらぼんやりとした表情でわたしを見ているだけでした。わたしはフォークを取って彼女の口に食べ物を運んであげ、その間ずっと彼女が初等協会の会長として子供たちのために一生懸命働いてくれたことについて話し続けました。しかし彼女はわたしの話にうなずきもしなければ、一言も返事をしません。げげんそうな顔をしてわたしを見ていた同じ老人ホームの二人の老人が、「彼女に話しかけても無駄よ。自分の家族さえ忘れているのだから」と言いました。「ここに来てから一言も口を利いたことがないのよ。」

やがて食事も終わり、わたしはその一方通行の話をやめて家に帰ろうと立ち上がりました。彼女のか細い手を握り、しわの寄ったしかし美しい顔をのぞき込んで「メリッサに、神の祝福があるように。メリークリスマス」と最後のあいさつをしました。すると驚いたことに、彼女が口を開いたのです。「わたし、あなたを知っているわ。初等協会のクラスのトミー・モンソンでしょ。ほんとうに愛しているわ。」そして彼女はわたしの手に愛のこもったキスをしてくれました。彼女の頬に涙が伝い、

握り合った二人の手の上にこぼれ落ちました。その日、わたしたちの手は神によって清められ、美しい涙で飾られたのです。天使たちの歌声が聞こえるようでした。外に出ると、空は目の覚めるような青い色をしていました。そして空気はすがすがしく、雪は輝くばかりの白さをたたえていました。わたしは主の次の言葉をかつてないほどに親しく感じました。「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です。」それから主は弟子に言われました。「ごらんなさい。これはあなたの母です。」(ヨハネ19:26-27)

人、皆眠りて 知らぬ間にぞ
主なるキリストは 生まれたもう
あしたの星よ うたいまつれ
神にはみ栄え 地に平和と

主のたまものこそ 奇しけれや
静かに恵みの 露は降る
罪のこの世に かかる恵み
天より来べしと 誰かは知る

(「ああ、ベツレヘムよ」『賛美歌』122番)

すばらしい贈り物が与えられ、天の祝福が注がれました。キリストが、愛という名の扉を通して入って来られたのです。□

ホームティーチャーへの提案

- ① わたしたちは周囲の世俗的な事柄に心を奪われる必要はありません。主に心を向けることができます。主はこう言われました。「わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはい……るであろう。」(黙示3:20)
- ② 主の声に耳を傾けるよう人々に働きかけるには、わたしたちは愛の扉を開ける必要があります。愛は人の心を変え、また苦しむ人々を癒す乳香となるからです。
- ③ 愛には代価が必要です。愛に満ちた生活や家庭は論争や争いを遠ざけます。愛のある生活は暴力を締め出し、激情に駆られて夢を台なしにするのを防ぎます。そして、哀れみと愛に満ちた思いやりの心をもたらしめます。
- ④ 愛に満ちた生活や家庭は、次のようなメッセージに心を向けます。「地上に平和を作ろう。そのためにはまず自分から始めよう。」

ポケットナイフ

匿名

そのポケットナイフは、棚からひもでつるされて、ずっとクローゼットの中に置かれたままでした。時々、クローゼットの床から何かを取ろうとして、ひごをかがめると、そのナイフが頭に当たります。これまで、ほんの数回だけ、そのナイフを使おうと思ったことがあります。キャンプのときや、パンを切ろうとしたときなどです。しかし、実際に使うことはありませんでした。

わたしは、こんなナイフが欲しいとずっと思っていました。そのナイフはサイズもわたしの好みにぴったりでしたし、取っ手の部分は、鹿の角でできていました。しかし、ナイフはつるされたまま、振り子のように揺れるだけで、使われることはありませんでした。わたしはほんの2、3回、そのナイフを実際に手に取ったことはあります。その鋼の刃と付属品の部分の一つずつ開いてみました。ここウルグアイの気候の中で、そのナイフは、もうすでに少しさび始めていました。

わたしは随分以前に、そのナイフは絶対に使うまいと、決心していました。まず第1に、そのナイフを手にする度に、わたしの良心が痛んだからです。2番目の理由は、もし自分がそのナイフを使ったら、自分にとってかけがえのない親友を失ってしまうという危険を冒すことになるからです。もうお分かりのように、そのナイフはその親友のものだったのです。わたしがそれを盗んだのです。

それはほんとうにあっという間の出来事でした。わたしたちの支部の青少年のグループが集まっているときに、たまたまちょっと慌ただしい時間があったのです。そのとき、アリエルは自分のナイフがなくなったことに気づきませんでした。そしてそのナイフがわたしにとって大きな心の痛みになりました。

それからの2年間というもの、わたしはそのナイフのことが片時も頭から離れませんでした。そのつらい経験を通じて、わたしはどんな状況にあっても、自分の持ち物でもない物を取るような過ちは二度と繰り返すまいと

決心していました。しかし、そのナイフ自体について言えば、わたしの心は揺れ動いていたのです。再三再四悩みながらも、そのナイフをどう処理したらいいのか、決めかねていました。

ところが今になって、そのナイフについて考えなければならぬ、新たな理由が舞い込んだのです。わたしたちの祭司定員会では、ワードのローレルクラスと一緒にファイヤサイドを開く準備をしていました。そのファイヤサイドは、日曜日の午後に開かれることになりました。そして祭司たちが、福音のある原則に焦点を当てて、研究発表をすることになったのです。

わたしたちが選んだ原則は「悔い改め」でした。そして、一人一人が罪の悔い改めについて、その段階を一つずつ説明していくことになりました。つまり、何か間違ったことをしたと認識すること、それを後悔すること、告白すること、償うこと、二度と同じことをしないと決意すること、という段階です。幸か不幸か、わたしには償いというテーマが与えられました。

もちろん、わたしはすぐにポケットナイフのことを思い出しました。一体どうしたらいいのでしょうか。ウルグアイではほかの教会員と交わる機会が限られているため、ファイヤサイドを欠席したり、友達と一緒にいる機会を自ら捨てたりするようなことは、考えも及びません。でも、ナイフを盗んでしまったという罪の意識が自分の心におもしのようにのしかかっている状態のときに、償いだとか悔い改めについて語れるのでしょうか。

結局、わたしはクローゼットのひもからそのポケットナイフを外し、見た目だけでも新しくしようと、あらゆることをしてみました。クレンザーと潤滑油を混ぜて、付属品の一つずつ磨いてみたり、以前アルバイトをしたことがある工場の機械工に相談して、溶剤で洗浄してみたりもしました。しかし、すでにさびが金属の中まで入り込んでいて、ナイフを昔どおりにするのは不可能でした。



ファイヤサイドのある日曜日に、教会でアリエルに会い、すぐに、ちょっと教室までついて来てほしいと言うと、アリエルは驚いた様子でした。

「どんな内緒話があるっていうんだい。」アリエルが尋ねます。

「君に渡す物があるんだよ。」わたしはそう言って、ポケットからナイフを取り出し、彼の両手に握らせました。

「これは何だい。」

「ぼくが君から盗んだナイフだよ。」

「君が？ ぼくから盗んだって？ まさか。」

「ほんとうなんだよ。ぼくが君から盗んだんだよ。」

「ぼくはどこかに忘れてきたんだと思っていたよ。どこで見つけたんだい。」

アリエルはわたしの話を信じたくないと言いました。

そのため、わたしは自分がそのナイフを盗んだときの状況を詳細に説明しました。「アリエル、ぼくを赦してくれるかい。」話し終えるとわたしはそう尋ねました。「君がぼくのことを赦してくれるかどうか、どうしても知りたいんだよ。」

アリエルはわたしを抱き締めました。わたしも彼を抱き返し、一緒に涙を流しました。そして、アリエルがこう言ってくれたのです。「ぼくたちは友達だよ。もちろん赦すよ。」わたしたちは一緒に祈りをささげ、もう一度抱き合うと、教室を後にしました。そこで起こったことは、わたしたち二人以外にはだれも知りません。

その日の研究発表はほんとうにすばらしいものでした。そして、リフレッシュメントのおいしかったこと！わたしは、あの日、それまでに味わったことのないほどの幸福感に浸っていました。□





今まで、わたしは自分自身について、とても否定的な感情を抱いていました。今日のわたしは何てみっともないのかしらとか、わたしって何て太っているのとか、髪がくしゃくしゃだわといった具合に、いつも何かしら友達に愚痴をこぼしていました。でもあることをきっかけに、わたしは変わりました。

わたしには、ホリーという、すばらしい友達がありました。聞き上手で、一緒にいると楽しくなるような女の子です。ある日の放課後、ホリーはわたしに手紙をくれました。封筒には「家に帰るまで開けないで」と書かれています。もちろん、好奇心が頭をもたげ、その場ですぐに読みたくてたまらなくなりました。けれどやはり、家に帰ってからじっくり読むべきだと考え直し、手紙を開くのを我慢することにしました。

一体何が書いてあるのかしらと、わたしは、予想し得る最悪の内容についても、思いを巡らしました。帰宅して、手紙の封を切ると、そこには「あなたはすばらしい人です。あなたが特別な存在であることを、決して忘れないでいてください」と書かれていました。そして、彼女から見たわたしの長所がずらりと書き添えられていました。この手紙を読んでもみると、今までこれらの長所に少しも気づかずに過ごしてきたことが不思議な気さえしました。この手紙で、ホリーはわたしは自分自身について肯定的な思いを持つきっかけを与えてくれました。彼女のおかげでわたしは、自分が神の娘であり、神がわたしを愛してくださっていることを思い出せたのです。

わたしたちが自分を価値のないものと見下すことを、サタンは望んでいます。自分の価値を見いだせないときには、後になって悔やまれるような行動を取ってしまうものです。

現在も、そしてこれからも、主はいつもわたしたちを愛してくださっています。イエスはわたしたちの弱点だけに目を留められるのではないことを、今ではよく分かっています。主はわたしたちの長所も、御覧になっているのです。ホリーの手紙のおかげで、わたし自身も天のお父様から愛されている特別な一人であることを、知ることができました。□

「ホリーの手紙」

ヤナ・ブライナー





家族のすべてに

ローリー・リブゼー

PHOTOGRAPHY BY LAURY LIVSEY, RICHARD ROMNEY,
AND COURTESY OF THE WONG FAMILY

黄潤弟は、1984年9月のある暖かな夜のことを思い出しています。それは、彼女の人生を変えた夜でした。黄家族は、香港の新開地区の屯門にある、湖月樓公営住宅の21階に住んでいます。その夜、15歳の、英語名でベルと呼ばれている黄潤弟が夕食を食べていると、ドアをノックする音が聞こえました。戸口には、白いワイシャツにネクタイを締めて、胸に妙な黒い名札を着けた見たことのない二人の人が立っていました。ドアは開いていましたが、まだ鍵がかかったままの金属製の門越しに、その二人は彼女に話しかけました。

食事中だったので、ベルは、1時間たってからまた来るようにと言いました。「わたしは宗教に関心がありましたし、何が真実なのか知りたいと思っていましたから。ジョセフ・スミスのように、どの教会が真の教会かほんとうに知りたかったのです」とベルは当時を思い出します。

宣教師たちが戻って来たとき、彼女は行儀よく彼らのメッセージに耳を傾けました。その後で、宣教師たちは彼女に『モルモン書』を渡し、祈ってから帰って行きました。簡潔なレッスンでしたが、ベルには大きな印象を残しました。「祈ったときに、心にとてもし思議な、よい気持ち

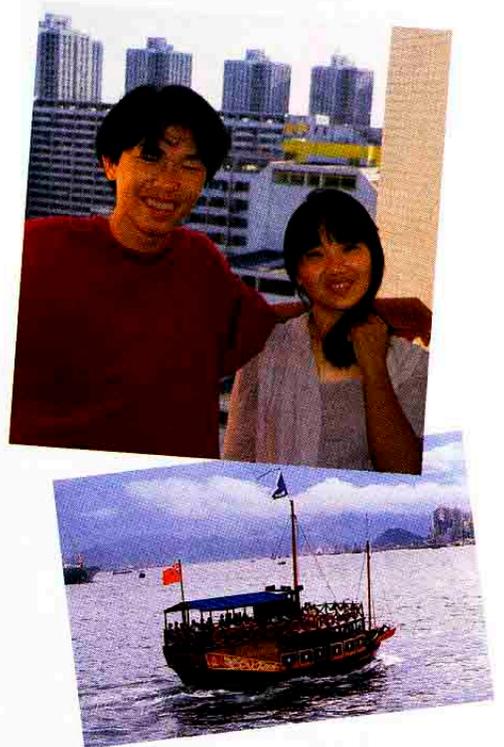
を感じたのです」と彼女は言います。

1か月後、ベルはバプテスマを受けました。彼女のほんとうの努力が始まったのは、その日からでした。黄洪全と黄梁銀好夫妻の2番目の子供のベルは、自分の生活において非常に重要なものとなった福音の喜びを、両親や姉妹、弟にも経験してほしいと思いました。彼女は自分が学んだことを伝え始めました。

それから10年以上たった今も、彼女は福音を伝え続けています。あの小さな始まりから、今では両親と黄家の8人の子供のうち7人が教会の会員になるまでになったのです。ベルは香港で伝道し、妹のアンジェラとメイも同じく香港で伝道しました。

ベルの家族への模範は、英語名をランボーといういちばん下の妹黄灶好と、黄弟の黄華根（英語名はサイモン）にも大きな影響を与えました。現在、ランボーもサイモンも10代の青少年となっています。

「会員になる前は、いつもベルに注目していました」とサイモンは言います。彼は1992年にバプテスマを受けました。「彼女は怠けたりしませんでした。日曜日は毎週、早く起きて教会に行っていました。ベルが宣教師だったときも、家族の良い模範となって、わたしたちを助けてくれました。」



バプテスマを受けてから、ベル（左ページ）は家族に福音を伝えた。左上——ベル（前列中央）と黄家の姉妹たち。アグネス（左）、ランボー、マンディ（右）。右上——ベルの弟サイモンと妹のランボー。

数年前からその珍しい英語名を使いだしたランボーも、自分の改宗に姉の影響があったことを認めます。「まだバプテスマを受けていないのに、小さなときから毎週日曜日にベルと教会に行き始めました」と彼女は思い起こします。「でも、^{せいさく}聖餐は取りませんでした。」

ここから物語は意外な展開を見せます。

「教会員の多くは、わたしを教会員だと思い込んでいました」と彼女は言葉が続けます。「宣教師が教えている求道者たちをフェローシップするよう、よく会員たちから頼まれたものです。わたし自身も求道者だったので。それから年がたつにつれ、わたしの証も強まり、教会についてさらに学んでいったのです。」

1990年、ランボーはついにバプテスマを受け、今度はベルと協力して、サイモンと4人の姉たち、マンディ、メイ、アンジェラ、アグネスに福音の原則を教えることになりました。毎週日曜日は教会で、今度は「正式に」求道者のフェローシップを続けました。「子供のころは、遊ぶこと、楽しいことが好きでした。でも、大きくなるにつれて、証を、それも真の証を得ることができました。その証をほかの人々に伝えたかったのです」とランボーは言います。

ランボーが最初に福音を伝えたいと思ったのは、姉のアグネスでした。彼女はアグネスを教会に誘いました。ランボーより2歳年上のアグネスは、次

のように言います。「初めて教会に行ったときは、かなり退屈に感じました。宣教師たちと話すのは楽しかったのですが、教会について話したいとは思いませんでした。でもランボーは、わたしが福音をもっと理解できるよういつも助けてくれました。また、ベルが教会に対してとても真剣に取り組み、多くの犠牲を払う姿を見て、わたしもようやく教会について勉強する決心をしました。それに、ランボーが教会から良い影響を受け始めたのが分かるようになっていましたから。」

ランボーは、サイモンにも福音について話し、彼がバプテスマを決意するのを助けました。

家族への福音の分かち合いは、次のように広がっていきました。まず二人の宣教師がベルと話をしました。ベルは教会に入り、ランボーをフェローシップし始めました。ランボーがバプテスマを受け、アグネスとサイモンに福音について話しました。そしてアグネスとサイモンがバプテスマを受け、次に長女のマンディとメイとアンジェラ、両親がそれに続いたのです。

サイモンは、福音を真剣に学び始めたころのことを思い出すのが好きです。初めて祈ったときのことを今でも覚えています。「どうやって祈るのか、何を言ったらよいのかも分かりませんでした」と彼は回想します。「でも祈ると、いつもすばらしい気持ちになりました。」

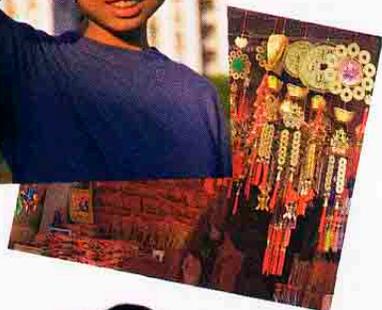
教会に入る前、サイモンにとって日

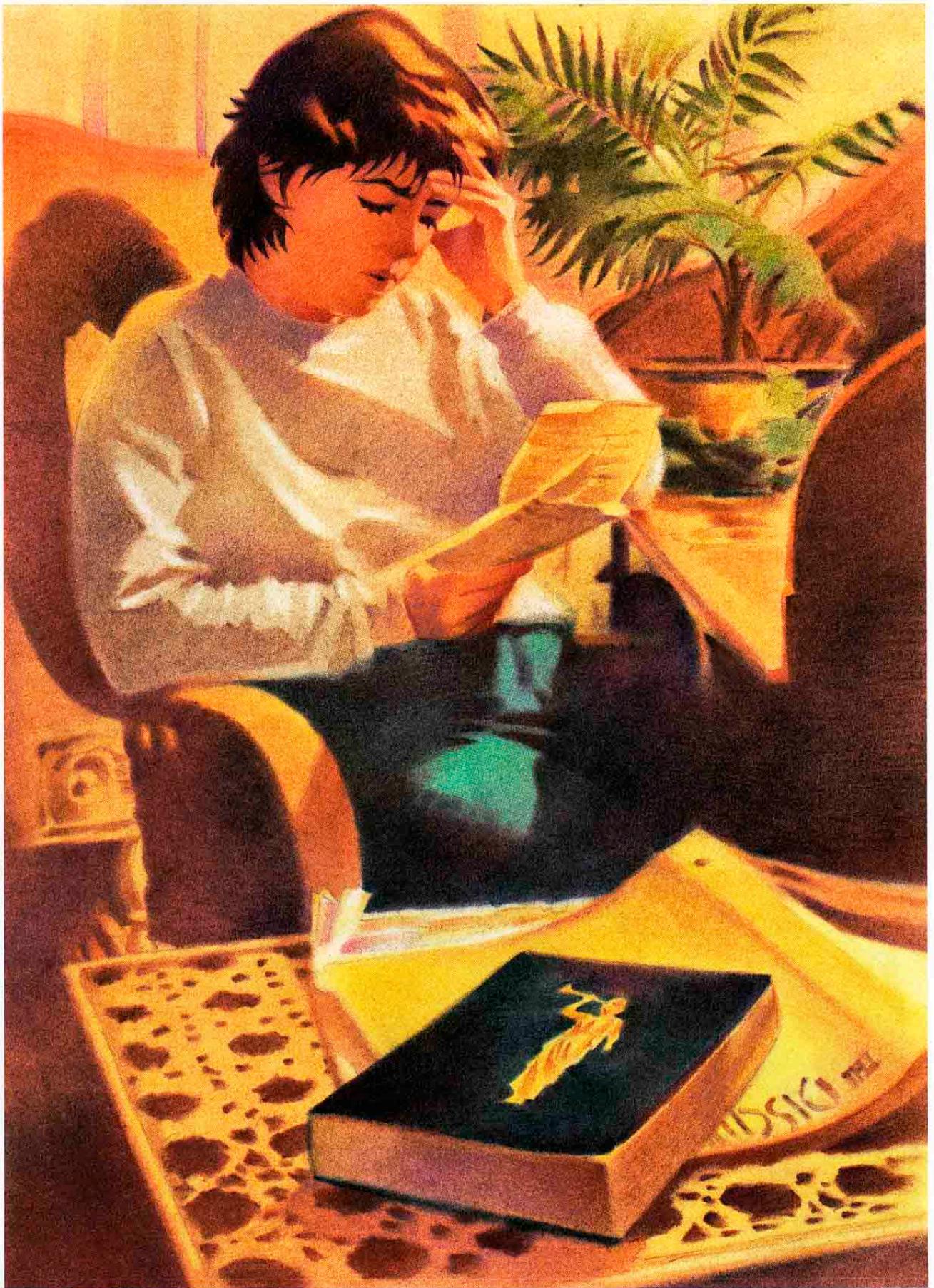
曜日は、休んだりリラックスしたりする日でした。朝はたいてい起きるのが遅く、起きてからは友達とサッカーをしていたものです。今では、友達には安息日には試合に誘いに来ようともしません。「友達には、もうそういうことはしないだと言っていますし、なぜぼくが日曜日にサッカーをしないのか、その代わりに何をしているのかをよく分かってきています」と彼は言います。サイモンは、日曜日を教会の集会に出席したり、聖文を読んだりして過ごします。「『モルモン書』を勉強するのが大好きです。特に、リーハイと彼の信仰について読むのが好きなんです。ぼく自身の信仰がまだ強いとは言えませんが、ほんとうに強い信仰を持った人について読むのが助けになるんです。」

ベルは、福音のおかげで家族が受けた良い影響について話すのが好きですが、皆からどんなに褒められてもそれが自分の力によるものだとは思いません。彼女は次のように言います。「自分がどれだけ家族の助けになれたかは分かりません。でも天のお父様が彼らをほんとうに助けてくださったことは確かに知っています。」

しかし、ベルの家族は、彼女の果たした役割をその程度には考えていません。なぜなら、毎晩夕食のテーブルを囲む度に、互いの顔に、ベルが福音を分かち合ってくれたおかげで得られたすばらしい影響をはっきりと見ることができるところです。□

右上——^{ウオン}黄兄弟姉妹。二人の娘アグネス（右）はこう語っている。「ベルが教会に対してとても真剣に取り組み、多くの犠牲を払う姿を見て、わたしもようやく教会について勉強する決心をしました。」
下——ベルの模範のおかげで、黄兄弟姉妹と、8人の子供のうち7人がバプテスマを受けた。





ILLUSTRATED BY DILEEN MARSH

エブリンの ための 書物

テレサ・ウルフ

夫のただ一人の妹、エブリンは教会の会員ではありませんでしたが、家庭内の深刻な問題についてよくわたしたちに手紙で知らせてくれました。わたしたちは気落ちしている彼女の事を案じながらも、どうしてあげることもできず、気がかりでなりませんでした。

わたしは彼女のために祈るようにしました。また靈感を得られるよう、夫のピーターとともに神殿に参入しました。そして、心から導きを求めました。「義理の妹を助けるにはどうすればよいでしょうか。」答えは御霊によって与えられました。「エブリンに手紙を書き、その中で『モルモン書』について紹介し、証をきなさい。そして彼女の家を宣教師を送りなさい。」

ピーターは、宣教師を行かせることについてためらっていましたが、それが主の御心であるとわたしは知っていました。翌朝わたしは手紙を書き、ポストに投函しました。

エブリンから何の返事もないうちが過ぎました。わたしは次第に気をもんだり、いらいらしたりするようになりました。あの手紙で傷ついてしまったのではないだろうか。その内容に気分を害してしまったのではないだろうか。わたしは彼女の反応がとても気になったので、ピーターに電話をかけてくれるよう頼みました。その電話の中で、エブリンは自分の身に何が起こったのかを話してくれました。

わたしの手紙が届いた日は、エブリンにとってとりわけひどい1日でした。彼女は、抱えている問題に押しつぶされそうになっていました。うつ病と自殺を採り上げたテレビ番組を見ていましたが、苦しみは和らぎませんでした。やっと心に平安を感じられたのは、昼食を取るために学校から戻った息子が、ポストの郵便物を持って来てくれたときでした。その中にわたしの

手紙も入っていたのです。

手紙を読むエブリンの心に御霊が語りかけ、彼女の頬に涙が伝いました。このような困難な状況から救ってくれるようだれかに、あるいは何かにずっと祈り続けてきた彼女でしたが、祈りが聞き届けられているかどうか分かりませんでした。しかし送られてきた手紙を読むうちに、天父が自分のことをほんとうに気にかけてくださっていると知ったのです。彼女の心は喜びではち切れんばかりになりました。

御霊によって言葉にならないほどの平安を受け、どうしたらよいのか、わたしの手紙にどう返答してよいのか分からなかった、と話してくれました。わたしはまず『モルモン書』を毎日読むように勧めましたが、彼女はその勧めを実行してくれました。そして1週間後には彼女の住んでいる町の教会の指導者に電話をし、宣教師を送ってもらうように手配しました。

エブリンは、『モルモン書』を読み、素晴らしい宣教師の助けを受ける中で、自分の生活が変わっていくのに気づきました。宣教師のレッスンを熱心に学び、知恵の言葉に従った生活を始めると、夫婦の関係も改善されていくのが分かりました。こうして、エブリンは心に平安を感じられるようになったのです。

彼女の家族の生活がこのような幸福で満たされ、良い影響がもたらされました。もちろんエブリンの日々の問題がなくなったわけではありませんが、物の見方が変わってしまったのです。キリストを生活の中心とすることにより、新しい人に生まれ変わったのです。

ピーターはまさか自らの手で妹にバプテスマを施し、確認の儀式を行う日が来るとは思いもしませんでした。心から愛する人にかけてがえのない贈り物をしたことで、わたしたちは想像をはるかに超えた喜びを感じることができました。『モルモン書』が祈りの答えだったのです。□



悪から 身を守る盾

クライド・J・ウィリアムズ

神はすべての神権時代において預言者に命じ、神の子らの中に潜む悪の力について警告を与えてこられました。末日の時代に住むわたしたちは、生ける預言者に加えて、悪に打ち勝つ方法を教えるために備えられた古代の聖文の恩恵を受けています。エズラ・タフト・ベンソン大管長はこう宣言しています。「『モルモン書』はキリストの敵を暴きます。……そして、キリストに従う謙遜な人々に現代の悪魔の悪しき企てや策略、教義に対抗する力を与えてくれるのです。」¹

サタンは前世で天の御父の前から追放されて以来、義の根源であられる御父に常に敵対してきました。サタンは「あらゆる偽りの父」(2ニーファイ2:18;エテル8:25)であり、あらゆる罪の「根源」であり「頭」(ヒラマン6:30;モーサヤ4:14)なのです。サタンの計画は、御父の子供たちに自分が味わっていると同じ悲惨を味わわせることです。『モルモン書』には、サタンがどのようにして人類に対して力を振るうようになったのか、ま

預言者である第二ニーファイに反感を持ったレーマンやレムエルのように、今日たくさんの人々が主に油注がれた僕たちの決定や指示に疑念を抱いています。

たわたしたちがどうしたらサタンの攻撃に対抗できるかが書かれています。以下にサタンの策略の幾つかと、『モルモン書』が教えるサタンから身を守る方法の数々をご紹介します。

サタンの策略

この世の知恵に頼る

サタンは初期の時代に授けられた「分かりやすくて貴い」多くの真理を取り去りました。そのため現代の人々は霊的に「つまず〔く〕」可能性が生じています(1ニーファイ13:29)。『モルモン書』とほかの近代の聖文はそれらの真理を回復してはいますが、「悪しき者のあの狡猾な策謀」により人々は、この世の知識に富むようになると神の啓示や預言者の勧告には従う必要がないと考えるのです(2ニーファイ9:28)。

ヤコブの時代に多くのニーファイ人を欺いた反キリスト者シーレムはまさにこの例です(『モルモン書』ヤコブ7:1, 23参照)。同じようにして今の時代のある人々は、巧みな言葉と学識を利用して教会員をだまし、主に油注がれた僕たちの決定や指示に疑念を抱かせようとし

ています。またそのような人々は、教義の変更や道徳的標準の緩和を要求することもあります。悲しいことに、これらの人々の影響で不活発になったり、背教にまで陥ったりした人もいます。聖文を研究し理解するに当たって御霊の光に照らされていないからです。

サタンとサタンに従う者たちは、人々の悪を知覚する力を狂わせることにもその欺きの力を使います。イザヤはこう書いています。「悪を善と呼び、善を悪と呼ぶ者は災いである。」(2ニーファイ15:20) レーマンやレムエルからノア王、ガデアントンの強盗団まで、『モルモン書』にはこの価値観の転換の例が数多く見られます。わたしたちの社会も例外ではありません。音楽や映画、結婚、服装の標準、そのほか生活のいろいろな分野で価値観の転換が起こっています。健全でつつましく人を高めるはずのものがしばしば嘲笑やさげすみの的になり、逆に下品で卑しむべきものが高く評価されているのです。

怒りと争い

また人々は悪魔の力により「善いことに対して怒る」ようになります(2ニーファイ28:20)。例えば邪悪なレーマン人はキリストの福音に改宗した兄弟姉妹に対して怒りを募らせ、彼らを殺そうとしました(アルマ24:1-2, 19-22, 30; 25:1参照)。

悪がますますその勢いを増す現代の世界は、悪を善と見るのみならず、義になかった人々や原則に対して怒りや憤りを抱きます。七十人で現在は名誉中央幹部のウィリアム・グラント・バンガーター長老はこう述べています。「そのような邪悪な行為〔姦淫やポルノグラフィにふけること〕についても〔それにかかわる人々は〕そんなに悪いことではないと言います。世の中の実に多くの人々が容認しているのに、受け入れなかったり公然と反対したりすれば物笑いの種になると言うのです。そして、紳士淑女ぶっている、頭が古い、いやに厳格で独善的な人間だと、まるで自分が罪人になってもなったかのように呼ばれ〔る〕のです。』²

争いは怒りの一つの形態ですが、特に危険なものです。救い主はこう警告されました。「争いの心を持つ者はわたしにつく者ではなく、争いの父である悪魔につく者で

ある。」(3ニーファイ11:29) 争いの心が高じると家庭内の対立や隣人とのいさかいに発展します。また国家間の戦争や抗争の炎を燃え上がらせることもあります。

罪の中に幸福を求める

現代の世の中で悪の勢力が教えることの一つは、罪悪の中に幸福があるということです。レーマン人サムエルは、罪の中に幸福を求め続けるとどのような運命が待っているかをニーファイ人に警告しました。

「しかし見よ、あなたがたの試しの日はずでに過ぎ去った。あなたがたは自分の救いの日を引き延ばしたので、とうとう永遠に間に合わなくなってしまい、あなたがたの滅亡は確定してしまった。まことに、あなたがたは手に入れることのできないものを、生涯をかけて求めてきたのである。あなたがたは、罪悪を行いながら幸福を求めてきた。それはわたしたちの大なる永遠の頭の内にある、あの義の本質に反することである。」(ヒラマン13:38)

今日わたしたちの周囲には、幸福の源として悪を描いた広告や映画、書物がはらんしています。アルコールや麻薬、不倫なども、安易ですぐに得られる快樂と満足の代表のようなものとなっています。そして、罪によって実際に引き起こされる苦痛や悲しみ、苦しみが描かれることはめったにないのです。

悪を無視すること

幸福についての誤った概念と同時に、サタンは「悪魔などいない」といううわさを広めます(2ニーファイ28:22参照)。このサタン否定の例や、それによって人々の心に誤った安堵感が生じた例は、枚挙にいとまがないほどです。福音への信仰を公言しながらも、あたかもサタンが存在しないかのような生活をしている人々もいます。

また、悪魔という概念は人が勝手に作ったもので、恐怖感を与えて人を支配しようとする手段にすぎないのだと言う人もいます。そのような考えは、リングに上がったボクシングの選手が、敵に連打を浴びながらも、敵などいないと思いついていようようなものです。



ABINADI APPEARING BEFORE KING NOAH, BY ARNOLD FRIBERG

悪がその勢を増す現代の世界は、悪を善と見るのみならず、義に対して怒りや憤りを抱きます。「モルモン書」の預言者アビナダイは、当時はびこっていた悪の力に挑み、自らの証のために死刑に処せられました。

霊的な無関心状態

サタンはわたしたちが神とコミュニケーションを図ろうとするのを妨害したいと願っています。そのため、わたしたちが祈りを忘れて祈らずに時を過ごしたりするように、あらゆる手を尽くして働きかけます。ある人々には祈らなくても大丈夫だという誤った自己満足を与え、ある人々には、重大な背きを犯した者は祈っても仕方がないと思込ませるのです（2ニーファイ32：8参照）。

この無関心ならびに「すべてが良い」（2ニーファイ28：21）症候群は、わたしたちが避けなければならないもう一つのわなです。デビッド・O・マッケイ長老はこう述べています。「今世紀の危難は霊的な無関心状態で

ある。」³積極的に義を求めることを怠れば、悪を選んだ場合と同じように昇栄を棒に振ることになるでしょう。

合理化

ニーファイはわたしたちに、神が「少しの罪を犯すことは許してください」（2ニーファイ28：8）とは考えないように警告しました。合理化は軽度な悪の口実として人々がよく用いるものです。わたしたちは次のような言葉をよく耳にします。「この音楽はほんとうにヘビーなものに比べたら大したことないよ。」「請求された金額が間違っていたけど、もともと高いんだから黙っていたっていいや。」「このごろじゃどんな映画にだってああいシーンはあるさ。」

ニーファイは悪魔が多くの人々を罪に陥れる様子をこう表現しています。「麻縄を彼らの首にかけて引っ張って行き、ついには強い縄で、とこしえに彼らを縛ってしまうのである。」（2ニーファイ26：22）麻縄とは麻から作る細くて白っぽい色をした縄です。麻は一本一本は柔らかくて細く、すぐに切れてしまいましたが、縄にすると、手ざわりは柔らかくてもなかなか切れなくなります。こ



のように、「少しの罪」を合理化し続けていると、知らず知らずのうちに巧妙にサタンに連れ去られ、やがて「強い縄」で縛られてしまうのです。

むなしいこの世のもの

高慢や権力、富も多くの人々を義から遠ざけます。息子アルマの時代、教会員は富とむなしいもののために高慢になってしまいました。このため彼らは人をあざけるようになり、自分たちと同じ考え方をしない人々を迫害しました（アルマ4：6-8参照）。

不幸なことに、現代社会にあって名声は多くの人々の心をつかまえています。また、高慢と物質主義のために、人々は霊的な目標を犠牲にし、地位や財産、権力を求めるのです。何年もの間追放の身にあったロシアの作家アレクサンドル・ソルジェニーツィンは、「この国の民は共産主義の圧政に苦しんだが、西側の世界は物質主義による圧迫を受けている」と警告しています。さらにこう言っています。「わたしたちの社会を変革する場合、あなたがたの社会をその理想にすることはできません。」⁴

サタンはわたしたちに姦淫や殺人を犯させたり、銀行強盗をさせたりする必要はありません。ただ、わたしたちの心をもっと大切なものから背けさせるだけでよいのです。

サタンの影響に打ち勝つ

では、わたしたちはどのようにしてサタンに抵抗し、その誘惑から身を守ることができるのでしょうか。そのためには、以下に挙げる原則を理解し、実行に移さなければなりません。

■ 悪魔は最後には自分に従う者を見捨てます（アルマ30：60参照）。サタンは大きな報酬を約束しますが、結局は悲しみや惨めさ、崩壊を味わうだけです。サタンは悪の根源であり、罪を犯して苦しむわたしたちへのサタ

わたしたちには、自分の生き方を選択する自由があることを忘れてはなりません。信仰が深く「勢いのある人」であったニーファイ人の司令官モロナイは自由の旗を揚げ、自分たちの宗教を守るために民を集めました。

ンの反応は、笑いと喜びです（3ニーファイ9：2；モーセ7：26参照）。

■ この世的な保証を求める道への誘惑に落ちた人は、霊的な昏睡状態から目覚めなければなりません。リーハイはレーマンとレムエルにこう嘆願しています。

「おお、あなたがたは目を覚ましていてもらいたい。深い眠りから、すなわち地獄の眠りから目覚め……なさい。……」

目を覚まさない、息子たちよ。義の武具を身に着けなさい。」（2ニーファイ1：13, 23）

マリオン・G・ロムニー副管長はこう語っています。「サタンはその権力が終焉を迎えようとしている今、考え得るあらゆる手段を用いてわたしたちを欺き、墮落させようとしています。

『悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい』というパウロの言葉に従うことが、世の初め以来今ほど求められている時代はありません。』⁵

義の武具を身に着けるには、霊的な事柄への口先だけの支持ではだめです。それを生活の中で第一優先にしなければなりません。

■ 『モルモン書』の中で度々言われていることは、サタンの誘惑に打ち勝つように目を覚まして常に祈ることです（アルマ13：28；15：17；34：39；3ニーファイ18：18参照）。この「目を覚ます」という行動は、軍の基地で敵の攻撃を警戒して絶えず行う警備の仕事にたとえられます。ハロルド・B・リー長老はこう述べています。「敵の地図にはわたしたち一人一人の弱点が入念に記されています。それらは悪の軍勢には知られており、どれ一つでも防御を緩めるやいなや、わたしたちの陣地は攻め込まれ、人の魂が危機にさらされるのです。」⁶

わたしたちは独りではサタンに打ち勝つことができません。サタンは前世のことを知っています。ですから、わたしたちのことについて、わたしたちにはまだ理解できないことを知っている可能性があります。したがって、わたしたちは絶えず祈り、サタンの力に打ち勝つことができるように天の御父の助けを求めなければなりません。プリガム・ヤング大管長はこう教えています。「日の栄えの王国に席を得ようとする男女は、あらゆる義の敵と日々戦うことによりそれを得なければならないこと

を知るでしょう。』⁷

■サタンの影響力を効果的に退けるには、神の言葉である鉄の棒につかまることがどれほど大切かを理解しなければなりません。示現の中の鉄の棒に関するレーマンとレムエルの質問に答えて、ニーファイは兄たちにこう言いました。「それは神の言葉であって、だれでも神の言葉に聞き従って、それにしっかりつかまる者は、決して滅びることがなく、また敵対する者の誘惑や火の矢も、彼らを打ち破って盲目とし、滅びに至らせることはない……。」(1ニーファイ15:24)

鉄の棒にしっかりつかまるとは、聖文の中の原則を理解し、それを日々の生活に取り入れることです。

■悪魔の影響に打ち勝つ努力をする中で、わたしたちは自分の人生は自分で選べることを心に留めなければなりません。レーマン人サムエルはこう教えました。「わたしの同胞よ、覚えておきなさい。……罪悪を行う者は自分でそれを行うのである。なぜなら、あなたがたは自由であり、あなたがたは随意に行動することを許されているからである。見よ、神はあなたがたに知識を与えて、あなたがたを自由にしてくださったからである。」(ヒラマン14:30)

「悪魔がそうさせたのです」とか、「どうしようもなかった」という言い方は、自らの愚かな選択への誤った認識であり、口実でしかありません。預言者ジョセフ・スミスは言いました。「わたしたちが悪魔を受け入れないかぎり、悪魔にわたしたちを支配する力はない。しかし、神から来るものに背いた瞬間、悪魔は力を得る。」⁸

■心を改めて義にかなった生活をしようと決意すれば、今すぐにサタンを縛ることができます。『モルモン書』の中には心の変化を遂げた人々のことが記されています。彼らはこう言っています。「わたしたち〔は〕悪を行う性癖をもう二度と持つことなく、絶えず善を行う望みを持つ……。」(モーサヤ5:2。アルマ19:33も参照)

『モルモン書』には、生涯にわたってサタンを縛ることのできた人のすばらしい例が記されています。アルマ書第48章11節から13節に記されたモロナイの性質に注目してみましょう。

「モロナイは〔1〕屈強で勢いのある人であり、〔2〕完全な理解力を備えた人であり、また〔3〕流血を喜ば

ない人であった。そして、〔4〕自分の国が自由であり、同胞が束縛や奴隷の状態にないことを喜びとした人であった。

まことに彼は、〔5〕神が民に授けてくださった多くの特権と祝福について、神への感謝で胸をいっぱいにした人であり、〔6〕民の幸いと安全のために大いに働いた人であった。

また彼は、〔7〕確固としてキリストを信じた人で〔あった。〕」

モロナイに深い感銘を受けたモルモンはこう語っています。「まことに、まことに、わたしはあなたがたに言う。もし過去、現在、未来のすべての人がモロナイのようであれば、見よ、地獄の力でさえもとこしえにくじかれてしまい、また悪魔は決して人の子らの心を支配する力を持たないであろう。」(アルマ48:17)

これまで述べてきたような性質を身に付けてそれを高めることができれば、わたしたちは悪魔の力から身を守ることができるようになります。確かにモロナイは自分と民がどうすればサタンの力に打ち勝つことができるかを理解して、模範を通して民を導きました。『モルモン書』は、わたしたちも同じ方法で悪と闘うことができることを教えてくれているのです。□

注

1. *Teachings of Ezra Taft Benson* 『エズラ・タフト・ベンソンの教え』 p.56
2. 「霧の中を通り抜ける」『聖徒の道』1984年7月号, p.48
3. *Conference Report* 『大会報告』1907年10月号, p.62
4. アレクサンドル・ソルジェニーツィン, *A World Split Apart* 『世界の隔たり』 p.33, 1978年6月8日, ハーバード大学卒業式での講演より
5. "Historic Conferences Come to End" *Church News* 「歴史的な大会幕を閉じる」『チャーチニュース』1975年7月5日付け, p.10
6. "Powers of the Gospel" *Improvement Era* 「福音の持つ力」『インブループメント・エラ』1949年11月号, p.737
7. "Remarks" *Deseret News Weekly* 「批評」『デゼレト・ニュース・ウィークリー』1864年12月28日付け, p.98
8. *Teachings of the Prophet Joseph Smith* 『預言者ジョセフ・スミスの教え』ジョセフ・フィールディング・スミス編, p.181

耐え忍んで走る

「耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であ〔る〕イエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。」(ヘブル12:1-2)

忍耐は何と貴重なものでしょうか。ベニヤミン王は、聖徒が持つべき重要な特質の一つとして、忍耐を挙げました(モーサヤ3:19参照)。預言者ジョセフ・スミスは、忍耐にはわたしたちを精錬する役割があることを学びました。忍耐は、「さらに優れた、永遠の重みのある栄光」へとわたしたちを備えてくれるのです(教義と聖約63:66)。他方、忍耐の欠如は、少なくとも一つの基本的な問題を生み出します。人生に必要な教訓、特に逆境から得られる教訓を学べなくなるのです。

「焦ってより多くを求めても、実際に得られるものは少ない」

わたしたちには、しなければならないことがたくさんありすぎて、いららすることがよくあります。すべてをきちんとやりたい、すべてのことをこなしたいと思い、慌ただしく日常の仕事を片付けたり、家族に対する責任を果たしたりします。時には、奉仕をするときでさえ、慌ただしく行うことがあります。ある女性は自分の慌ただしい行為をこのように認めています。「夜、わたしは子供たちを一列に並ばせて、効率的におやすみのキスをするこさえあるんです。」

しかし、人生は焦って駆け抜けるには、あまりにもかけがえのない経験の場です。十二使徒定員会会員のニール・A・マックスウェル長老はこのように述べています。「忍耐がないと、

わたしたちは人生から多くを学べません。見聞きすることも、感じることも、少なくなります。皮肉にも、焦ってより多くを求めても、実際に得られるものは少ないのです。」(Ensign『エンサイン』1980年10月号、p.29)

さらに深刻なことに、忍耐の欠如、特に逆境に対する忍耐の欠如は、靈性をむしろ弱さにつながることがあります。しかし試練は、忍耐することにより、わたしたちに経験を与え、最終的にはわたしたちの益となります(教義と聖約122:7参照)。逆に、試練に遭ったとき忍耐しないなら、わたしたちはとうてい最後まで堪え忍べないでしょう。

忍耐の鍵は信仰である

わたしたちは皆、ストレスの少ない生活を求めています。しかし、どうしたらストレスを軽減できるか分からない時があります。必要なのは、永遠の見地に立った物の見方と主に対する信仰です。マックスウェル長老はこのように指摘しています。「忍耐とは、自分の置かれた状況をあれこれ心配する

ことではなく、驚きと畏敬の念をもって神の目的が成就されることを前向きな態度で見守ることです。」(同上、pp.28-29)

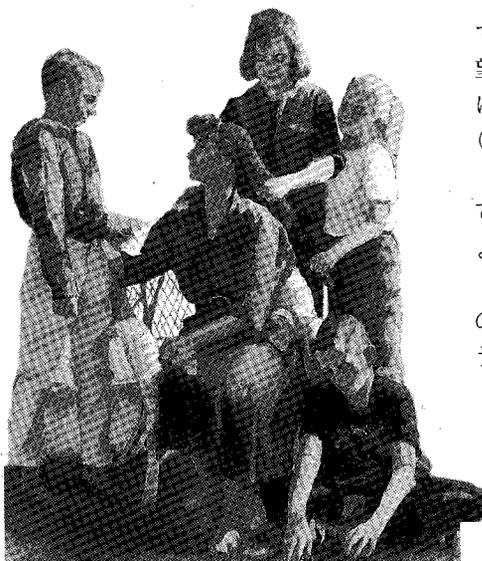
シルビア・ローゼン姉妹は、確かに、信仰による忍耐の力を学びました。ローゼン姉妹はユタ出身の若い姉妹で、4人の子供を独りで育てています。子供の一人は自閉症に似た重度の発達障害を持っています。それだけでもすでに大きな苦難でありながら、彼女自身、かなり進行した癌に冒されていると診断されてしまいました。しかし天父への信仰を新たにした彼女は、幾つかの活動をやめ、最も優先順位の高い事柄、すなわち家族の世話と自分の病気の治療に専念しました。

彼女は今も人生の苦難と闘っていますが、主を待ち望む美しい精神によって、生活のあらゆる面で安らぎを得ています。健康状態が許すかぎり、友人のためにプレゼントを作り、慰めが必要な隣人に食事を届けています。ほかの人に与えれば与えるほど、彼女の表情は穏やかになっていきます。彼女はこうに述べています。「わたしは自らのすべての信仰と忍耐を必要としています。生きるために懸命に闘っているのですから。」

ローゼン姉妹はイザヤの約束が真実であることを学びました。「主を待ち望む者は新たな力を得、わしのよう翼をはって、のぼることができる。」(イザヤ40:31)

●主がわたしたちに期待されるすべての務めを、どうすれば果たせるでしょうか。

●忍耐を学ぶことによって、あなたの信仰はどのように強められるでしょうか。□





わたしの 改宗の 奇跡

ジェルメヌ・エミリー・
オーシャトレル・ゲイ

1938年9月、当時わたしは15歳で、スイス、ボー州のジュネーブとローザンヌの間にある小さな村ギリーに住んでいました。

ある日、学校から帰ると、母（ジュヌビエーブ・エミリー・ポーリーヌ・ゲイ）が二人の紳士と話していました。一人はカナダ出身、もう一人はアメリカ出身の人でした。二人は末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師で、近くのニオン村に住んでいました。母は二人のフランス語が上達するよう協力していました。母は彼らの役に立てるのがとてもうれしいと言い、わたしも彼らに何度か会いました。ところが、ある日、母からその若い紳士たちがニオンを去ってしまったと聞かされました。それから数年間というもの、母とわたしは、彼らは今ごろどうしているだろうか、と思いをはせたものでした。

わたしは成長して結婚し、夫とともにフランス中部へ引っ越しました。1990年にビュイドームにあるボーモンという小さな町に住んでいたとき、ふと、最新の出来事を掲載した雑誌『視点』のある記事に目が留まりました。その記事は「アダムとエバ以来の人類の統計調査」と題するもので、末日聖徒イエス・キリスト教会の系図探求と死者のためのバプテスマについて述べていました。

読みながら、わたしは半世紀以上も昔に引き戻されたような大きなショックを受けました。その記事を読んだ後、数日間、わたしは何かをしなければならぬというような気持ちで落ち着きませんでした。いつも深い信仰を持ち、ほかの宗教に対して寛大な心を持っていた母のことを考えました。母は1978年に亡くなりました。1937年に亡くなった父のことも考えました。

ついにわたしは、その記事に載って

いたユタ系図協会のパトリック・コッピン部長に手紙を書きました。わたしの父と母の名前を末日聖徒イエス・キリスト教会の系図に載せてくれるかどうか、そして教会の祝福を受けられるかどうか尋ねたのです。手紙には、両親の出生、結婚、死亡年月日を書き添えておきました。

そのほかにも、以下の名前と住所を書きました。カナダのアルバータ州カードストンのブリガム・Y・カード長老とソルトレーク・シティーのジェイ・リーズ長老です。二人は52年前、母がもらった写真の裏に名前と住所を書いてくれていたのです。

3週間後、カード長老から手紙を受け取りました。喜んでわたしの父と母の身代わりとして神殿の儀式を受けると書いてありました。彼の手紙を読みながら、涙が頬を伝いました。しかし、これが両親にとってどんなことを意味するのか分かったのは数日後のことでした。1990年6月28日、カード長老と奥さん、そして娘さんとそのご主人が身代わりを務め、わたしの両親はジョーダンリバー神殿でバプテスマ、エンダウメント、結び固めを受けたのです。このようにしてわたしの両親は神殿の祝福を受けました。

一方、コッピン兄弟はジュネーブの伝道本部へも連絡を取ってくれていました。5月にわたしは専任宣教師のビ

左下——ジェルメヌ・エミリー・
オーシャトレル・ゲイ、22歳（右）
と母親のジュヌビエーブ・エミリー・
ポーリーヌ・ゲイ、75歳（左）。
右ページ——ジェルメヌは、二人
の若い訪問者から50年もしてから
大きな影響を受けることになるう
とは夢にも思わなかった。

ショップ長老から電話をもらい、クレールモンの近くに教会堂があることと、そこにいる宣教師の電話番号を覚えてもらいました。その日の晩、教えられた宣教師に電話をかけ、翌日に教会堂で会いました。福音への門戸がわたしの前に開かれたのです。

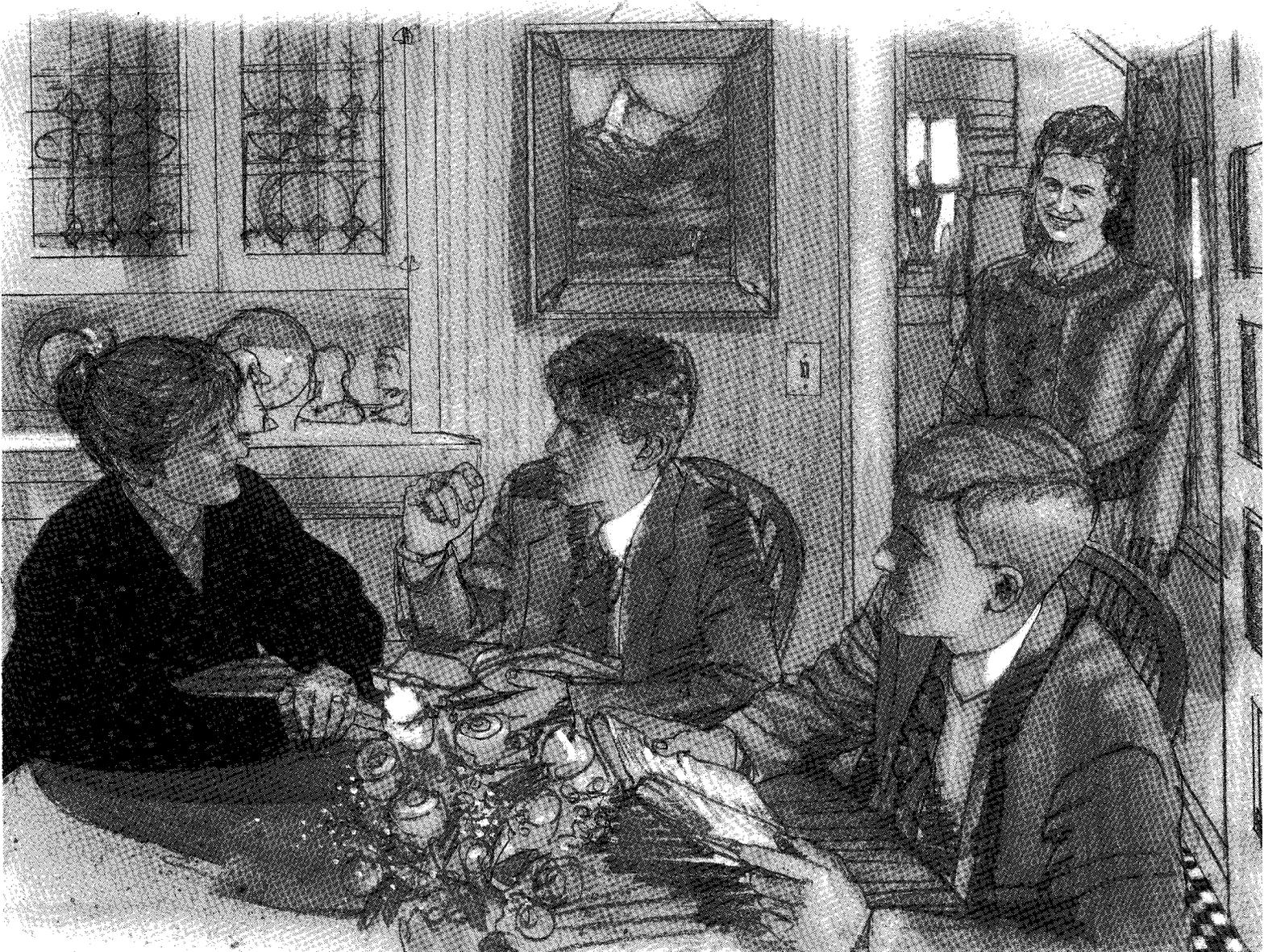
次の日曜日、教会堂で開かれた集会に出席し、ユタ州プロボ出身のベアー兄弟姉妹という夫婦宣教師から宣教師のレッスンを受ける約束をしました。

そして、1990年7月24日にバプテスマを受けました。

わたしはスイス神殿に参入し、わたしの支部の家族歴史センターで働くにつれて、教会員となった喜びをますます強く感じるようになりました。その後、1994年9月、アメリカとカナダへの旅行中、カード長老と奥さんに会いました。二人はアルバータ神殿でわたしが両親と結び固められる際に身代わりとして儀式を受けてくれました。こ

うして、わたしの両親と先祖や子孫との永遠にわたるつながりが始まったのです。

何年もの間、わたしは自分の霊的な必要を満たし、亡くなった愛する家族と一つにしてくれる教会を探していました。こうして今わたしは、奇跡的な方法で神殿の祝福を受け、この祝福を愛する家族と分かち合うことができたのです。□



夜明け前

リト・バーネス・レガスビ

その晩、宣教師アパートまで戻って来ると、わたしの同僚は先に中へ入って、勢いよくドアを開けてしまいました。わたしは二人分の自転車を片付けると、後から部屋の中へ入って行きました。二人でその日の出来事について話し合っていると、だんだんと声が大きく荒々しくなってきました。アメリカ人の同僚は、わたしたちがうまくいかないのは、フィリピン人であるわたしが彼に対して偏見を抱いているせいだと言うのです。そんな気持ちはまったくありませんでした。だから、同僚からそんなことを言われると、ますます腹が立つだけでした。同僚は怒ったまま台所へ行ってしまい、わたしも別の部屋へ行きました。その後、沈黙が支配していましたが、わたしたち二人の怒りの炎はなお燃え盛っていました。

わたしは部屋の隅に座ったまま、子供のようにうずくまっていた。大声で泣きたいような、叫びたいような気持ちでした。わたしは、まるでヘッドライトをつけないまま、曲がりくねった暗い夜道を運転しているような、むなしさや怖さを感じていました。レッスンを教えたり、子供たちと遊んだり、求道者と話をしたりした、その日の活動のすべてが、うわべだけの行為のように思えたのです。キリストのような生活をするということについてレッスンしていたとき、わたしの心は罪悪感にさいなまれていました。同僚との間にいがみ合いという壁を作っておきながら、どうしてキリストのような愛について語るができるのでしょうか。

暗い部屋の片隅で、わたしは、専任宣教師に任命されたときのステーク会長の言葉を思い出していました。会長は、わたしが伝道中に数多くの試練に遭い、中にはとても克服できそうもないと思えるような試練もあると言いました。さらに、わたしが直面することになる二つの「ゴリアテ」についても話しました。それは、自分自身の弱さと、同僚との問題のことでした。しかし、同時に会長は、「あなたの中にある力は、あなたの前にある障害物よりも優れたものです」と約束してくれたのでした。

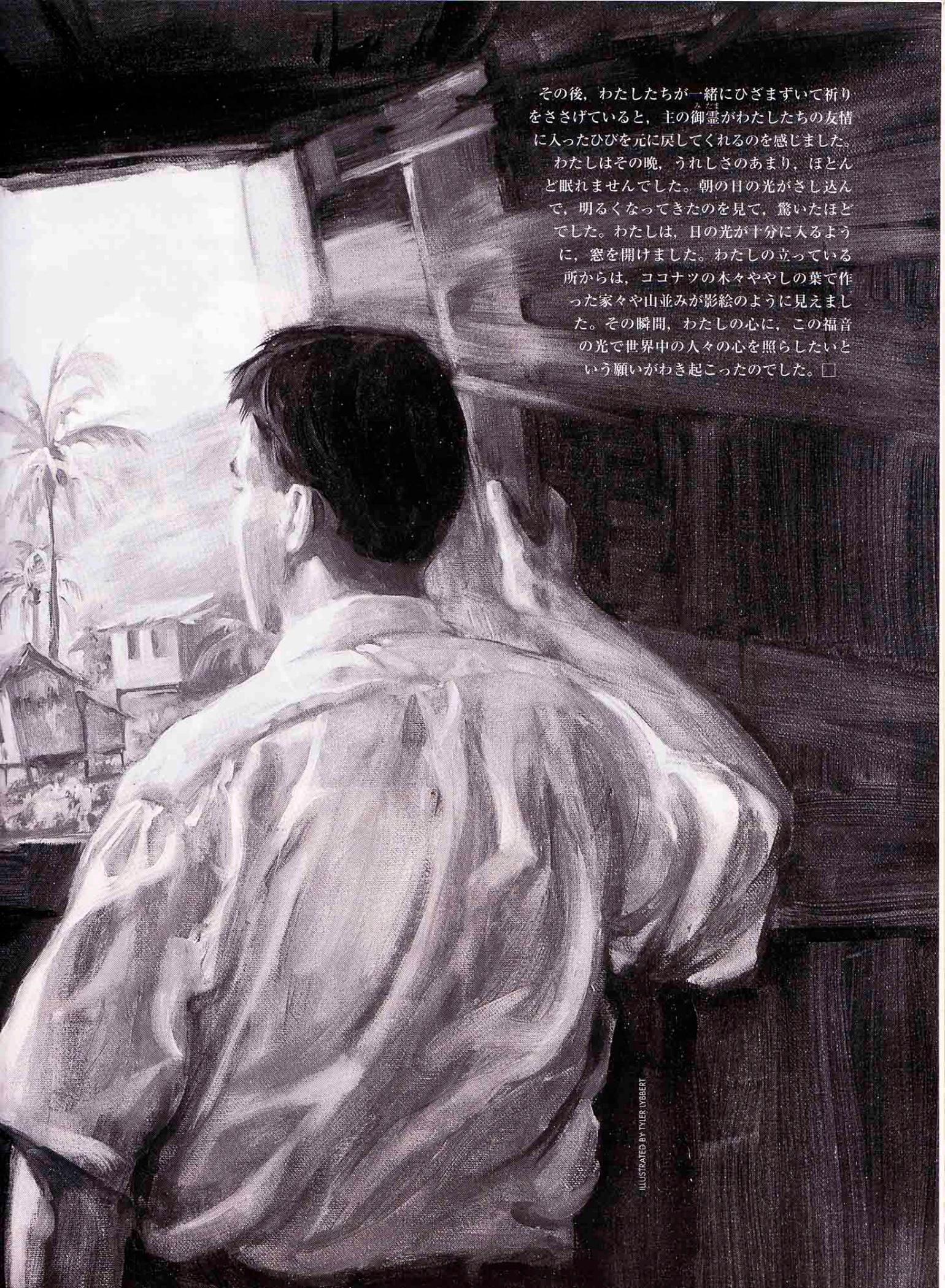
しかし、わたしには自分にこのゴリアテと正面から立ち向かう準備ができていたとは思いませんでした。むしろ、わたしは転任の方を望んだのです。わたしは以前、同僚との問題を解決するのは容易だろうと考えていました。しかし、この問題はまるで嵐の中を航海するようなものでした。自分でも、天父に助けを求めなければならないことは分かっていたので、ひざまずいて祈りをささげようとも思いました。しかし、自分には天父に語りかける資格がないのでは、と感じて苦しみました。そんなわたしにとって、できることと言えば、ただ涙を流すことだけでした。

わたしが涙を流しながら黙って座っていたとき、アイロン台の上に置かれていた聖典に気づきました。聖典を開き、ページをめくっていると、次の聖句に目が留まりました。「まず行ってその兄弟と和解し、それから帰ってきて、供え物をささげることにしなさい。」(マタイ5:24) これこそ探し求めていた答えだ、と分かりました。わたしは、静かな細い声が同僚と和解をなさいと語りかけるのを感じました。また、天父がわたしと同僚との間にあったいがみ合いという壁を取り除く助けをしてくださることも分かりました。

そう確信すると、わたしは同僚と話をするために部屋を出ました。ところが、最初に沈黙を破ったのは同僚の方だったのです。彼はこう言ってわたしを驚かせました。「悪いのはわたしの方でした。長老、すみませんでした。」

わたしはいすに手をかけると、同僚のわきに座り、こう言いました。「いいえ、あなたが悪いわけじゃないんです。わたしが怒りを抑えられなかったのですから、謝るのはわたしの方です。」

同僚はほほえむと、こう言いました。「サタンはわたしたちの友情を壊して、この神聖な業を停滞させようとしているって分かっていたらいいですか。それに、もう就寝時間が過ぎていることも分かっていますか。」同僚はそう言って笑うと、わたしを強く抱き締めてくれました。

An illustration of a man with dark hair, seen from the back and side, wearing a white, long-sleeved shirt. He is looking out of a window towards a tropical village with palm trees and thatched-roof buildings. The scene is brightly lit, suggesting morning light. The man's expression is contemplative. The background shows a wooden structure, possibly part of the room he is in.

その後、わたしたちが一緒にひざまずいて祈りをささげていると、主の御霊がわたしたちの友情に入ったひびを元に戻してくれるのを感じました。わたしはその晩、うれしさのあまり、ほとんど眠れませんでした。朝の日の光がさし込んで、明るくなってきたのを見て、驚いたほどでした。わたしは、日の光が十分に入るように、窓を開けました。わたしの立っている所からは、ココナツの木々ややしの葉で作った家々や山並みが影絵のように見えました。その瞬間、わたしの心に、この福音の光で世界中の人々の心を照らしたいという願いがわき起こったのでした。□



PHOTOGRAPHY BY WELDEN ANDERSEN

伝道に備える

ケーシー・ナル、アーロン・ランドル・ビューラー

伝道は人生で最高の経験だったと、帰還宣教師が口にするのをどれくらい耳にしたことがあるでしょうか。実際、伝道が成功すると宣教師はそのように思うはずですが、しかし、成功は何の努力もなしには得られず、成功するか否かは、本人がどれだけ伝道に専念するかによって大きく左右されます。そしてどれだけ専念できるかは、どれほどよく伝道に備えたかに大きくかかっているのです。

伝道を人生最高の経験とするために、今すぐにできることを幾つか挙げてみましょう。

霊的な備え

■ 良い模範を見つける。教師や親、友人、帰還宣教師、神権指導者、アドバイザーなど、靈感を与え、励ましてくれる人たちと話したり、時間を過ごしたりするようにしましょう。

■ 聖文を愛するようになる。自分で興味を持ち、靈感を受けられる聖文研究の方法を見つけてください。

■ 御霊を識別する方法を知る。生活の中で、どんなときに、どんな方法で御霊が働きかけるのか注意します。御霊の導きに敏感になるように、ふさわしい生活をしなければなりません。

■ 証を述べる。福音について自分が感じていることを、人に話す練習をしてください。話せば話すほど、言葉が自然に出てくるようになるはずです。

■ セミナリーに出席する。セミナーは、必要な教義を学べるだけでなく、もう一つ必要な、自制心も養ってくれます。

■ 信じるだけでなく、行う。2マイルの精神を実践し、犠牲と奉仕の習慣を身に付けましょう。そこに伝道の本来の目的があるからです。

社会的な備え

■ マナーを身に付ける。品位ある態度が大切です。上品な振る舞い方、良いテーブルマナー、上手で丁寧な話し方を身に付けましょう。

■ だれとも仲良くするように努力する。人の良い点に目を向けて、自分との相違点は気にしないように努めましょう。これは、同僚や求道者との関係をよく保つうえで役立ちます。

■ コミュニケーション技術を学ぶ。気楽にしかも誠実に、自分自身を表現できるようにならなければならないと同時に、ほかの人がそうなれるように助けることも必要です。正直で、率直であること、そして相手の話をよく聞く技術が大切です。

■ 指導力を身に付ける。伝道中は、会員、ほかの宣教師、求道者を指導することになります。必要な助けを与えられるように、主とともに働く方法を学ばなければなりません。

■ 従うことを学ぶ。指導者から受ける導きに感謝しましょう。指示に従うことが上手になれば、指示を与える立

場になったときに、よく備えができています。

■ 良い友人を見つける。自分を高めしてくれる人たちと一緒にいるようにし、彼らも高めるように努力しましょう。人から受けるだけでなく与えることと、人の必要を敏感に感じ取れるようになることが大切です。

■ 愛することを学ぶ。慈愛、すなわちキリストの純粋な愛についてできるだけ調べ、それについて折ってください。この資質は、あなたにとって最も価値ある資質の一つとなるはずです。



経済的な備え

■ 仕事を見つける。伝道の費用を自分で負担することによって、伝道はもっと有意義なものになります。仕事は良い労働習慣を身に付けるのにも役立ちます。

■ 持ち物の一部を売る。多くの宣教師は、個人的な持ち物を処分して伝道資金の足しにしています。手放せる物を探してみるのもよいかもしれません。

■ 貯金する。預金口座を持っていない人は、伝道資金用の口座を作り、召しが来るまで絶対引き出さないようにしましょう。

■ 上手に予算を立てる。伝道中は、親と一緒にいて経済的な援助をすることはできません。受ける金額が決まっています、追加はしてもらえません。今まで予算を立てて支出を抑える習慣ができていない人は、この技術を学ぶ必要があります。

■ 先を見通して購入しておく。伝道に出る年齢に近くなったら、伝道で使う聖典やそのほかを買っておきます。前もって買っておくことで、直前の経済的負担を軽くすることができます。

身体的な備え

■ 体調を整える。宣教師訓練センターでの運動や宣教師の厳しい生活には、体力が必要です。体調が整っていれば、精神的にも霊的にも良い状態になれます。

■ 健康的な食生活を始める。バランスの取れた食生活によって、宣教師の厳しい毎日を支えるエネルギーが生まれます。果物、野菜、そして健康によい炭水化物を取るようにしましょう。

■ 健康診断を受ける。伝道前の健康診断で徹底的に検査して、出発前に健康上の問題をすべて解決しておくように努めます。医師が正確に診断できるように、伝道中の活動状況をよく把握してもらう必要があるでしょう。

■ 散髪する。きちんとして手入れのしやすいヘアスタイルは悪くないものです。伝道中は、髪の手入れに時間をかける余裕などありません。

■ 衣類の手入れの仕方を学ぶ。洗濯の仕方や衣類の修繕の仕方、しみの取り方を学びましょう。

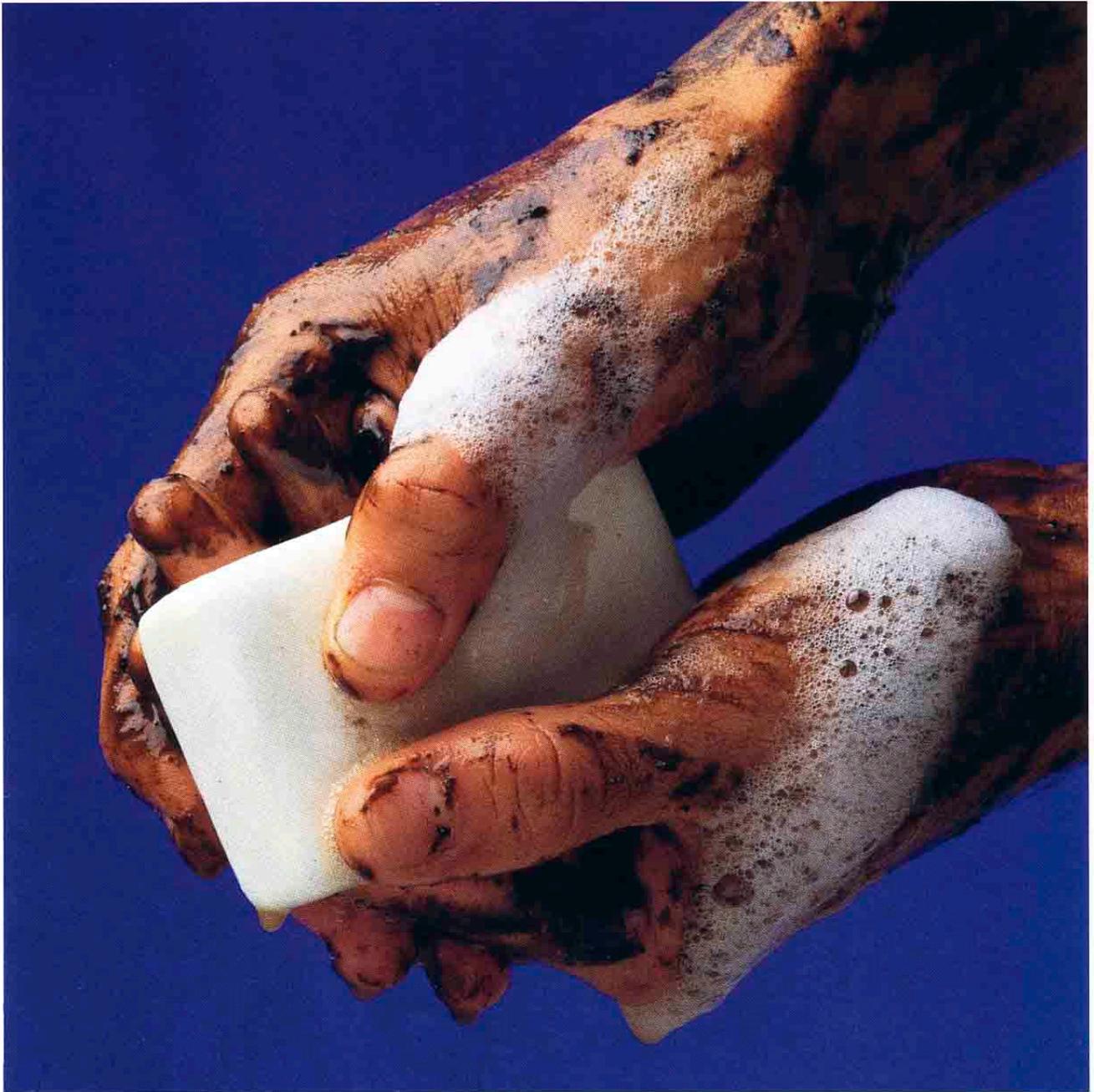
よく備えると、伝道がスムーズにいく可能性が高くなります。準備も楽しんでください。皆さんの人生で最も素晴らしい経験の一つになるはずです。

□



悔い改め

霊を清める石けん



PHOTOGRAPH BY CRAIG DIMOND

使用後のさわやかさを実感してください（イザヤ1：18参照）。

信仰あふれるガーナ

ドン・L・シール



PHOTOGRAPHY BY DON L. SEARIE

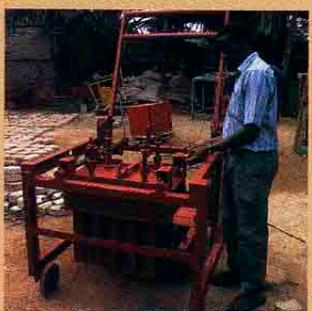
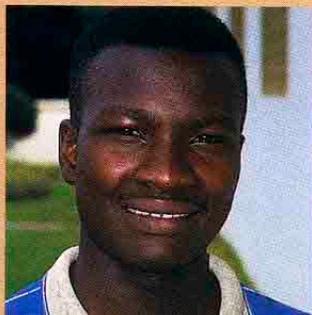
の人々

末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師がアイザック・コト・ボトウェの家族を訪問してレッスンを始めたとき、彼だけは最初から興味がないと言いつづけていました。

「わたしは宣教師たちが来ると、彼らを居間に残して、子供部屋へ行き、薄汚れたパイプでたばこを吸っていたものです」とボトウェ兄弟は当時を振り返り、笑いながらその後起きたことを話してくれました。間もなくボ



下, 上から——コフォリドゥーア第2支部のフィリップ・オヘネ; 花栽培園; ガーナ・アクラスティック初等協会第一副会長エメリア・アハジェ; クエク・アンノが設計したれんが製造機。右下——ガーナ・アクラスティックのステーキ会長エマニュエル・オヘネ-オパレとワード初等協会会長を務めるモニカ夫人。前ページ——テマワードの福音の教義クラス。



トウェ兄弟は宣教師の話を真剣に聞かなければならぬという気持ちになりました。それから「薄汚れたパイプ」を捨てて、知恵の言葉に従って生活しようと決意するまでにはもう時間はかかりませんでした。

ボトウェ家族に教えた宣教師の一人、マーク・オウサー長老の話によると、アイザック・ボトウェ兄弟は子供たちにパイプとたばことコーヒーを全部集めさせて、焼いてしまったそうです。

アイザックと妻のフランセス、そしてバプテスマを受ける年齢に達していた子供たちがそろって教会に入ったのは1987年のことでした。現在、ボトウェ兄弟はガーナ・ケープコーストステーク、タコラディワードの監督です。ボトウェ家族は全員が教会ですばらしい働きをしてきました。マーク・オウサーも同じです。伝道時代からずっと教会の指導者や教師の責任を果たしてきました。

教会が正式にガーナに入ってから18年間、多くの人々はボトウェ家族やオウサー兄弟と同じような経験をしてきました。

ガーナの夜明け

ジョセフ・ウィリアム・ビリー・ジョンソンもその一人です。彼はガーナで教会が設立されて以来の教会員です。

ヨーロッパの友人から『モルモン書』と何枚かのパンフレットが送られてきたのは1964年のことでした。ジョセフ・スミスの証が記されたパンフレットに目を通したときのことを、ジョンソン兄弟は次のように語っています。「わたしは感動しました。」そして『モルモン書』を読んだとき、「真実だと分かりました。」彼は自分が知った福音の真理を人々に教え始めました。教会本部に手紙を出したところ、デビッド・O・マッケイ大管長から返事がありました。大管長は、引き続き聖文を勉強し、宣教師をアフリカに派遣できる時が来るまで忍耐し、忠実でありなさいと励ましてくれました。

ビリー・ジョンソンは周囲の人々から迫害を受けながらも14年間を耐え抜きました。彼は人々を集めては、教会の書物から見つけた福音の教えを説いていました。自分が理解した教会の方法にできるかぎり近い形で、集会に集まった人々を指導しました。けれども、ジョンソン兄弟は自分には教会の儀式を執行する権能がないことをよく承知していました。

ジョンソン兄弟は御霊の導きをしばしば受けました。

時々受ける示現や夢によって自分が支えられていることを感じていました。あるときは夢の中でブリガム・ヤングから励ましを受けました。そのため彼は息子にこの大管長にちなんで名前を付けています。また夢に現れた亡くなった親戚から、代理のバプテスマを必ず受けてほしいと頼まれたため、ジョンソン兄弟は死者の救いについて知りました。

「わたしは開拓者から励ましを受けました。」心穏やかに礼拝できる安息の地を合衆国西部に築くために、開拓者たちが苦難に耐えた話を読んだとき、ジョンソン兄弟はガーナでも同じ祝福にあずかる日が来るのを待ち望みました。

すべてのふさわしい男性会員に神権が授けられるという啓示が与えられた後の1978年に末日聖徒の宣教師がガーナに到着しました。そのときすでにジョンソン兄弟は数百人のガーナ人に福音の教えを聞いてバプテスマを受ける準備をさせていました。

現在ガーナ・ケープコーストステークの祝福師を務めるジョンソン兄弟は、人々に福音を受け入れる準備をさせるために様々な試練を乗り越えてきました。しかし、彼はそうした機会が与えられたことを喜びとしています。「わたしは大会に出席して、バプテスマを受けて教会に入った大勢の人々を目にする度に、主がなさった偉大な御業に喜びを覚え、思わず涙が出てきます。」

真理を広める

ガーナの教会には多くの先駆者がいます。その中には、勉強や仕事で外国へ行っている間にバプテスマを受けて、故郷に帰ってから自分が学んだ真理を家族や友人と分かち合った人々がいます。

モニカ・オヘネ-オパレは交換留学生としてニューヨークに滞在していた1979年にバプテスマを受けました。彼女は帰国して間もなく結婚し、夫のエマニュエルを改宗に導きます。それ以降、二人は様々な教会の召しを果たしてきました。現在、彼女はワードの初等協会の会長を務めており、夫はガーナ・アクラステークのステーク会長の責任を果たしています。けれども二人が指導者として果たした最大の功績は、二人が築いた家庭の中にこそ見いだせます。

オヘネ-オパレ家の5人の子供たちは、両親にはなかった機会に恵まれています。子供たちはガーナ人として福音の中で育てられた、最初の世代になります。「子供たちにはもう福音が身に付いているようです」と、オヘネ-オパレ姉妹は語っています。また、子供たちが様々

な問題に出遭っても、それを乗り切るための高い標準を与えられていることに、彼女は感謝の言葉を述べています。

ガーナにおける教会はエマニュエル・アブー・キシの経験に代表されるような出来事を通して成長してきました。それは、一人の証がほかの人々を信仰に導く触媒の働きをするということです。キシ兄弟は自分のきょうだいの家族の間で、それを経験しました。

エマニュエルはロンドンで医学を勉強していたときに、末日聖徒の宣教師と出会いました。妻のベネディクタ・エリザベスは病気とストレスで悩んでいましたが、長老たちの祝福によって癒されました。一方、エマニュエルは宣教師からレッスンを受けていたときに、何年間も疑問に思っていた事柄の答えを見いだしました。こうしてキシ夫妻は1979年にバプテスマを受けたのです。

二人はガーナへ戻ると教会の発展のために一生懸命働きました。キシ兄弟は地区代表を数年間務めた後、現在はガーナ・アクラ伝道部の副部長をしています。キシ兄弟は当初、自分のきょうだいの家族にまいた種がどれほど多くの実をもたらすかについて、見当もつかなかったようです。

エマニュエルは弟のスティーブン・アブー（ガーナでの命名の習慣によって、二人の姓は異なります）がアクラを訪れたときに、福音を紹介しました。スティーブンはバプテスマを受けてから、辺境の地にあるアボモス村の家に帰り、彼の言葉を借りると、自分の家族に福音を教えて家族を「組織」し始めました。やがて友人たちにも教えるようになり、宣教師が村に派遣されたときには、大勢の人々がバプテスマを受けるのを待ち望んでいました。

こうしたきっかけから、ガーナ・アボモス地方部が組織され、現在では600人以上の教会員がいます。村には二つの支部があり、末日聖徒は人口のかなりの割合を占めています。北へ4キロほどの所にサンコベナセ支部の新しい集会所が現在建築されています。

より充実した結婚生活を

ガーナの人々の家族関係も福音によって大きく変わりました。伝統的にガーナの男性は結婚生活において妻を導くというよりも、妻を支配する傾向にありました。いったん外出すると、なかなか家に帰ってこないこともしばしばです。けれども多くの末日聖徒の男女は福音の原則を結婚生活で実践することによって、人々に模範を示しています。

フィリップ・ハハグベは数年前にナイジェリアで働いていました。仕事に熱中するあまり家族を顧みない生活に明け暮れていました。そのため、家族のきずなが次第に弱くなっていました。さらに、フィリップはアルコール依存症にかかっていました。夫婦仲が疎遠になり、それぞれが離婚を考えていたとき、妻が宣教師に出会ったのです。フィリップも一緒にレッスンを受けることに同意しました。「宣教師の教え一つ一つが以前にどこかで聞いたような気がしましたが、どこで耳にしたのかは覚えていませんでした。」もし福音を受け入れなければ、永久に妻や娘と離ればなれになってしまうという夢を見て、フィリップはバプテスマを受ける決心をしました。

ハハグベ兄弟は1992年にガーナへ戻ると、愛する人や友人に自分が信じた教えについて話し始めました。その結果、3人の親戚が教会に入りました。ハハグベ兄弟は現在、アクラステーク、クリスチャンボルグ支部の支部長を務めています。ハハグベ支部長は自分の結婚生活と霊的な命が福音によって救われたと確信しています。「今わたしがあるのは、すべて教会のおかげです。」

ガーナの会員たちは神殿に参入することによって自分と家族が強められることを知っています。コフォリドゥーア地方部コフォリドゥーア第1支部で扶助協会会長として働いているアグネス・アドジェイはハンドバッグから折り畳んだ小さな紙を取り出して、敬虔な態度でこう言いました。「わたしは神殿推薦状を持っているんですよ。」アドジェイ姉妹の神殿訪問はいつになったら実現するのか分かりません。しかし、いつかはこの夢を実現できるという希望を持ち続けています。ガーナの多くの聖徒にとって神殿を訪問するための旅費を捻出することは並大抵ではありません。ガーナ・ケープコーストステークの書記を務めるアト・アンピアは神殿訪問の夢がまだかなえられていません。彼はこのように言っています。「わたしの望みは神殿で家族と結び固めを受けることです。聖壇の前にひざまずく日がいつか来ることを願っています。」

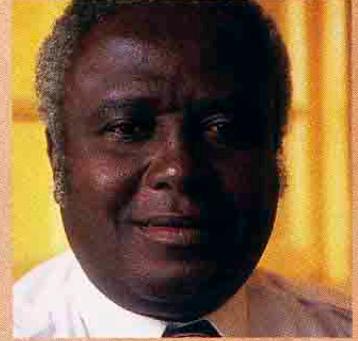
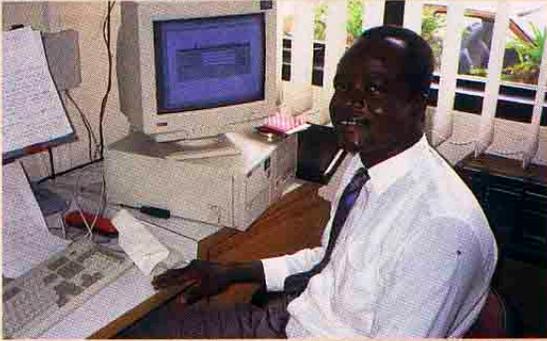
ドエ・アクア・アフリエ・カクはケープコーストステークのオラユニバーシティワードで扶助協会会長を務めていますが、彼女は神殿で結び固めを受けた数少ないガーナ人の一人です。カク姉妹は神殿に参入したことによって、日の栄えの王国に入る希望を持ち、そのためにふさわしい生活を送ろうと頑張っています。「日の栄えの王国に独りで入ることはできない」のがよく分かってきたからです。

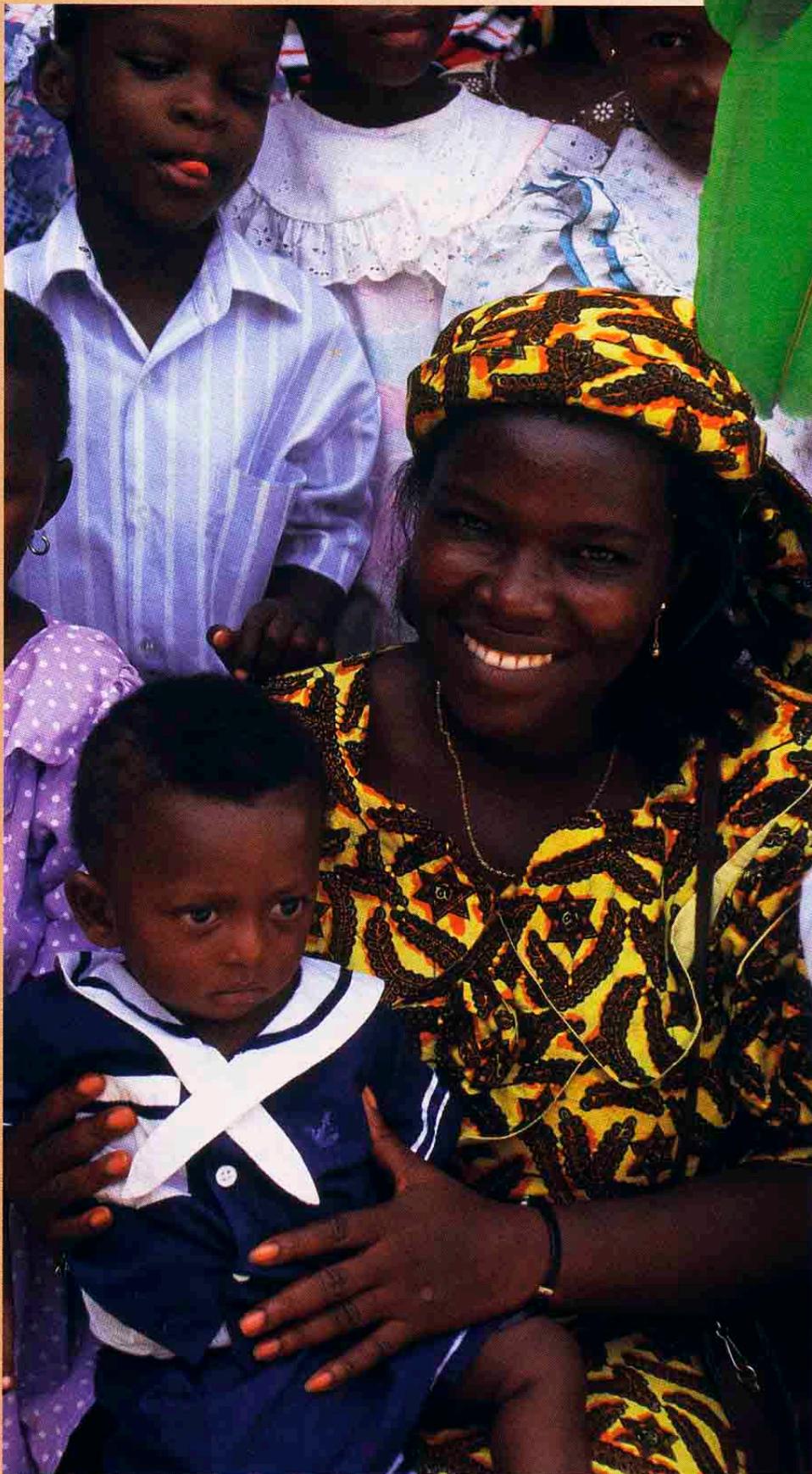
夫婦が一つになるのはとても大切に





下、左から——テサノワード監督会第一副監督のジョナサン・コランテン；
コフォリドゥーア近郊の風景；ガーナ・アクラスティックの高等評議員エドモ
ンド・フレンボン。下——ガーナ・アボモス地方部の地方部長スティーブ
ン・アピーニング・アブーとマーガレット夫人。





左——テマワードの初等協会の子供たちと教師。右上、上より——コフォリドゥーア第2支部のジョン・スレーブーカリ；ガーナ・ケープコーストステーク扶助協会会長セシリア・オドゥーロ。

す。カク姉妹は次のように言っています。「夫婦の間に誤解があると、一緒にひざまずいて祈ることも、心に温かいものを感じることもできません。」問題を解決する方法を見いだすには、夫婦が謙遜けんそんになって、御霊みたまの声に耳を傾けなければなりません。主に忠実で、御霊のささやきを受けている家族は、生活が大きく変わることに気づくはずでと、カク姉妹は話しています。

この大きな変化が教会の成長を促す力になります。ガーナの人々は、近所に住む末日聖徒の家族が日に日に強くなっているのを目にして、このような変化をもたらした教会がどのような教会かを知りたいと思っているのです。

試練のとき

ガーナでの教会の将来が危ぶまれた時期もありました。この国の末日聖徒を語るには、「凍結令」を説明しなければなりません。

1989年6月、ガーナ政府は末日聖徒イエス・キリスト教会に対して公の場所での礼拝、布教活動、そのほかの教会活動を一切禁止しました。このような禁止令が公布されたのは、教会について誤った情報が広く流布されていたのが原因になっていると、会員たちは考えています。

アボモスでは、当局者と軍隊がスティーブン・アブー支部長に案内させて集会所かきへ行き、集会所内のあらゆる物品を記録し、入り口の鍵を没収して、この集会所と村の郊外にある教会の農場への立ち入りを禁止しました。ガーナのほかの地域でも、神権指導者は同じような扱いを受けました。

家庭での礼拝までは特に禁止されていなかったため、会員たちは家族単位で礼拝を始めました。「けれども大きな声で歌うことはできません。逮捕されて刑務所行きになるからです」と、アブー支部長は当時を振り返って話してくれました。アブー支部長は禁止令を破ったかどで投獄され、罰を受けた教会員の一人です。地主から家を追い出された教会員もいます。しかし、神権指導者は危険も顧みず、羊飼いととしての責任を果たし続けました。秘かに会員である個人や家族を訪問して力づけたのです。

1990年11月に至って政府はようやく末日聖徒が社会に貢献していることを認め、禁止令を解除しました。ガーナの会員たちは喜びを満面に浮かべて、この朗報を家から家へと伝えました。既婚者と外国に召されている宣教師を除いて、自分の国で働いていたガーナ人の若い宣教師たちは、「凍結令」が発令されて間もなく名誉の解任を受けていましたが、残りの任期を果たすために喜んで

伝道地に戻りました。

多くの会員たちは当時を振り返って、政府の圧力は聖徒たちの信仰を強め、新しい霊的な機会をもたらす祝福だったと考えています。二人の伝道部長の副部長を務めたジョン・ブーアは、「『凍結令』以降、善良な人々はむしろ教会について詳しく知りたいと考えるようになりました」と語っています。うわさされていたことがほんとうかどうかを確かめたいという気持ちに駆られた彼らは、末日聖徒の友人や隣人に尋ね、その結果、福音について勉強してみないかという誘いに応じたのです。やがて多くの人々がバプテスマを受けました。

今日こんにち、「教会について知った人々は、自分たちの町にも教会が欲しいと思っています」と、ブーア兄弟は言います。彼らは教会が家族を強めるだけでなく、ガーナが直面している問題、例えば不道徳、10代の少女の妊娠、飲酒、覚醒剤の使用などの問題を解決する方法を教会が教えているのを知っています。

1994年にガーナ大統領、J・J・ローリングスは、十二使徒定員会のダリン・H・オークス長老と当時アフリカ地域会長会会長だった七十人第一定員会のJ・リチャード・クラーク長老の訪問を受けました。会員たちは大統領がこの訪問を受けたことによって、自分たちの宗教が多くのガーナ人の生活に大切な影響を及ぼしていることが認知されたと考えました。またそれは、ほかの宗教の人々と同様に、自分たちの信仰を堂々と主張できる時期が来たことを告げるものでもありました。

就職難

人々の認知を受けたからといって、ガーナの会員たちが常に平坦な道を歩めたわけではもちろんありません。ガーナの大半の人々と同様に、経済と教育の問題が大きいのかかっていました。

ガーナは発展の可能性を大いに秘めている国ですが、開発のための資金がまだ十分ではありません。仕事のえり好みはできませんが、規模の小さな事業はたくさんあります。これは、ガーナ人が与えられた仕事に一生懸命励む人々であるという証明でもあります。

アクラで工場を経営している末日聖徒の実業家クエク・アンノは、うだるように暑いトタン小屋で働く人々を指して、このように言っています。「彼らには、訓練を受けさえすれば仕事が見つかる兄弟やいたが、何人もいます。もし今、10人求人すると言えば、日が暮れるまでに100人が門の外に並ぶでしょう。」

機械工学の技術者であるアンノ兄弟は、仕組みは簡単

ですが頑強な、コンクリートのブロックとれんがを製造する機械を開発しました。この機械を1台設置すれば4人に新しい仕事を提供できるそうです。アンノ兄弟の会社には現在52人の従業員がいます。

ケープコースト第1ワードのホルブルーク・クリスチャン・マッカーサー監督の話によると、ワードの会員の80パーセントが失業中、または就職していても見習いの仕事しかない人々だそうです。男性の30パーセントは仕事がありません。そのほとんどが仕事の経験のない、あるいは技術を身に付けていない若い人たちです。ガーナに住む末日聖徒によく見られることですが、ケープコースト第1ワードの会員たちも共同で事業を興し、建築作業からガーナの重要な農産物であるカッサバで作った食品の販売に至るまで、様々な仕事をしています。

ガーナの末日聖徒が経済不況の中でも頑張っているのは、神に対する絶対的な信仰があるからですと監督は言います。監督は会員たちとの面接で、ほかの会員に否定的な影響を与える問題を抱えた人々も見てきました。「けれども少し励ますだけで、また頑張ろうという気持ちになってくれます。彼らは神に心を向けて、神が御心になったときに手を差し伸べてくださるという信仰を持っています。」

ガーナの会員たちはこのように、天父は自分たちを見守っておられることを確信する信仰を持っているのです。ある日のこと、ビートリス・エイションは、事業で現金を必要としたために、アクラの銀行からガーナの通貨で50万セディス（邦貨で約45万円）を引き出しました。彼女はだれかがじっと自分に目を注いでいるのを感じていました。その晩、強盗が彼女の家に押し入り、銃を数発発砲し、親戚の人を縛り上げ、ちょうど遊びに来ていた子供たちを部屋に閉じ込めました。エイション姉妹は銀行から引き出して来た現金と家財道具を強奪されましたが、幸いにもけがをした人はいませんでした。後で警察からの知らせによると、この強盗は別の事件では人を殺していたそうです。エイション姉妹は神の力によって家の全員が守られたと信じています。

強盗に遭った後、エイション姉妹の事業は結局奪われたお金が響いて倒産してしまいました。「とても大きな試練でした。でも、わたしたちは今も幸せです。」エイション姉妹は福音に忠実な生活を続けています。そして、改めて資金を導入する方法を探しています。

定職に就けないためと結婚生活を始める経済的な裏づけがないために、ガーナの多くの若者は結婚の時期を延ばしています。けれどもコフィ・オバレは、20代半ばと20代後半の帰還宣教師に対し、結婚を延ばすのは間違い

だと話しています。「確かに問題はありますが、とにかく結婚を目指して前へ進みましょう。」

コフィはガーナの大多数の男性が結婚する年齢の26歳で結婚しました。ガーナの若い教会員のほとんどは結婚に関してガーナ特有のしきたりに従わなければなりません。コフィと妻のテレサも法律で定められたこの伝統に従いました。お酒を持って行くのが慣例ですが、コフィは代わりにお金、布、テレサに贈る『賛美歌』と婚約指輪を持って、テレサの両親のもとを訪れました。

この結婚の儀式は1994年12月に行われたのですが、コフィとテレサは末日聖徒の教会堂で正式に結婚式を挙げるまで、夫婦として一緒に住もうとはしませんでした。教会で結婚式を挙げたのは1995年6月です。二人は教会で認められた制度に従ったうえで、結婚生活を始めたいと考えたのです。二人はその間、所帯を持ち住まいを確保するための費用を貯金しました。

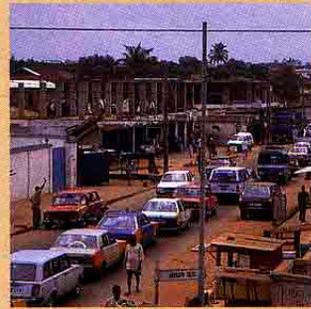
テレサは仕立ての仕事をしていたため定収入がありましたが、コフィは臨時雇いの仕事しかありませんでした。このような状況にもかかわらず、二人は「思い切った決断をしなければならない」と考え、結婚を決意しました。「賢明な末日聖徒の男性は、物質的なことだけにとらわれない、結婚の永遠の目的を理解した女性を、教会の中で必ず見つけることができます」とテレサは言います。「二人が心を合わせて協力すれば、必ず結婚生活が送れます。」

読み書きの能力を向上させる

会員にとってもう一つの課題は読み書きの能力を向上させることです。ガーナでは、官庁や実業界では英語が公用語ですが、ほとんどの人はアフリカの地元の言葉を使っており、日常生活では英語を使いません。教育の機会に恵まれた多くの人は英語かヨーロッパの言語を話します。また人によっては地元の言語を幾つか話します。ところがほとんどの学校は私的なグループ（多くは宗教団体）が経営していて、授業料は一部のガーナ人にとっては手の届かないほど高いのです。このため、教育を受けていない人々は技術を要する職業に就くことも、ほかの地域から来た人々との対応もできず、また聖文を味わうこともできないのが実情です。

このような背景から、ガーナのステーク、ワード、地方部、支部ではどこでも読み書きのクラスが開かれています。

アクラステークの若い女性会長であるアリス・サッキーは教会の若人に大きな信頼を寄せています。「少女たちの中から教会の将来を背負う、力強い指導者が必ず出て



左上——タコラディワードの初等協会の子供たち。右上、上から——新しい病院を背にして立つエマニュエル・キシとベネディクタ・エリザベス・キシ；アクバ通り；会員たちの家庭菜園を見るチャールズ・ベサ-サイモンズ監督；オラユニバーシティワードの扶助協会会長ドエ・アクア・アフリエ・カク。

きます。」少女たちは若い女性の活動に積極的に参加し、福音によく従っています。けれどもサッカー姉妹は若い女性の責任者として、姉妹たちに読み書きを指導する必要があるのを感じています。「一部の若い女性は学校に通っていません。わたしたちは、少女たち全員が若い女性を卒業するまでに、英語を読み書きできるようになって扶助協会に進むことを目標にしています。」

ケープコーストステーク扶助協会会長のセシリア・オドゥーロは、英語を理解できない人は福音を勉強するうえでハンディを負っていると言います。英語が分からない人は「福音のメッセージを自分で理解することができません。」しかし、必要に迫られて英語を学び始めた人々がやがて、聖文の宝を自分の力で見いだす喜びを得ている姿を、オドゥーロ姉妹は目にしています。

読み書きの能力を身に付けている人々は神の言葉をよく味わい、それによってもたらされる祝福を体験しています。アクラの帰還宣教師ロナルド・アジェイ・ダンソは、もし聖文をいつも勉強していなかったなら、人生の霊的なチャレンジを克服するのは難しかったと言います。以前に監督を務め、現在はアクラステークの高等評議員であるエドモンド・フレンボンは、神学上解決できなかった問題の答えを福音の中に見いだせたのがきっかけとなって教会に入りました。「教会の教えは整然としており、また論理的であることが分かりました。あらゆる真理は理性に訴えるものを持っています。」

フレンボン兄弟の部族であるアカン族では、わたしたちは霊界からこの世へ来て、この世を終えた後に霊界へ戻るという教えを、先祖から言い伝えられていました。天父の救いの計画は、この人生の目的に関する概念を広げ、明らかにしているとフレンボン兄弟は語っています。「わたしたちの祖先はこのことを伝えなかったのです。」

誤解を乗り越える

教会に関する誤った情報や誤解がいまだに残っているため、教会員は困難な局面に立たされる場合があります。多くのガーナ人は教会について誤った印象を抱えています。

ガーナ人の大半はキリスト教徒です。かなりの数のイスラム教徒もいますし、昔からある地元の宗教を信じている人も大勢います。キリスト教の各派は永年の歴史を経て国内に深く根付いていますが、一方では小規模の独立した無数の教会がガーナ中に散在しています。ほとんどは『聖書』から一つの教えを取り出して、その教えを中心とする教会です。このような宗教的環境はいろいろ

な意味で祝福になっていると、教会の会員たちは考えています。子供たちは小学校からイエス・キリストについて学んでいます。学校教育では道徳的な価値に重きを置いています。

けれども、このように宗教的な環境はあるのですが、末日聖徒の教義はほかの教会の教義とは異なるため、キリスト教ではないと主張する人々も大勢います。モニカ・オヘネ-オパレは学校を経営しています。何人かの生徒の親は、彼女が末日聖徒であることを知って子供を転校させてしまいました。しかし一方では、オヘネ-オパレ姉妹がクラスで教えた初等協会の歌から、キリストに関して末日聖徒がどのようなことを信じているかを知り、感嘆した親もいます。

ケープコーストステークのケネス・コベナ・アングム会長は、末日聖徒がイエス・キリストを信じていないとする風説は、次第に力を失っていると語っています。多くのガーナ人は「わたしたちの教会がキリストの教会であることを認めています。彼らはわたしたちの生活態度を見て、何か特別なものを大切にしていることを理解したのです。」事実、教会の教えは人々の間に広く知れ渡っています。そのため、末日聖徒は高い標準に従うことを人々から期待されています。

また、教会に対する昔からの批判であった「白人の教会」という言い方も、次第に影を潜めてきました。教会がガーナに入ったばかりのころは、人種も文化も異なる人々がアフリカにやって来て、アフリカの人々をまた搾取しようとしているという考えが広まっていました。けれども、新しくアフリカにやって来た福音が素晴らしい価値を持つことに気づいたガーナの人たちは、バプテスマを受けずにはいられませんでした。また、末日聖徒の宣教師から輝き出ているキリストのような愛を感じた人々は、彼らが自分たちを食物物にするとは信じられませんでした。今日、ガーナのステーク、ワード、地方部、支部の指導者はガーナ人自身が務めています。彼らは教会のプログラムを立派に運営して、世界中の会員たちに模範を示しています。

模範の力

ガーナの会員たちの愛に満ちた模範は、友人や家族に力強い影響を与えています。

現在コフォリドゥーア第2支部の書記を務めているフィリップ・オヘネは、彼の末日聖徒の雇用主のことを次のように言っています。彼は「行いを通してわたしに教会を紹介してくれました。彼は口にするのは、必ず実

ケープコーストステーキのステーキ会長ケネス・コベナ・アナムとジャネット夫人。

行する人でした。」こうした経緯があって、フィリップは福音を勉強してみる気になりました。教会の評判がどのように形成されるかについて、「人々はどんな言葉を耳にするかではなく、どんなことを目にするかで判断します」とフィリップは言います。

ジョン・スーレーブーカリの両親はイスラム教の信者ですが、子供たちの行いを見て彼らが末日聖徒の教会へ行っていることに好感を抱いています。ジョンと兄と二人の姉が末日聖徒です。ジョンの話によると、両親が好意を持っているのは、福音によって子供たちが変わったからです。姉の一人と兄は、専任宣教師の召しを果たしました。現在コフォリドゥーア第2支部の若い男性第二副会長の責任にあるジョンは、次は自分が伝道に出たいと思っています。そのためには、2年間の国家に対する奉仕の義務を果たさなければなりません。この義務は、兵士としての訓練に始まり学校での教育に至るまで様々な分野に分かれています。

このように会員たちの模範が目立つのは、人生のチャレンジや試練に遭遇したときの対応が、福音を知っているためにほかの人々と異なっているからだと思われます。

「末日聖徒は様々なチャレンジを、むしろ霊的に成長する機会に変えています」と言うのは、アクラのテサノワード第一副監督をしているジョナサン・コランテンです。ほかの教会では、神のもとに来る人の問題はすべて解決されると教えていますが、感謝すべきことに、わたしたちが教えられているのは、この世の試練がすべて取り去られるわけではないということです。「これらの試練は天父の計画の一部であって、わたしたちがより良い未来を築くための準備となるのです。」

逆境に耐えてきたコランテン兄弟は、すべての事物には反対のものと語ったリーハイの言葉を心のよりどころにしています(2ニーファイ2:11, 15参照)。「わたしはただ、人生で降りかかるあらゆることに耐える勇氣を持てるように祈るだけです。」

ケープコーストのカク姉妹はこう語っています。聖徒たちは幸いなことに、チャレンジに出遭っても最良の助けが与えられます。「もし御霊を受けていれば、どのような状態に置かれても、必ず福音に従って生活できます。」

カク姉妹は、全世界にいる教会員に思いをはせて、「わたしたちは同じ福音、一致、愛……すべてを分かち合っています」と言います。肌の色は違っても、「聖徒が同胞である聖徒に出会うとき、そんなことは消し飛んでしまいます。御霊は同じであり、御霊はわたしたちを一つにしてくれるからです。」□



「わたしたちは信

ダグラス・J・フェルメーレン

12歳で神権を受け、執事になってすぐに、わたしはカナダ王立空軍士官学校の士官候補生になりました。軍隊生活に適應するのは今までになく、チャレンジに満ちた経験でした。特に最初の夏がどんなに大変だったかはよく覚えています。同年代の友人たちが外で遊んでいるときに、新入りの士官候補生だったわたしは、基礎訓練の真っ最中で、どのように行進し、命令に従うかを学ばなければなりません。

士官候補生のやることと言えば、まずは行進でしょうが、残念ながらわたしはあまり上手に行進ができません

でした。太陽はざらざらと照りつけ、深緑の制服を着て行進するときには耐えられないほどの熱さでした。気絶するのではないかとさえ思いました。食事は冷たく、軍隊食堂のメニューは、わたしの嫌いな物ばかり。軍隊での生活は確かにそれまでわたしの送ってきた生活とは違っていました。

軍隊生活最初の土曜日の夜のことです。就寝前に士官候補生が全員、兵舎の廊下に集まりました。軍曹が現れると同時に、全員が「気をつけ」の姿勢になりました。

「明日の朝のことだが、全員教会の礼拝に参加する。

ILLUSTRATION BY PAUL MANN



じる」

この基地には、教会は二つしかない。カトリック教会、それからプロテスタント教会、この二つだ。明日までにどちらの教会に行くか決めておくこと。いいか！」と軍曹は叫びました。

若い士官候補生たちが、少しの乱れもなく、一斉に「はい、軍曹！」と大きな声で答えると、軍曹は立ち去

りました。

その夜わたしはなかなか寝つけませんでした。末日聖徒イエス・キリスト教会の集會に出席できないのは、今回が初めてでした。わたしはどうしたらよいのか分かりません。ベッドから出てもう一度祈りました。問題の答えをどうしても知りたいと思いました。天父に祈りました。「ほんとうにどうしてよいのか分からず、恐くてなりません。どうぞわたしを助けてください。」二度目にベッドにもぐり込んだときも、まだ不安はありましたが、今度はきっと問題の解決方法が見つかるだろうという気



持ちがしました。

翌日の早朝、わたしたちはしとしと雨の降る中、廊下に整列しました。雨よけのジャケットを着た軍曹が、わたしの恐れていた命令を下しました。「カトリックはこちら、プロテスタントはこちらに並べ！」全員が並び終わったときに、わたしだけが二つの列の真ん中に立っていました。

軍曹は辺りをぎろりと見渡し、こう叫びました。「おまえはどっちだ。」

「分かりません。わたしは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員です。」

軍曹は恐ろしい目つきでわたしをにらみつけると、「おれについて来い」と命令しました。

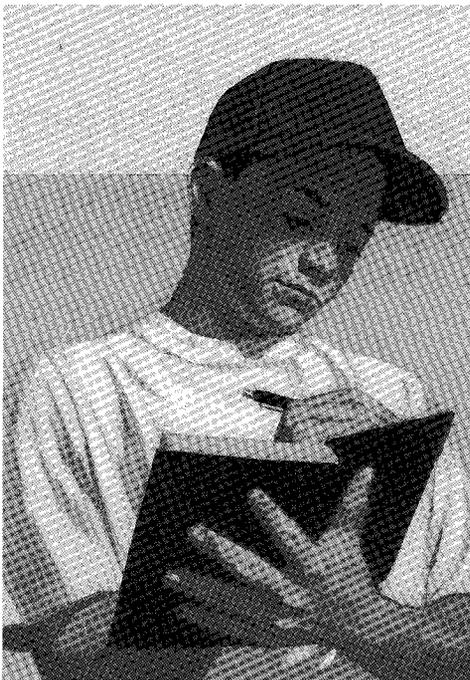
わたしは従軍牧師の兵舎に連れて行かれました。中には日曜の集会の準備をしている牧師が見えました。軍曹がドアをどンドンとノックすると、中から入るようと言う声がありました。雨降る中、兵舎に入ると、法衣に身を包み、首の回りにカトリック司祭の詰め襟をした紳士が迎えてくれました。

軍曹は不満そうに「こいつは末日聖徒です」と言うのと雨の中に消えて行きました。

司祭はわたしに中に入って座るように言うと、もう一人の牧師とこの特別な状況をどう処理すればよいか相談し始めました。結局、決定はわたしたちの教会についてもっとよく聞いてからということになり、「あなたの教会ではどんなことを信じているのですか」と聞かれました。

最初は言うてよいか分かりませんが、突然心にひらめくものがありました。わたしは信仰箇条を暗唱し始めたのです。「わたしたちは、永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストと、聖霊とを信じる。」

二人はなるほどとうなずきました。



続けて言いました。「わたしたちは、人は自分の罪のゆえに罰せられ、アダムの背きのゆえには罰せられないことを信じる。」

この時点で、司祭の一人がプロテスタントの牧師のところへ行った方がよいだろうと提案しました。

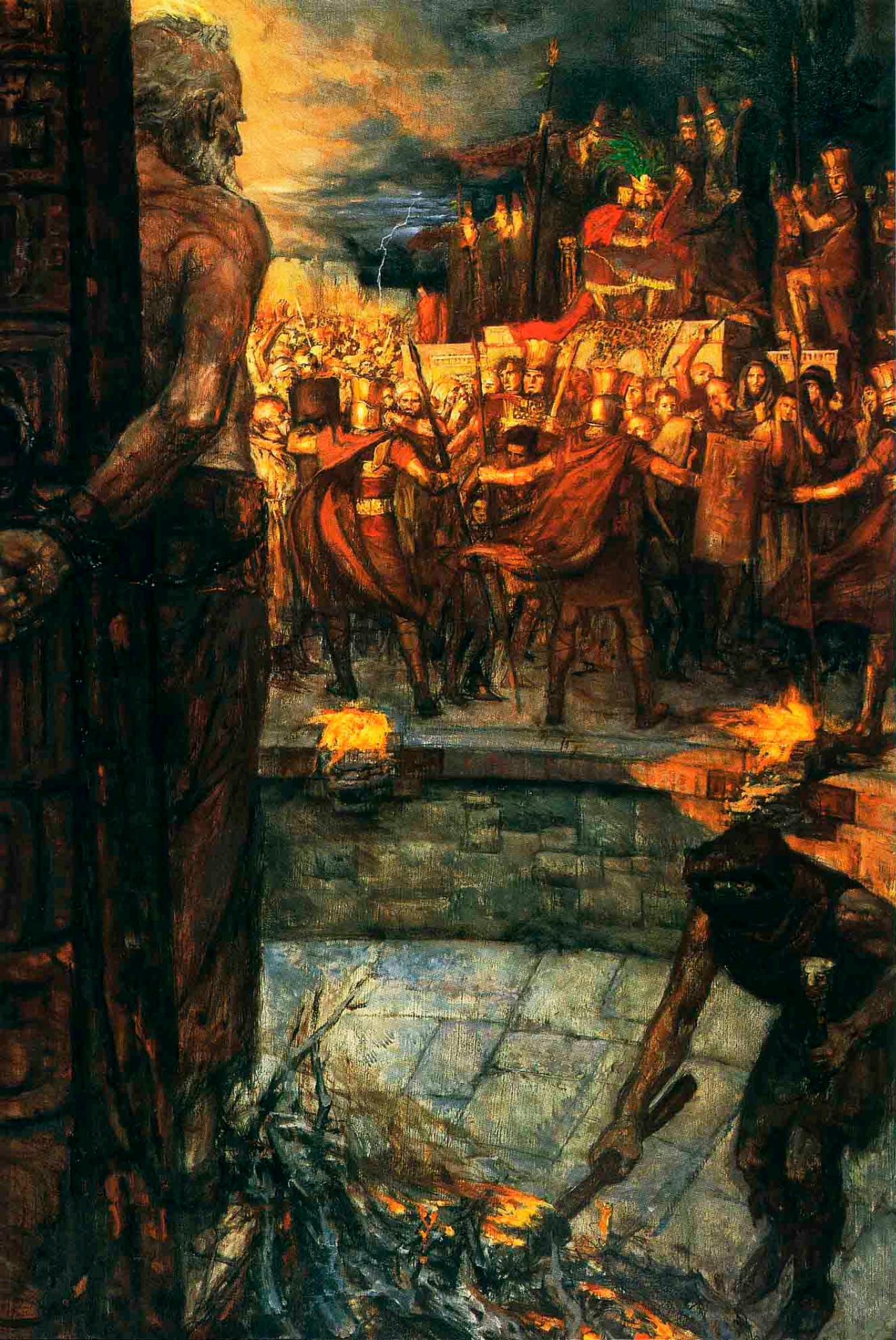
プロテスタントの牧師が集会の後で、わたしの兵舎に来て集会の印象について聞いてきました。わたしは自分の慣れ親しんだものとはまったく違うと告げました。

その牧師はいすを引き寄せて座ると「末日聖徒はほかにどんなことを信じているのかね」と尋ねてきました。同じ部屋にいた士官候補生も、近くに寄ってわたしの言葉に耳を傾けました。信仰箇条を全部そらんじるのはほんとうに心踊る経験でした。わたしが『モルモン書』について、どういう意味でこの書物がイエス・キリストの第2の証と呼べるのか話したときに、だれもが興味を持ってくれました。

その夜遅く母に長距離電話をかけ、困難な状況がどのようにして伝道の機会に変わったのか話して聞かせました。また友達になった牧師にプレゼントするのに、『モルモン書』を1冊送ってくれるようお願いしました。

1週間が過ぎ、とうとう『モルモン書』が届きました。裏表紙に自分の証を書き込み、これもまた母が送ってくれた信仰箇条のカードを1枚挟んで入れました。牧師は喜んでそのプレゼントを受け取ってくれました。また必ず読むと約束してくれました。

その牧師の生活が『モルモン書』を通して変わったのかどうかわたしにはまったく分かりません。しかし、振り返って見ると、喜んで真理に堅くつくこと、信仰箇条を理解することの大切さを、天父がどのようにして教えてくださったのかがよく分かります。□



「自らの証を結び固めるアビナタイ」ロン・クロスビー画

イエス・キリストについて人を驚い動かす力強い証をした後、アビナタイは死刑を宣告された。「そこで祭司たちはアビナタイを捕らえて縛り上げ、薪を燃やしてその肌を焼き苦しめ、火あぶりにして殺した。……アビナタイは……倒れて焼け死んだ。まことに、彼は神の命令を拒もうとしなかったために殺され、自分の言葉が真実であることを死によって確かめたのである。」(モ一サヤ17：13、20)



ガーナ人の大勢の
末日聖徒から輝
き出るキリストのよう
な愛は、彼らの友人や
隣人に大きな影響を与
えている。福音に従っ
て人生の諸問題に立ち
向かう彼らの姿は、際
立った模範になってい
る（「信仰あふれるガ
ーナの人々」 p.34参
照）。





日本の教会先駆者、 佐藤龍猪兄弟(96歳) 逝去

日本の教会初期の改宗者の一人、佐藤龍猪兄弟が6月15日死去し、19日、ソルトレーク・シティで葬儀が行われた。享年96歳。

化学技術者として働いていた佐藤兄弟は、1899年10月に愛知県に生まれた。彼の教会での奉仕の生涯は、1946年7月7日に合衆国軍人、C・エリオット・リチャーズ兄弟（現ユタ州ジョーダンリバー神殿神殿長）からバプテスマを受けたときから始まった。

英語に堪能であった佐藤兄弟は、やがて日本伝道部の公式通訳者となり、標準聖典をはじめ、ジェームズ・E・タルメージ著『信仰箇条の研究』【キリスト基督イエス】など様々な教会関連の書籍を日本語に翻訳した。

1958年、佐藤兄弟は35年連れ添った伴侶の千代姉妹（旧姓秋月）に先立たれた。そして1960年代に入り、佐藤兄弟がユタ州プロボのブリガム・ヤング大学で客員教授として日本語と比較宗教学を教えていたときに、ソルトレーク神殿で平西登美子姉妹と再婚した。夫妻はソルトレーク・シティにある教会の系図協会で専任の系図委員となり、後には新たにできた東京神殿で神殿宣教師として奉仕した。

このほか佐藤兄弟は、合衆国で市民権を得、ソルトレーク神殿の結び固めの儀式執行者として、またソルトレーク・グラナイトステーク第1支部支部長会の一員としても活躍した。

遺族は、登美子夫人、娘、二人の息子、妹。□

佐藤龍猪兄弟の略歴

- 1899年10月16日、愛知県愛知郡鳴海町（現名古屋市緑区の一部）で出生
- 1912年、鳴海小学校卒業
- 1917年、愛知県立第五中学校卒業
メソジスト教会に改宗（18歳）
- 1921年、仙台第二高等学校卒業
- 1923年、秋月千代と結婚（24歳）
- 1825年、東北帝国大学（現東北大学）理学部化学科卒業
- 1925-1926年、東北帝国大学助手として勤務
- 1926-1928年、三重県女子師範学校（現三重大学）教諭
- 1928-1935年、宮城県師範学校（現宮城教育大学）教諭
- 1935-1938年、東北帝国大学金属材料研究所勤務
- 1938-1945年、日本金属工業株式会社川崎工場勤務
- 1945年、終戦後、鳴海に戻る
- 1946年7月7日、末日聖徒イエス・キリスト教会に改宗（46歳）
- 1949-1965年、東京で教会の翻訳業務に携わる
- 1957年、龍猪兄弟の翻訳による『モルモン経』『教義と聖約』『高価なる真珠』が発刊される
- 1958年、妻・千代（55歳）死去。
- 1965年、米国（ハワイ）に渡る。その後、米国ユタ州ブリガム・ヤング大学客員教授として招かれる
- 1966年、平西登美子と結婚（66歳）
ユタ系図協会勤務
- 1970年、米国民権取得
- 1980-1982年、東京神殿宣教師として来日
- 1996年6月15日、ソルトレーク・シティで死去（96歳）

末日聖典の翻訳者・ 佐藤龍猪兄弟、 96年の足跡

江戸の代が終わり、日本が近代化への道を歩み始めた1899年(明治32年)10月16日、佐藤龍猪兄弟は愛知県愛知郡鳴海町(現在の名古屋市緑区の一部)で、佐藤家の長男として誕生しました。交通の大動脈、東海道鳴海宿の越後屋という旅籠が佐藤家代々の家業でした。

幼少のころの龍猪兄弟は、体が弱かったのですが、向学心や向上心は人一倍強く、1909年に鳴海小学校に入学してから学級委員などを務めます。1912年には愛知県立第五中学校に入学。自宅から8キロある道のりを毎朝5時に起きて徒歩で通学しました。

18歳でキリスト教に改宗

このころ彼は、アメリカのオハイオ州から来たメソジスト教会の伝道師に好感を抱くようになり、18歳のときにバプテスマを受けました。「彼は水の入ったおわんに手を浸し、その手でわたしの頭を軽くたたきました。それがバプテスマでした」と佐藤兄弟は言っています。それから1年ほど、メソジスト教会の書記として奉仕するようになります。

キリスト教との出会いは、彼の人生に多大な影響を与え、後に末日聖徒イエス・キリスト教会に改宗する基ともなりました。メソジスト教会に通うようになってから、彼は英語に強い興味を持って学び始めました。

第五中学を卒業し、仙台第二高等学校を経て仙台の東北帝国大学(現東北大学)に進学します。化学を専攻し、好きな英語の学科では、「荒城の月」の作詞者で有名な土井晩翠がシェークスピアの作品群から教えていました。難解なテキストではありましたが、

そのおかげで佐藤兄弟は格調高い英語の語学力を習得できました。

在学中、土井晩翠によって紹介された3歳年下の秋月千代という女性に出会います。二人は意気投合し、1923年に結婚しました。土井晩翠が仲人を務めました。

大学卒業後、彼は様々な舞台で能力を発揮します。まず東北帝国大学の副手として働き、その後三重県女子師範学校の教諭として、次いで宮城県師範学校で教鞭を執ります。1935年からは再び東北帝国大学に戻り、金属の研究に携わります。そして、アンチモンを産出する朝日鉱山(山形県)の鉱山長を勤めていましたが、戦争が近づいていたこともあって、金属の研究が国にとっても重要な課題となり、1938年、佐藤兄弟は日本政府の要請により、日本金属工業株式会社の川崎工場に研究課長として赴任するため、横浜に引越します。

この地で、彼らは最初の子供の泰生さんに恵まれます。泰生さんが生まれた2年後、長女の敦子さんが誕生しますが、その年、日本は太平洋戦争に突

入します。佐藤兄弟はその間も日本金属工業に勤務するのですが、やがて悲劇が起こります。まだ幼い敦子さんが、終戦のその日に栄養失調と赤痢のため亡くなります。戦争のために十分な薬を買うことができなかったのです。

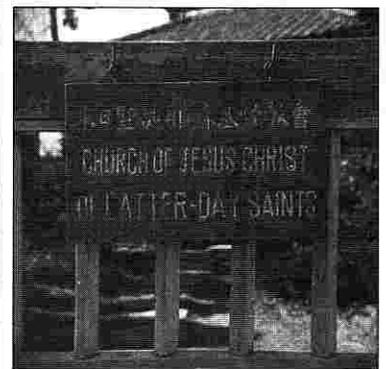
末日聖徒のアメリカ兵との出会い

終戦後、佐藤一家は東京を離れ、幾分か食糧事情の良い故郷の鳴海に戻りました。そこで、みそやしょうゆを作って販売し、生活の糧としていました。

東海道の道沿いに、当時「一六」という呉服店がありました。店頭には、人目を引く友禅模様の反物が置かれていたので、みやげ物を探すアメリカ兵たちはジープを止め、しばしばこの店を訪ねるのでした。龍猪兄弟は休日に、この呉服店や近くの小道具店で、そのような兵隊たちと店主の間の通訳を買って出っていました。

11月22日、その一六呉服店に、以前知り合ったアメリカ兵がやって来ました。龍猪兄弟は、彼らにお茶やたばこを勧めましたが、彼らは丁寧に断りました。その理由を尋ねると、兵隊たちは、自分たちが「モルモン」であることを告げます。この日から、佐藤家族の半年間にわたる回復された真理への探求が始まるのです。このときの出来事は、後に『エンサイン』(Ensign)や『聖徒の道』に掲載された記事「一杯のお茶」に詳しく書かれています。

佐藤家の自宅は、彼らのみならず近



佐藤家の入り口に出された看板

最初の日曜学校に解放された佐藤家(愛知県鳴海町)

隣の人々にとっても福音学習の場となりました。毎週土曜日には「聖書研究会」が開かれ、2、3人の教会員の兵隊がジープに乗って田舎町の鳴海町までやって来て福音を教えました。多いときは家に入り切らないほどたくさんの方が集まり、窓の外からレッスンを聞くような有様ありさまでした。また近所の子供たちのために日曜学校が開かれ、1948年に日本伝道部が再開されるまで続けられました。

彼に福音を伝えた兵隊の一人は、こう語っています。「佐藤兄弟は、自らが彼自身の教師でした。読書課題を与えると、次の機会までにすべて精読し、わたしたちが訪ねると、たくさんたくさんの質問をするのです。いつもリーガルサイズの紙数枚に、たくさんたくさんの質問事項を書いておくのでした。」

佐藤家を核にした福音学習の場には、次第に多くの末日聖徒の兵隊たちが参加するようになりました。その中に、後に十二使徒となるボイド・K・パッカー長老の姿もありました。龍猪兄弟とパッカー長老は、このときから生涯にわたる友情を培うこととなります。

1946年7月7日、歴史に残る日がやって来ました。龍猪兄弟と千代姉妹のバプテスマが行われたのです。日本で戦後初めてのバプテスマでした。バプテスマ会は、爆撃の難を逃れた大学のプールで開かれ、龍猪兄弟はC・エリオット・リチャーズ兄弟から、千代姉妹は当時21歳だったボイド・K・パッカー長老からそれぞれバプテスマを受けました。

名古屋には支部がなかったので、佐藤家族の所属は東京支部になりました。しかし東京に通うことは不可能ですから、引き続き佐藤家で日曜学校が持たれました。

翻訳者として

翌年、龍猪兄弟はアロン神権の執事の職に聖任されました。その年のある日、末日聖徒のアメリカ兵が、英文の伝道用パンフレットを持って来て、龍猪兄弟に翻訳を依頼しました。これが、龍猪兄弟の天職としてその後長く従事することになる翻訳業務の始まりでした。

1948年、伝道が再開されると伝道用資料の翻訳の必要性が増し、龍猪兄弟

は正式に翻訳者に任命され、東京に引っ越しました。

龍猪兄弟は、末日聖典である『モルモン経』(当時)、『教義と聖約』『高価なる真珠』(当時)の翻訳に携わるようになるわけですが、そのころ日本語になっていた聖典は、1909年に出版された『モルモン経』だけで、しかも文語体であったことから、読みやすい口語体に翻訳し直すことが必要でした。ちらしやパンフレットなどの翻訳とともに、聖典の翻訳に備えてより深く教義の勉強をするために考察し、祈り、瞑想を繰り返しました。またジェームズ・E・タルメージ著『基督イエス』の翻訳も手がけました。

多くの労力の後、1957年5月、龍猪兄弟の翻訳による『モルモン経』『教義と聖約』『高価なる真珠』が出版されました。着手から9年の歳月を要した偉業でした。

しかしながら、この重要な責務を果たした翌年、彼の信仰深い助け手であった伴侶はんりよの千代姉妹が心臓発作で亡くなりました。龍猪兄弟は悲しみに暮れますが、主への固い信仰が彼を支えました。

1960年代に入ると、教会員の数も増し、神殿への関心が高まってきました。当時、北部極東伝道部のドウェイン・N・アンダーセン部長は、エンダウメントや結び固めなど神殿での祝福を日本人が得るために、ハワイ神殿への訪問を計画します。そのために神殿の儀式を邦訳することが必要となり、1965年1月、龍猪兄弟は依頼を受けてハワイに渡りました。

1月23日、彼はオアフ島のハワイ神殿で自分自身のエンダウメントを受けると、すぐさま神殿の中で神聖な儀式の翻訳に取りかかりました。相当な月日を要すると思われていたこの仕事を、わずか1か月で終え、その年の4月、



ボイド・K・パッカー長老とはバプテスマを受けて以来の知り合い(1987年)

初めてソルトレーク・シティーを訪問し、教会の総大会に出席しました。また管理祝福師のエルドレッド・G・スミス長老から祝福師の祝福を受けています。

第2の結婚生活

そのころ、彼の二人目の妻となる平西登美子姉妹との出会いがありました。1966年7月29日、ソルトレーク神殿で永遠の結婚によって結ばれ、平西姉妹の一男一女の子供とともに新しい家庭を築きました。

ハワイでの仕事を終えた後、ブリガム・ヤング大学から日本語と比較宗教学を教える客員教授として招かれます。大学で教える傍ら、系図協会の臨時職員として働き、7万4,000人の日本人の名前をローマ字にし、人名簿を作成しました。やがて系図協会の正職員となり、1967年には記録収集のために日本に戻り、長崎から北海道までを調査して歩きました。

1970年、ユタの日本人支部で大祭司グループリーダーをしていたころに米国市民権を得ました。また、この年は日本人の末日聖徒350余人がソルトレーク神殿への団体参入を果たした年でもありました。それに先立ち龍猪兄弟は、当時の預言者ジョセフ・フィール

ディング・スミス大管長から結び固めの儀式執行者に任命され、10月にソルトレーク神殿を訪れた日本の聖徒たちに母国語で結び固めの儀式を授けることができたのです。

やがて彼は、日本の地でも神殿の業に奉仕する機会を得ました。1980年、東京神殿がスパンサー・W・キンボール大管長によって奉獻されたその年、彼と登美子姉妹は最初の神殿宣教師として召されます。

召しを終えてアメリカに帰国してからも、御業への献身が終わることはなく、彼の翻訳による『神殿結婚の祝福』が1991年に出版されます。これが龍猪兄弟の最後の翻訳物となりました。

「20年後に末日聖典の改訂が……」

龍猪兄弟は、特別な使命を果たしてきたにもかかわらず、とても謙遜です。いつでもだれにでも自分が得てきた祝福を分かち合うのです。そして、すべての貢献を通して主に栄光を帰していました。後年、自ら翻訳した『モルモン経』について述べた言葉からもそれが分かります。「わたしが完成させた『モルモン経』の言葉が難しくて読みにくいと言われる方がいらっしやいますね。エドワード・L・クリソード伝道部長も、若い人たちがよく理解できるようにと、わたしに改訳を依頼されたのでした。もっと分かりやすい日本語に改訳されてもいいと思います。むしろ、そうされるべきです。今や日本語に溶け込んでいる英語もたくさんあるのですから。」

龍猪兄弟は、ソルトレーク神殿の儀式執行者として、日本人の若いカップルに結び固めの儀式を執行することに至上の喜びを感じていました。そんなカップルに1975年の夏、神殿の中で「今ある『モルモン経』は、20年後に新しく現代語に改訂されるでしょう」と告げました。まさにその言葉のとおり、1995年に改訂新版の『モルモン書』が出版されたのです。

聖典の翻訳に代表される龍猪兄弟の働きは、日本の教会の発展にとってなくてはならないものでした。わたしたちは皆、彼の豊かな才能、真理への洞察力、御業への献身によって祝福を受けているのです。□

夫・佐藤龍猪との出会いと結婚からの祝福

——永遠のきずなに心からの感謝——



ソルトレーク・
グラナイトステーキ
第1ワード
佐藤登美子

わたしが最初に龍猪に会ったのは、1965年4月、ソルトレークの総大会のときでございました。龍猪は、そのときソルトレーク第1ワードの聖餐会でお話をしていたのでございます。その日わたしが龍猪から受けた第一印象は、この人は大変まじめな人ではないかということでした。そのときの龍猪のお話は、とても奥深い、内容のあるお話で、わたしは大変感動したこと、そしてそのとき龍猪の話した言葉は、大変上品で教養があり、わたしは大変関心させられたのを覚えております。

「一杯のお茶」の主人公

このときから3年前の『インブループメント・エラ』(Improvement Era)

誌に、「一杯のお茶」と題して、龍猪の改宗の物語が載っておりました。わたしは龍猪に最初に会ったときに、もうすでにこの物語を読んでおりました。この物語は大変胸を打つ感動的なお話で、ほんとうにあったこととは思えないほど印象深いものでございましたので、わたしがソルトレークの第1ワードで龍猪がお話しているのを初めて見たときに、この人があの物語の主人公かとほんとうに驚きました。その日は聖餐会の終わった後、夕方、ある教会員の家庭に集まってファイヤサイドを開き、その席に龍猪を招くことになっておりました。そして不思議なことに、その日はわたしが龍猪を車でファイヤサイドに連れて行くことになりました。そのファイヤサイドには、多くの方が集まっておりました。

龍猪はそのときにも英語でお話をいたしました。そのお話も、聖餐会のお話にも増してすばらしいものでした。ファイヤサイドの後、龍猪をそのころ滞在していたリチャード先生のお宅に送るときに話が弾み、翌日、龍猪

の買い物のお手伝いをするようになりました。その買い物の後、龍猪にフライドチキンをごちそうになったことを覚えております。

わたしはこの出会いを、そのとき、天のお父様が備えておいてくださったとは、夢にも思いませんでした。

その後、龍猪はわたしの娘の美智子に会いましたが、龍猪と美智子とは、とてもよく話が合っていました。美智子は、『聖徒の道』に載っておりました龍猪の写真を切り抜いて、自分の寝室の壁にはるほ



米国から帰国したときの佐藤夫妻（一九七五年）

ど、龍猪のことが気に入っておりました。龍猪がそのころアメリカでは珍しい丸い縁取りのロイド眼鏡をかけ、白髪であったことも、美智子は気に入っておりました。

龍猪の方も、美智子が気に入っていたらしく、わたしに「美智子さんは日本とアメリカの両方の文化を身に付けた、とても良いお嬢さんですね」と言って誉めてくれました。そのとき、わたしは母親として大変うれしく思いました。

「ママ、佐藤兄弟と結婚したら」

その後、龍猪と美智子とは、時々手紙のやり取りをしておりましたが、ある日、美智子が突然、「ママ、佐藤兄弟と結婚したらどう」と言いました。わたしは突然のことに、はにかんで「ばかなこと言わないで」と言いましたが、きっとそのとき美智子は、わたしたちがこの世で結ばれると前世で知っていたことを思い出したものと思います。

翌1966年の7月に、わたしは祝福文を読んでおりました。わたしの祝福に「あなたはこの世の人生を終えた後、天父のもとに帰り、日の栄えの祝福を享受することでしょう」という文章があります。そのとき、この言葉を読んで、わたしはきっと永遠の結婚をすることになると、心に感じました。

墓地での祈りに心打たれ

龍猪とわたしが結婚するきっかけとなったのは、ある日お墓について龍猪と相談したときでした。龍猪は以前、日本からの送金を受け取ったとき、亡くなった先妻の千代のために墓石を買うことができると言っていたことがありました。その日わたしは龍猪に、わたしの父が1960年に亡くなって墓石を買いたいだけけれど、まだ墓地の支払いが残っているの、父の墓石はまだ買っていないということ、そして、その日が墓地の代金の返済日で、その支払いのためにお墓に行くことを話しました。そのとき龍猪は、それならわたしの父の墓地と一緒に行って、墓地と墓石について事が良く運ぶように、祝福の祈りをいたしましょうと言ってくれました。

その日墓地で、わたしは龍猪の祈りに大変心を打たれ、亡くなったわたし

佐藤龍猪兄弟は、一九六六年、登美子姉妹と結婚した。中の二人がお子さんの幸二兄弟と美智子姉妹。



の父が、とても喜んでくれたと感じました。ほんとうにわたしは、そのとき、龍猪の祈りの言葉を聞きながら感動し、心が喜びに満たされ、目から涙があふれてまいりました。わたしの心は、平安に満たされ、龍猪に対する感謝の念でいっぱいになりました。

祝福の祈りを終えて車に戻ったときに、龍猪は、急にこのように申しました。「わたしは、あなたの亡くなられたお父さんの新次郎さんに、お墓の所で祈ったときに、あなたと結婚してよいか尋ねました。そして、許してもらいました。」そして、「あなたと初めて会ってから、14か月たちました。ですから、ノーと言わないでください」とも言いました。わたしは大変驚いて、どう答えてよいか分からず、そのときは黙っておりました。

子供たちの善い父親に

それからわたしは家に帰りました。そのとき大変不思議な体験をいたしました。わたしは家に入るとすぐ、明るい光を見ました。その光の中で、龍猪が白い衣を着て立っているのが見えました。雲のような中に、上半身が見えたのです。またすぐに「彼はあなたの子供たちの善い父親になるでしょう」という声を聞きました。

わたしたちは、1966年の7月29日にソルトレーク神殿で永遠の結婚の儀式をいたしました。龍猪は子供たちに対して、大変善い父で、いつも親切で、しかったりすることはありませんでした。子供たちが学校に行くときは学費を準備し、子供たちが伝道に出るときには援助をいたしました。わたしは、

龍猪が子供たちの父親になったことを大変うれしく思いました。龍猪は、子供たちに父親としての模範を示し、またわたしの娘の美智子、息子の幸二と結び固めの儀式を受け、永遠の家族となりました。また龍猪は、亡くなった先妻の息子である泰生と妻の美奈子に毎週土曜日になると電話をかける優しい父親でもありました。

夫に教えられたこと

わたしは龍猪から多くのことを教わりました。人は人形によって幸せになることができると言って、わたしに木目込み人形を作るのを学ぶよう教えてくれたのも龍猪でした。また、長い間務めていたプライマリーの責任から扶助協会の責任に変わったときに、わたしががっかりしているのを見て、龍猪は、「扶助協会という字を見てごらん。皆さんを助けるための組織でしょう。大変すばらしい責任に召されましたね」と言ってくれました。また、糸図を通して、亡くなった方を救う儀式をすることの大切さを、龍猪は教えてくれました。

わたしは、天の父なる神様が、龍猪が亡くなった後まで永遠に続くきずなを、そして幸せな生活を、また不思議な龍猪との出会いを、準備してくださったことを、心から感謝しております。龍猪は、いつもわたしに温かく優しく、ほほえんで言葉をかけてくれました。またすべての人に、慈しみと愛と友情の心をもって接しておりました。わたしの思い出の中に、このような龍猪が、いつまでも変わりなく残っております。(さとう・とみこ)

Celebration of Life

(人生の有終祭)



佐藤泰生

この度、父の逝去に際しまして、大変多くの皆様から、温かいお心遣いを頂きましたことを、心から感謝申し上げます。

「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。」(マタイ5:3) わたしにとってキリスト教徒の共通の謎として、解説されても自分で考えても後でじっくりこなかった聖句が、今何か実感として会得されたような気のするこのごろです。

96年という長い父の人生でありましたが、父にとってわたしは遅い生まれでありましたので、物心がついて50年という父とのつきあいの思い出など、とりとめのないことを含めまして、親しくしていただいた教会の皆様、父の一生をお伝え申し上げたいと思い、ご好意に甘えここに書かせていただきました。

義弟でありますダグラス・松森兄弟(元神戸伝道部部长)が書いた英文のObituary(訃報)に一言付け加えさせていただけるなら、父は、わたしの子供のときからの長い間の印象では、父であり、先生であり、教会の指導者であり、また「科学者」の態度で真理と対峙していたということでありました。

そのような父から教会の教義に関して多くのことを教えられました、その昔『聖徒の道』の中に、モルモンの教義を連載して書くに当たって、父が当時、新宗教連盟の大石会長さんとモルモンの教義について議論をした際、モルモン教会では啓示が継続している信条があるという教義が、大石会長さんが唯一大変感心しておられた、と聞きました。

そんなことを聞きかじっていたものですから、わたしはあるときに、ソニーの創立者の井深大さんから「モルモン教会とはどんな宗教ですか」と聞かれたときに、「『Progressive Revelation(漸進的に存続する啓示)』が教義的に大きな特徴の教会のようです」とお答えしたことを覚えております。

一面大変変わっていた父でもあり、

「知恵の言葉はいちばん大事だからどんなときでも守れ」とか「おまえはおれの跡は継ぐな」とか言われたり、また一面、大変ちゃめっけのある父で、「翻訳というものは聖霊の導きがなければできないものだ。次の和文を英訳してみろ。おまえの訳はほとんどの外国人には分からないはずだ」と、例に出したのが、「一富士、二鷹、三なすび、梅にうぐいす、竹に虎、虎を踏まえた和唐内、内藤様は下がり富士、富士見西行後ろ向き」というもので、こんな江戸のしり取り歌など、確かに翻訳できるわけはありませんが、しかし、この文は今でもわたしの仕事で国際担当と話をする際に、例に使っております。

このようなことで、父は聖典の翻訳に大変気を遣っており、よく聞かされたのは、キリストがバプテスマを受けたとき、「聖霊が……鳩の下るように」(旧版『モルモン経』1ニーファイ11:27)との字句を翻訳するときに、当時、太平洋地区担当の十二使徒補助であった現在のゴードン・B・ヒンクレー大管長と議論になり、最後に「鳩が出たのか、出なかったのか」との質問に「鳩は出なかった」とのお答えを得て、先の日本語の表現になったということでありました。

知恵の言葉は、プライス兄弟に書いていただいた、父が改宗するきっかけとなった、「一杯のお茶」の話の中に出てきますが、確かに、今でもわたしが酒も、たばこも、お茶も飲まないのを「なぜですか」とよく聞かれ、その度に「実はこういう訳で、父がモルモン教会に改宗したものですから、親孝行のつもりで飲まないでおります」と言って、大体どのような席でも許していただいておりますが、中には、にこにこしながら「酒とたばこは分かるが、お茶は健康に良いのではないか」と言う意地の悪い先輩もおり、そんなときには「いやこれは、世の中で最も非科学的話ですから、科学的な理屈では分かりません」と言って、しのいできております。

こんなことを話していた父も2年ほど前から、同じことを繰り返し話すようになり、元宣教師で現在AT&Tの太平洋海底光ケーブル担当の部長でよく日本に来られるガンダーセン兄弟から、父と会ったけれど具合が悪くなっ

佐藤龍猪兄弟の葬儀に集う親族と友人たち



たみたいですね、と聞かされておりました。

また、このころからソルトレークの父の家を訪ねた方には、徳川公遺訓の掛け軸の「人の一生は重荷を負って、遠い道を行くが如し、あせるべからず……」を繰り返し度々説明し、南条姉妹をはじめ、ソルトレークにおられる皆様には、ほんとうにご迷惑をかけていたことと思い、申し訳ありませんでした。

こんな親と子の縁の間でしたので、遠く離れておりましたが、以前何回か、目が少し悪かった父が転んで体を打って具合が悪く寝込んだときには、大体直ると分かっておりましたが、そのときに、もう日本に帰って来いよ、と言っても、いやあ、ここがいい、帰らないよ、と言う父でありました。

それは、明治32年生まれの子が、少年時代に読んだ紀行文の中に「明け方、ロッキー山脈を越えたユニオンパシフィックの夜行列車が、ソルトレークの駅に着いたとき、駅頭から見た朝日に輝くモルモン宗の神殿は、この世のものと思えない美しい光景であった」と書いてあったという、この一文が、父をソルトレークに引き止めたものと思っております。

そして、今年の正月ごろからは、毎週1回かかってくる電話でも、悪くなってきた父の様子が、随分と分かってきておりました。

普段離れている親は会うと安心して死期を早めると言いますが、今年の正月ごろから6月にコロラドでわたしの仕事で世界鉄道研究会議があり、基調講演をするので会いに寄るからと話しており、また4月には、私事ですが運輸省の推薦で、科学技術庁長官から、科学技術功労者の表彰を受けたことを電話で話したときには、大変喜んでくれました。

6月13日にサンフランシスコから、義母の登美子姉妹に電話をかけたとき、父は電話口に出られなくなり、翌14日の電話では、看護婦さんが来て診たところ、心拍が強いので心配ないということで、それでは、仕事を片付けて土曜日に寄るからと言い、翌15日の朝に父の家に行ったときには、話はずきませんでした。父に会って「来たから安心してゆっくり寝ていなさいよ」と言い、午後から父は静かに休んでおりました。

わたしは16日からの仕事を代わってもらって家にいることにしました。義妹の美智子姉妹と義弟の幸二兄弟が帰った夜10時には、まだ安らかに眠っておりましたが、10時半に、登美子姉妹と二人で寝返りを打たせるために寝台に行ったときには、息を引き取っておりました。このようなことで、父にとって大変安らかな最期でありました。

その後、18日の19時から20時に予定したワサッチメモリアルパークの通夜

には、5時半ごろから9時過ぎまで大勢の方が来てくださいました。また19日のフェアモントワードでの告別式には、ホールいっぱいの方々に来ていただき、また日本から多くの献花を送っていただき、義母にはわたしたち家族が大変お世話になった十二使徒定員会会長代理のボイド・K・パッカー長老から「Blessing（神の恩寵）でしたね」と声をかけていただきました。

父のObituary（訃報）を見たワシントンD.C.の知人からはファックスに「すばらしいお父様で、ほんとうにご葬儀はCelebration of Life（人生の有終祭）でしたね」と書いていただきました。

父からは、非常に多くのことを教えられました。奇跡としか言いようのない事実も何度か目にしていまいりました。しかし、最後に教えられたことは、この世の中のことについて「物」が豊かであっても、「心」が豊かであっても、決して神の国に入る条件にはならないということであったと思います。

父は頑固で、人の言うことをきかない、ほんとうに普通の人であったと思っております。しかし、亡くなると、あのような人は、もう二度と世の中にはいない、と思える人でありました。

お世話になりました皆様、ほんとうにありがとうございました。（さとう・やすお）

戦後最初の日本人改宗者 佐藤龍猪・千代ご夫妻

★……この「一杯のお茶」と題する記事は、佐藤龍猪夫妻が改宗するに至った経緯と当時の状況を余すところなく伝えており、1963年10月号の『聖徒の道』に掲載されたものを故人をしのんで再掲載します。（翻訳は一部改訂し、再編集してあります。）

筆者のハリソン・T・プライス兄弟は、1948年に日本に伝道が再開されたときの最初の5人の宣教師の一人で、1976年から1979年まで東京北伝道部の部

長。1992年2月から1994年1月まで日本宣教師訓練センター所長を務めました。

一杯のお茶

ハリソン・T・プライス

19 45年8月15日、大戦が終結したとき、鳴海の町では何のお祝い

も行われませんでした。ただそこには空腹と悲しみがあるだけでした。

佐藤龍猪・千代夫妻は、近所の工場や鉄道への空襲はもはやなくなったとのニュースを聞いて心から喜びました。突然平和になり、大きな銀色のB29が彼らの小さな家の上を再び飛び回ることがなくなったのは不思議にさえ思えました。

窮乏生活の中で

今や焼夷弾は去りましたが、空腹は依然として残りました。政府の米の配給は、一日の大人一人分の量が2歳の子供が食べる量くらいにまで切り詰められていたのです。長い間、人々はか



アメリカ軍人家族の家での聖餐会（1949年）。右から佐藤泰生兄弟、千代姉妹。一人置いてハリソン・T・プライス長老、龍猪兄弟。

えるや木の根、小さなさつまいもを食糧としていました。佐藤夫妻も、彼らの食糧の大半を幼い息子の泰生君と娘の敦子さんに与えていました。子供たちは畳の上に敷かれた布団に寝かされ手厚く看護を受けていたにもかかわらず、終戦直前の8月2日、日本軍の上層部が東京湾で正式に米国に降伏した日、4歳にも満たない最愛の娘の敦子さんが栄養失調と赤痢のために死亡しました。薬を買う少しのお金さえあれば命を救えただろう、と佐藤兄弟は回想しています。

アメリカ軍をいっぱいに乗せた最初のトラックが、鳴海の狭い通りを音を立てて通り過ぎるのを、人々は鍵をかけた戸の陰に隠れてこわごわ見ていました。彼らが目にしたのは、強力な日本の軍隊をようやく降伏させたものの、疲労の色を顔に浮かべた若きアメリカ人兵士たちでした。

不安と恐怖の入り混じった目で、町の人たちはこの異変を見守っていました。しかし、最初に子供たちがこの金髪の侵略者のほんとうの姿を知ることになりました。無邪気で怖いもの知らずの子供たちは通りに出て行き、アメリカ人がほほえみながらトラックからキャンデーを投げて行くのを見詰めていました。しばらくして外国の兵隊た

ちは町中へやって来て、絹や骨董美術品を食糧と交換するようになりました。英語の知識は、空腹で覆われた町中では最も価値のある才能となり、商人たちは競ってこの奇妙な言葉の分かる人を探し求めるようになりました。昔は、物静かな学者であった佐藤氏を『聖書』の狂信者だと言ってあげた人々も、今や町を救う頼みの綱とするようになったのです。

末日聖徒であった 3人の兵士たち

11月22日、寒い静かな日でした。佐藤氏は、町北部の橋近くにある一軒の茶屋で人々と困窮した生活状況について語り合っていました。そのうち辺りが暗くなり、戸外の道端に3人のアメリカ人が立っているのに気がつききました。駐屯地へ帰るための車を待っていたのです。白い息を吐きながら足踏みし、体を温めようとしている様子が店の窓越しに伺えました。店にいた何人かは、彼らを招き入れて暖を取ってもらおうと言いました。しかし、英語を話せるのは佐藤氏だけだったのでした。

「待っている間、中へ入って暖まりませんか」と英語で語りかけたとき、この3人の兵隊たちは驚きの表情を浮

かべていました。佐藤氏は、そのうちの一人が絹や骨董美術品を扱っている佐藤氏の店へ以前やって来たことのあるメル・アーノルド氏であることに気がつきました。ほかの二人は、自己紹介をしてレイ・ハンクスとリード・デービスであると告げました。

彼らは店の中に入ると、火鉢の中のわずかな炭火に手をやり、謝意を表しました。もてなしのしるしに、その家の主人は、訪問者たちにゆで卵をごちそうしたのです。しかし、女の人が最上質の静岡茶を出すと、驚いたことに、それを飲もうとはしませんでした。「ありがとうございます。でもわたしたちは教会で、体は神から授かった神聖なものであり、健康には特別な注意を払うよう教えられています。」

「それは非常に珍しい教えですね。わたしは『聖書』を勉強しましたが、そのようなことは聞いたことがありません」と佐藤氏は言いました。訪問者は、そこで「知恵の言葉」と呼ばれる神からの啓示について説明し、教会の信者たちは古代の記録から書き写された神聖な歴史書にちなんでモルモンと呼ばれていることも話しました。また佐藤氏の求めに応じ、そのアメリカ人のうちの一人は、今度来るときには『モルモン書』を1冊持参します、と彼に約束しました。この3人が大きなトラックに乗って去って行くと、そこに集っていた一人はこう言ったのでした。「珍しいね。あのアメリカ人たちは実に変わっている。」

佐藤家での福音研究会

約束したように、メル・アーノルドとレイ・ハンクスは『モルモン書』を携えてまたやって来て、佐藤家族と一緒に研究会を持つようになりました。佐藤龍猪氏は始めから終わりまで注意深く読み、何度も読み返しては研究し、そして祈りました。そうするうちに、ほかのモルモンの兵隊たちも彼の小さい家へやって来るようになり、佐藤夫妻は子供たちのためにささやかな日曜学校を開くようになりました。しばらくして彼らは毎週の研究会に友達を招待しました。

1946年1月27日の夜、一人の若いモルモンの従軍聖職者、ノートン・ネルソンが雪混じりの嵐について彼らの福音研究会を訪れました。その夜、閉会

の祈りを終えたとき、見ると雲の切れ間から満月が輝き、新雪に覆われた辺りを照らし出していました。嵐ですべての交通は完全に麻痺していたのです。ネルソン長老とその友人たちは深い雪で覆われた月夜の道を、新しく配属された岡崎近くにある連隊本部へと30マイル（約48キロ）も夜通し歩いて帰って行ったのです。

佐藤氏の家では依然として病気が絶えませんでした。新しい友人がキャンデーや食物を持って来てくれたのでした。小さな泰生君は、生まれて初めていろいろな缶詰の果物や肉類を味わったのです。名もない一人のモルモン兵士の行為は、戦後の飢えた時代において人々の命をつなぐ一助となったのです。というのは、数か月の間毎日、この兵士は大きな軍用トラックにパンを積んで町北部の橋までやって来て、まだ温かい幾本もの軍用パン（訳注：恐らく2斤の食パンが一つになったもの）をトラックの上から放って行ったのでした。

この鳴海の町に梅雨がやって来るころには、佐藤夫妻は『モルモン書』が真実の書物であることを確信するようになっていました。町で出会ったお茶を飲まないモルモンの兵隊たちから、彼らの信ずる教えを聞いて以来、佐藤夫妻の生活は大きく変わっていききました。

1946年、夫婦で改宗

1946年7月7日、佐藤龍猪氏は神戸にある関西大学（現在の関西学院大学）のプールでC・エリオット・リチャーズ長老からバプテスマを受けました。龍猪氏の忠実な伴侶である千代夫人も、ボイド・K・バックー長老からその日、バプテスマを受けて教会員に確認されました。これは日本では20年ぶりのバプテスマであり、極東における教会の新時代の始まりでした。

1948年の初め、ホノルルの教会の指導者であったエドワード・L・クリソード長老が日本伝道部を再開しました。その年の6月、初めて5人の宣教師が東京に到着しました。この5人の宣教師は全員、第二次世界大戦で日本と戦った退役軍人でした。

戦後の伝道活動が9,000万の日本人の間に広がっていくうえで、佐藤龍猪兄弟と千代姉妹は、その道を切り開くこ

とに尽力した大勢の人々の一人となったのです。後に教会に加入したたくさんの人々は、佐藤兄弟の小さな家の畳に群がって座り、靈感に満ちたジョセフ・スミスの物語を聞いたのです。何年もの間、新しくやって来る宣教師たちは、老練な佐藤兄弟の我慢強い指導によって、複雑な日本語を理解できるようになりました。佐藤姉妹は宣教師たちの靴下を繕ったり、火鉢で焼いて作った小さなパンをごちそうしたりしました。バプテスマを受ける前、とても具合が悪かった泰生君は、完全に健康を取り戻し、クラスでいちばん大きな子になるほどに成長しました。

1946年6月12日、マシュー・カウリー長老が日本伝道部を旅したとき、佐藤龍猪兄弟を長老に按手聖任しました。日本人がメルキゼデク神権を授けられたのは、数十年ぶりのことでした。佐藤兄弟は、この按手聖任と同時に特別な祝福を受け、新たに組織された日本伝道部の公式の通訳者、翻訳者としても任命されました。

末日聖典の翻訳に向けて

新たに任命された翻訳者の前には、急を要する大きな課題が横たわっていました。伝道部が発展するにつれ、教会の案内用のちらしや手引き、『モルモン経』の再翻訳などの必要に迫られていたのです。アルマ・O・テラー長老が苦勞して最初の『モルモン経』の翻訳を完成してから40年、その間に日本語は大きく変化し、現代化していました。『教義と聖約』と『高価なる真珠』の翻訳もまだなされていませんでした。先祖からの町、鳴海を去って東京へ移り、佐藤兄弟は祈りをもって辞書を開き、翻訳を始めていきました。

細心の注意を払って記された日本語の原稿は、日ごとに増していきました。現代風の靈感に満ちた『モルモン経』が印刷されるまでには何年間も研究、討論、語句の吟味が重ねられました。『教義と聖約』

と『高価なる真珠』もまた同じように、読みやすい日本語に翻訳されました。9年にわたる忍耐強い作業の末、佐藤龍猪兄弟は末日聖徒イエス・キリスト教会の標準聖典の日本語翻訳をついに完了したのです。これにより、ほぼ1億に上る日本人がこの回復された福音の偉大なおとずれを自国語で読めるようになったのです。朝鮮や中国でも、日本語を読める人たちはこれらの出版物を熱心に求めました。こうして、アジアでの偉大な御業がさらに推し進められていったのです。

このように今まで多くの人々の生活を変え、また今後も影響を与えていくであろうこれらの出来事を振り返ってみるとき、この一人の人物が最初に福音のおとずれに接したことは、何と驚くべき業ではないでしょうか。15年前の寒い夜、日本の鳴海という町で、名もないアメリカ兵たちがあの小さな茶屋へ入って行ったときの様子が、目の前に浮かぶようです。もしあの晩、この「珍しい人たちが」お茶を飲んで去って行ったとしたら、どうなっていたらどうかと考えさせられます。

世間には佐藤兄弟のように、この偉大なおとずれを待っている人たちがいます。あなたは今日、そのような人に出会うかもしれません。□



東京神殿宣教師をしていたときの佐藤龍猪兄弟（1981年）

優れた教育者でもあった 佐藤龍猪兄弟

——「靈性が高められるにつれ、
その先が見えてくるのです」——



横浜ステーキ
横浜第二ワード
阿部千枝子

わたしが佐藤龍猪兄弟に初めてお会いしたのは、伝道から帰還し、東京で仕事を見つけ中央支部に出席したとき（1958年）でした。

東北の仙台支部で純粋な信仰を持ち続ける兄弟姉妹の中で育てられたわたしは、新しい環境の中央支部の雰囲気にはすぐにはなじめず、佐藤兄弟ご夫妻ともほとんどお話しする機会はありませんでした。しかし、毎週教会で最前列のお席でじっとお祈りされている佐藤兄弟のお姿を拝見するようになって、すばらしい支部に出席できる喜びと特権に心から感謝できるようになりました。

その後間もなく奥様が突然お亡くなりになりましたので、このときこそ扶助協会の活躍の場とばかり、もう一人の姉妹とともに佐藤家を訪問させていただきました。「家内がきちんとやってくれておりました。そのぬくもりの中で暮らしたいので、どこも片付けないでください」と言われました。

それでは何かお食事でもお作りしましょうかと申し上げましたところ、「いや、いいですよ。今日は、わたしがおいしい天ぷらをごちそうしましょう」とおっしゃり、泰生兄弟とともに温度計を使って油の温度を測定しながら「この温度で揚げた天ぷらがいちばんおいしいですよ」とおっしゃって、天ぷらをごちそうしてくださいました。

何かお掃除でもと思い、ふと茶だんすに目を向けますと、まるで学校の実験室の棚のように、原子記号で名前が書かれたお塩をはじめとする数々の調

味料の瓶がきちんと整とんされて置いてありました。

佐藤兄弟は、ほとんど教会ではご自分の過去についてお話しなさいませんでしたので、このときも東北大学金属材料研究所（金研）で鉄（KS鋼）の研究者として世界的に有名な本多光太郎博士の愛弟子として鉄の腐食という最先端の研究をされていた科学者であられたことにわたしは気がつきませんでした。

そんなある日、たまたまわたしが仙台の姉の家を訪ねた折、少し勉強しようと『モルモン経』を持参しておりました。姉の主人が、ふとその本を取り上げて最後のページをめくるやいなや「ここに書いてある佐藤龍猪という人はだれなの」と驚いたように尋ねますので、「うちの教会で使っている大切な本を翻訳された方です」と答えますと「この人は、多くの師範学校（現宮城教育大学）時代の化学の先生に違いない。きっとそうだよ！ こんな珍しい名前の方が日本に二人といるはずがないから」と興奮した様子で語り、「もしこの方にお会いしたら、昔、仙

台の宮城師範学校で化学の先生をしておられたかどうかぜひ聞いてほしい」と頼まれました。そして、とても懐かしそうに、その佐藤先生についていろいろな話をしてくれました。

佐藤先生は大変すばらしい化学の先生で、いつも実験ばかりされ、その教え方がとてもユニークなので、すべての生徒に大変慕われていた方とのことでした。また、ある実験の時間にパケツいっぱい目薬を作られ、生徒たちに家に持ち帰らせたそうです。当時東北地方は極端に貧しく、眼病を患っても医者にも行けず、目薬を買うお金さえない人が多かったことからの配慮だったと思われます。

東京に帰り、早速佐藤兄弟に義兄のお話をしましたところ、「そうですね」とおっしゃって「目薬の話が出たでしょう」と丸い眼鏡の奥の目を細められ、いたずらっぽくお笑いになったお姿が今でも脳裏にくっきりと焼きついています。

昭和50年（1975年）8月21日より3日間、戦後初めての仙台訪問を果たされましたが、突然のご帰仙にもかかわらず、今は東北の教育界の重鎮となられた教え子が大勢集まり、佐藤兄弟のために歓迎会を催されました。わたしの弟の家にお泊まりいただくとのことでしたので、わたしは飛ぶようにして仙台に帰り、一晩のみでしたが弟の家でお会いすることができました。

わたしの弟が車で佐藤兄弟のお供をさせていただきましたが、すごい方々とお知り合いなのは驚いたと言って



久し振りに帰国し（1975年）、仙台で教え子と会う

おりました。最後にあの有名な「荒城の月」の作詞者である土井晩翠先生のお墓にもうでたいと言われるので、ご案内すると、「実は土井晩翠先生は、わたしたち（最初の奥様であられる千代姉妹）の結婚式のお仲人さんだったんですよ」と打ち明けられ、びっくりしたとのことでした。

お帰りになる23日の夕方、仙台駅にお見送りに参りますと、前日の歓迎会に出席されなかった方々を含め、多くの教え子がお別れに来られました。その帰り、一人の教え子の方（どこかの校長先生）がわたしを車で送ってくださいましたが、その車の中でわたしに

こう言われました。「わたしたちは同窓会を開く度に、佐藤先生のような方がいらしたら、数学とか化学を嫌いな子供は一人もいなくなるでしょう、我々は教育者として、佐藤先生のような教え方をしなければいけない、と話し合っているんですよ。あなたがもし佐藤先生とお親しいのなら、先生にぜひお伝えください。仙台にお戻りになって、余生を奥様とともにこの地で過ごしてください。おうちは教え子たちが建てさせていただきますから」と。

これまで数々の忘れ得ぬ思い出とともに、心にしみる教えをたくさん頂きました。その中でも最も心に残る教え

の一つを最後に記したいと思います。「現世と来世の間には薄い幕のようなものがあり、その先が見えないため、人々はこの世的なものに執着し、苦しみ悩みもがいているけれど、霊性が高められるにつれ、その先が見えてくるのです。我々の体は神を宿す尊い宮であるから、常に清く保つようにしなければなりません。知恵の言葉も、そのほかのすべての戒めも、実はその霊性を高めるために神より与えられたものであるのです。お茶がどうのこうのといっって、わざわざ分析したりする必要なんか全然ないのですよ。」（あべ・ちえこ）

佐藤龍猪兄弟のソルトレーク時代

—— 「まさに、この末日のために予任された人」 ——



ソルトレーク・
グラナイトステーキ
第1ワード
鈴木 健二

佐藤兄弟は日本での仕事を終えた後、ハワイに移り（1965年）、約1か月かけて神殿の儀式の言葉を初めて邦訳されました。最初の予想では、この仕事は6か月かかるだろうと言われていたのですが、毎日毎日神殿に参入し、砂浜を歩きながら瞑想を続けて翻訳したと語っておられました。

その後、ブリガム・ヤング大学に客員講師として招かれ、比較宗教学と日本語を教えられました。佐藤兄弟は自らもおっしゃっていたように非常な自由主義者で、教える生徒たちとはすばらしい関係を築かれ、多くの人から慕われ尊敬されていました。

系図資料のパイオニア

1966年にソルトレークに移り、ユタ系図協会では仕事を始められました。その仕事の中でも有名なのが『日本の系

図資料』と『記録提出の手引き』の出版です。また、系図を調べるときに名前が難しく読めないという日本人のために約5年間働き、各地から資料を集めて日本人の名前のカタログを作られました。コンピューターのない時代に、6万3,000余りの難読姓氏を漢和辞典の方式で、いわゆる部首引きならびに画引きで索引を付けた姓氏読み方大

辞典を作るという、そのころではほんとうに画期的な偉業を果たされたのでした。そして、日本で系図資料のマイクロフィルム化が始まる際にも中心となって働かれ、まさに系図に関してもパイオニアでした。

アメリカでは各分野で傑出した人を「ルネッサンスの人」と言いますが、佐藤兄弟もまさにそういう「ルネッサンスの哲人」でした。化学、翻訳、日本語の研究、地震学、気象学、『モルモン書』の研究、日本の宗教（特に密教の研究）、古文書の研究、ヨガの研究、比較聖書学など実に広い範囲にわたって研究を続けておられました。



ユタ系図協会の同僚たちとクリスマス・パーティー（1970年）



「佐藤龍猪兄弟をしのぶ会」が8月3日（土）、東京神楽館で催された。この会には、アジア北地域会長会のデビッド・E・ソレンセン長老をはじめ、遺族の佐藤泰生兄弟ご夫妻、龍猪兄弟が所属していたグラナイトステーキ第1ワードの元監督であった鈴木健二兄弟、生前親しくしていた兄弟姉妹など80人ほどが出席した。特に龍猪兄弟が東京に在住していたころに集っていた中央支部（現渋谷ワードの前身）の教会員にとって、この会は同窓会のようなものであった。



佐藤兄弟は明治生まれの方らしく、非常に礼儀正しく物静かな紳士でした。ですから何事にも謙遜に真摯な態度で臨んでいらっしゃいました。わたしが監督として仕分の一の面接のために佐藤兄弟の家を訪問したとき、きちんと正座をして年の最後の分を支払われた姿が鮮明に心に残っています。

佐藤兄弟は決して堅苦しい学者ではなく、非常に人間的な面をお持ちでした。特に年を取ってから、日本の稲穂のように頭を垂れ、腰を低くして周りの皆さんに感謝の気持ちを述べるとともに、彼の経験を通じて得たすばらしい証と話をしてくださいました。

終生、学びの学徒

佐藤兄弟が亡くなられる2週間前、わたしは佐藤家を訪問し、日本語で神権の祝福を受ける機会を得ました。ちょうどそのころまで、佐藤兄弟は毎朝『モルモン書』を読んでおられました。また、佐藤姉妹が系図を調べていて難しく読めない姓氏は、生き字引きの佐藤兄弟に尋ねます。すると彼は、自分でも分からないと漢和辞典を調べてその漢字を一生懸命覚えておられたということです。96歳にして毎朝そうした勉強を欠かさず続けておられたのです。

佐藤兄弟は仙人のような方で、自分

の健康状態をよく御存じでした。かなり体も衰弱していて、医者に聞くとあと3日の命と言われたということで、わたしは息子さんの佐藤泰生兄弟の到着が間に合えばいいかと願うばかりでした。しかし神権の祝福を与えながらわたしが感じたのは、福音の中にある「最後まで堪え忍ぶ」という気持ちでした。佐藤兄弟はその心構えができていて、多分、自分が天に帰る時期も御存じだったのではないかと思います。

そしてやっと佐藤泰生兄弟が訪ねてこられたその日に、泰生兄弟と話をし終わった後、15分くらいして静かに息を引き取られたと聞いています。2週間前の祝福のとき、佐藤兄弟はわたしの手を取り「泰生が来るまでは大丈夫ですよ」とおっしゃったことをよく覚えています。佐藤兄弟は良き父親として息子さんのことを心から誇りに思い、毎週土曜日になると短い時間でしたが、電話で日本に住む息子さんと話し励まし合っておられました。また義理のお子さんやお孫さんにも囲まれ、善き夫、父親、おじいちゃんでもありました。

大管長会からの感謝状

葬儀には、十二使徒定員会会長代理のボイド・K・パッカー長老をはじめ、名誉中央幹部のヤコブ・ディヤガ

一長老、七十人第一定員会のウィリアム・R・ブラッドフォード長老が出席されました。そして、パッカー長老が大管長会からの特別な感謝状を読まれました。このほかにも多くの人が話をされましたが、特に心を打ったのは、1946年佐藤兄弟が最初の奥様とともに改宗されたころ、日本に進駐していたアメリカ兵の会員やパッカー長老などの友達にあてて書かれた手紙でした。その手紙は、ほんとうに格調高い美しい英語で書かれていました。日本の聖徒のために祈ってください、良い資料があったら送ってくださいという内容のものだったり、当時ほんとうに困窮した時代だったと思いますがクリスマスの贈り物をやり取りしたりする、佐藤兄弟の温かい人柄がじかに伝わってくるものでした。

今、佐藤兄弟の遺体は、雪を頂いたロッキー山脈を見渡せるすばらしい場所にあるお墓に納められています。佐藤兄弟はまさに、この末日のために神様から予任された人でした。（すずき・けんじ）

*

思慮深く、謙遜であった「おじさん」

——^{なつ}龍猪兄弟が改宗したころの^{なるみ}鳴海町での思い出——



名古屋西ステーキ
犬山支部
本島園子

佐 藤龍猪兄弟の悲報に接し、長い間ごぶさたしていたにもかかわらず急に昔のことが思い出され、懐かしい、いろいろな思い出がわき出てきます。

1946年4月、女学校に入学して英語の課目に戸惑いを感じていたとき、2年先輩の友人に誘われ、英語が教えていただけるということでそのお宅に伺ったのが最初でした。白髪交じりで眼鏡をかけ、いつもニコニコ顔でとても幸福そうなおじさんでした。

わたしの記憶によると、彼の無私の奉仕は1945年終戦当時より続いていました。当時彼は英語の話せる数少ない貴重な日本人でした。敗戦後の日本は精神的にも物質的にも飢えており、困難な状況にあったとき、鳴海町という片田舎に一人の、というより一家族の手によって、何物にも代えることのできない暖かいともしびがともされようとしていました。

佐藤兄弟は旧東海道に面した呉服店に出入りするアメリカ兵のため、ご自分の余暇を提供して、店主とアメリカ兵との通訳として奉仕することによって、末日聖徒イエス・キリスト教会の兵隊さんと出会いました。後日この福音を受け入れ、隣近所ばかりか町全体のすべての人々に自宅を開放し、惜しむことなく福音の道に導いてくださったのです。

毎週土曜日には聖書研究会を開き、『旧約聖書』に登場する人々（アブラハム、イサク、モーセ、ヨブ、ヨシュア、ダビデなど）について教え聞かせ、日曜日にはアメリカの兵隊さんと日曜学校を開いて、兵隊さんが語る神様に

ついでに^{あかし}証などを通してわたしたちに伝えてくださいました。

佐藤家には1台の小さなオルガンがあって、奥様の千代夫人が伴奏してくださり、声高らかに賛美歌を歌ったことを覚えております。アメリカ兵とともに口にする賛美歌は英語で、ほとんど毎回同じ曲だったようです。特に現在の『賛美歌』55番の「神よ、汝れに近寄らん」は佐藤兄弟の大好きな曲でした。

人々に親切であり、思慮深く、謙遜で学識のあるおじさんでした。（わた

したちは佐藤兄弟を「おじさん」と呼んでいました。）

1949年に教会のお仕事のため東京に転居されるときは、わたしたちにとって大黒柱を取られるような不安を覚えたものでしたが、老齡の母上と離れて移って行かれました。神様に忠実であった佐藤のおじさんは、鳴海に住んで、ご一緒させていただいた兄弟姉妹、友人、またわたしにとって誇りです。

1945年以来ひとかたならぬお世話になりました。特に『モルモン経』『教義と聖約』『高価なる真珠』を日本語で手にすることができたときの感激が今鮮明によみがえってきます。佐藤兄弟の日常生活におけるお人柄は身近な良い模範でした。今はたくさんの良い贈り物を残してくださった佐藤のおじさんに感謝、感謝の気持ちでいっぱいです。（もとしま・そのこ）



進駐軍の教会員によって開かれる日曜学校に集まってくる近所の子供たち

米国から帰国して懐かしい友人を訪ねた（一九七五年）。右端は奈良富士哉兄弟（一九九二年死去）



佐藤龍猪兄弟との 翻訳部時代の思い出

——「わたしたちは物事の本質についてよく考えなければ、
結局のところ靈感を受けることはできないんだよ」——



町田ステーキ
町田第二ワード
渡辺 驥

1957年、当時の伝道部長の計らいで、本部の離れの翻訳室で佐藤龍猪兄弟のアシスタントとなりました。折しも翻訳室では、以前の『モルモン経』、初めて邦訳された『教義と聖約』『高価なる真珠』などの聖典が出版に向けて最終的な準備段階に入っていました。

わたしは佐藤兄弟と二人で、来る日も来る日も聖典の英文と日本語をお互いに読んで付き合わせをしました。この仕事はどちらかというと単調な作業で、午前中はまだしも、午後になると上まぶたと下まぶたが平和条約を結んで、ついうとうとしてしまいます。でも、どちらかがはっとして原稿に目を戻すと、ちょうどそこが大変なミスがあるところなのです。「龍猪兄弟、ここはモルモンじゃなくモロナイです

よ。」そういうことが度々あり、楽しく仕事をしました。

標準聖典の出版が終わると、佐藤兄弟は『基督イエス』『信仰箇条の研究』など教会の重要な出版物を翻訳してわたしたちのために残してくれました。佐藤兄弟の翻訳のおかげで、今の日本の教会の基ができたと言っても過言ではないと思います。なぜなら1957年まで『教義と聖約』は日本語で出ておらず、『高価なる真珠』もそうでした。わたしたちは、これらの聖典により近代の預言者の言葉を直接目にし、より確かな信仰と証を築くことができたのです。

いろいろな面で、佐藤兄弟からは教えられることばかりでした。ルソーは「農夫のごとく働き、哲学者のごとく考える」という言葉を残しましたが、佐藤兄弟はわたしに、物事の本質について考えるということをしつかりと教えてくれました。今でも佐藤兄弟が、あの懐かしいテノールの声で、「驥兄弟よ」と呼びかける声が耳に残っています。「わたしたちは物事の本質についてよく考えなければ、結局のところ靈感を受けることはできないんだよ」

と佐藤兄弟は言いました。ほんとうにそう思います。

息子さんの泰生兄弟に佐藤兄弟の最期の様子を伺いましたが、ほんとうに安らかで、大往生であったということがよく分かります。『教義と聖約』の中で神様はこうおっしゃっています。「わたしにあって死ぬ者は死を味わわないであろう。死は彼らにとって甘いからである。」(教義と聖約42:46)佐藤兄弟の死は、まさにこの言葉のようであったと思われます。

わたしが初めてソルトレークを訪れた1968年、佐藤兄弟姉妹とともにゴードン・B・ヒンクレイ長老(当時十二使徒定員会会員)の家に招待されたときのことも懐かしい思い出です。

佐藤兄弟は、いつもわたしにこう言いました。「驥兄弟、わたしは2001年まで生きたい。」なぜですかと問うと、「そうなるわたしは3世紀にわたって生きることになるから。そのときにはだれかが、佐藤龍猪は300年生きたと言うかもしれない。だからぜひとも2001年まで生きたいんだ。」佐藤兄弟に倣って、これからの人生を強い信仰と証をもって生きていきたいと思えます。

佐藤兄弟の声が聞こえてくるようです。「驥兄弟よ、50、60は花ならつばみ。70、80は働き盛り。90になったと迎えが来たら、今は留守だと言えいい。100になったとまた来たら、耳が遠くて聞こえません。」佐藤兄弟の、あの独特の優しい声が聞こえてくるようです。(わたなべ・かん)

1996年度「クモラの丘霊園」分譲のお知らせ

「クモラの丘霊園」分譲の今年度募集の締め切りは、1996年12月31日です。永代使用料は毎年値上がりします。分譲希望者は、早目にお申し込みください。

1. 墓地永代使用料
支払い方法 1区画 315,000円
一括または分割払い。分割払いの場合は、初回金5,250円、以降毎月5,250円59回払いの無利子分割払いとなります。
2. 墓地管理料 年間 3,000円(初回金とともに1年分を前納し、以降毎年9月末日までに支払うものとします。)
3. 申し込み方法 以下の書類をクモラの丘霊園事務局に提出してください。
(1) クモラの丘霊園使用申し込み書
(2) 住民票
(3) クモラの丘霊園永代使用契約書 2通
(4) 銀行自動振替手続き書類

4. 今年度申し込み期限 1996年12月31日
5. 墓所の指定 申し込み書類受領確認の後、順番に行います。
6. 初回金および管理料の振込先 三和銀行青山支店 当座預金 613071
末日聖徒イエス・キリスト教会
代表役員 北村正隆
7. お問い合わせ 〒106 東京都港区南麻布5-10-30
末日聖徒イエス・キリスト教会内
クモラの丘霊園事務局
電話 03(3440)3678
8. その他の情報 分譲開始年月日: 1982年9月19日
分譲数: 1,600墓所中、596墓所が分譲済み(1996年8月1日現在)。
他霊園との比較—永代使用料は他霊園の5分の1から8分の1。

*クモラの丘霊園の振込先銀行口座が平成8年8月1日付けで変更となりました。永代使用料、管理料などの霊園諸費用の支払いは今後新口座に振り込んでください。

東京ステーキ吉祥寺ワードの 金箱光枝姉妹，満100歳を祝う

わたしは、100歳100歳と皆さんに騒がれるのが嫌なんです。何も人のお役に立てずに過ごしてきたのですもの」と、謙遜に語る金箱光枝姉妹は、5月23日に満100歳になりました。長野県でメソジスト派のクリスチャンの一家に、子供9人の長女として生まれ、19歳で5歳年上の金箱氏と結婚し、上京して以来、東京に住んでいます。2男4女に恵まれ、関東大震災と東京大空襲のとき、家も何もかも焼けましたが、家族は全員無事でした。昭和21年、伴侶が進駐軍のジープにひかれて亡くなるという突然の不幸に見舞われ、失意の底に落とされました。しかし、持ち前の前向きな性格で、お子さ

んたちと手を取り合って試練を乗り越え、今日に至っています。

1975年12月に吉祥寺の閑静な住宅地の一角に転居し、末娘の悠子さんと住んでいます。駅から家へ向かう途中に吉祥寺の教会堂（ステーキセンターの建設のために、当時の古い教会堂が取り壊される直前であった）があり、金箱姉妹はその教会に心引かれたのでした。しかし、家族から「その教会は、お勉強をしっかりなさる特別な方しか入れませんよ」と言われ、「わたしにはとても……とがっかりした」と語っています。当時、教会に出入りする若い外人（宣教師）を見ても、いつも重そうなショルダーバッグを抱えていたからです。

そんな折、翌1976年、二人の姉妹宣教師が金箱姉妹のお宅を個別訪問して招き入れられ、回復された福音について伝えるようになりました。東京伝道部の専任宣教師として働いていたわたしは、その宣教師たちの後任として当地に来て、この優しく謙遜でつつましい金箱姉妹に初めてお会いし

ました。

レッスンはどんどん進み、その年の11月に金箱姉妹はバプテスマを受けました。満80歳の決断でした。改宗前は熱心にメソジストの教えを守っていましたが、「『ほかの教会の友人に誘われても絶対行くことを許してくれなかったのにお母様はさっさとこの教会に入られた』と子供たちが言うんですよ」と笑って話される金箱姉妹をこの教会に導いたものは、まさしく神様の導きに違いないと思います。

以来20年、体が不調のとき以外は休むことなく教会に集い、自宅では常に聖典を手もとに置いて過ごす日々です。冒頭の「お役に立て」ないどころか、これまで何人もの教会員の出産のお祝いにと、白い毛糸で赤ちゃんのソックスとベストを編んで贈り続けているのです。

足腰の弱くなった金箱姉妹の教会への送迎は、ワードの会員たちに頼るところが大なのですが、金箱姉妹が忠実な信仰生活を続けるうえでのいちばんの助けは、末娘の悠子さんの協力と励ましにほかなりません。金箱姉妹のために神殿着を縫いそろえたり、毎月のフルーツバスケットの準備も金箱姉妹に代わってしています。

金箱姉妹とお子さんを訪ねて、いつも感じるのは「美しい人々」ということです。それは、良い生活をしようと努めている人たちの内面からの美しさが、ほほえみにも言葉にもあふれ出ているからです。

金箱姉妹の顔には、しわが刻まれていても、精神の若々しさ、かわいらしさが表れていて、「この方のように年輪を重ねたい」との気持ちを抱かせてくれます。

金箱姉妹は、まさに次の聖句のような姉妹です。「力と気品とは彼女の着物である、そして後の日を笑っている。彼女は口を開いて知恵を語る、その舌にはいつくしみの教がある。その子らは立ち上がって彼女を祝し」（箴言31：25-26、28）彼女を知る者もともに彼女を祝し、彼女の高潔な模範をたたえます。主とともに歩まれている金箱姉妹が、これからも末長くお元気でわたしたちの励ましとなり、力となってくださるようお祈りします。（レポーター：杉本美世子、東京東ステーキ長生ワード初等協会教師）



満100歳を迎えた金箱光枝姉妹



所在地：埼玉県入間郡毛呂山町長瀬1313 武蔵野霊園内
（池袋駅から東武東上線・越生線で約1時間、武州長瀬駅下車、徒歩7分）

8月に召された専任宣教師

第203期生 8人



前列左から1-2, 後列左から3-8

〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 田中美樹	神戸S／三木B	東京南伝道部
2. 三明多美子	仙台S／長町W	東京北伝道部
3. 池田信康	名古屋S／瀬戸B	札幌伝道部
4. 出水洋	オーストラリアシドニー・モートデルS／ハイパークW	仙台伝道部
5. 服部学	神戸M／奈良D／奈良B	東京北伝道部
6. 住吉 顕	広島S／高須W	東京南伝道部
7. 吉澤国夫	沖縄那覇S／小禄W	神戸伝道部
8. 宮崎健太郎	大阪東S／茨木第一W	東京南伝道部

S：ステーキ, M：伝道部, D：地方部, W：ワード, B：支部

役員の異動

1996年7月16日から1996年8月15日まで
に管理本部会員統計記録課に通知のあ
った役員の異動（敬称略）

- 札幌西ステーキ
新ステーキ会長：小野 誠
- 仙台ステーキ泉ワード
新監督：荒木健弘
- 東京北伝道部新潟地方部新潟支部
新支部長：八島正則
- 東京南ステーキ東京第一ワード
新監督：Bradford Hall
- 東京西ステーキ府中ワード
新監督：本間信哉
- 広島ステーキ岩国支部
新支部長：古谷明寛
- 岡山伝道部高松地方部徳島支部
新支部長：赤松康充
- 福岡伝道部熊本地方部熊本北支部
新支部長：池上修一

皆さんの原稿を 募集しています

◎ご投稿の際には連絡先（住所、電話番号）、教会での責任（役職名）、所属ユニット名を記入し、写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただくことがあります。

◎お願い——海外に召される日本人宣教師たちを紹介いたします。伝道の召しを受け取り次第、編集室に写真を添えてお知らせください。（氏名〔フリガナ〕、伝道部名、召された月を明記）

◎あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会 『聖徒の道』編集室

☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275

教会配送センター移転のお知らせ

現在、川崎にあります教会配送センターは、10月28日をもって下記の住所に移転します。移転作業のため10月7日から27日まで配送業務をお休みいたします。10月7日以降の注文については、お届けが28日以降になりますのでご了承ください。

新住所：
〒133 東京都江戸川区西小岩5-8-6
末日聖徒イエス・キリスト教会
資材管理部配送センター
TEL 03 (5668) 3391

海外に召された日本人宣教師



杉本由香
カリフォルニア・フレズノ
伝道部
1996年7月、大阪東S／
高槻第一W出身



関 雅美
ソルトレーク・テンプルス
クウェア訪問者センター伝
道部
1996年9月、高崎S／高
崎W出身

● ろう者大会 の お知らせ ●

期日：11月2日(土)～4日(月)
対象者：ろう者およびろう者を援助している人
集合場所：神殿別館 11月2日(土) 午前11時30分(神殿参入者のみ)
横浜ステーキセンター 11月2日(土) 午後6時
宿泊：篠原青少年の家または会員宅
プログラム(概要)：神殿参入、交流会、手話研究会、証会
連絡先：田中靖也 TEL&FAX 045(491)6367